

全道中

No.92

2023.3



北海道中学校長会

No. 92

全道中

2023－3



運 営 方 針

- 1 本会の組織と機能を生かし、本会の目的である「中学校長の職能の向上と、北海道の中学校教育の振興」の達成に向け、校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、会の総力を結集して活動の充実と諸問題の解決に努める。
- 2 道教委をはじめ、全日中、四種校長会及び教頭会等の教育関係諸機関や、PTAをはじめとした諸団体との連携を深め、国及び道・市町村教委の動向を踏まえて適切な対応に努める。
- 3 校長としての学校経営力の向上を図り、道民の負託に応える中学校教育の創造に努める。

北海道
中学校長会

第95回 北海道中学校長会 総会・研修会 (4/28)



理事研修会 (4/29)



第73回 全日本中学校長会 総会 (5/18)



道小・道中合同事務局研修会・合同学習会 (7/15)



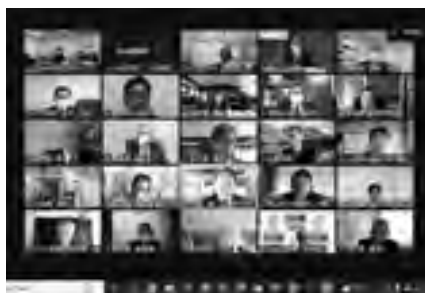
道教委との意見交換会・各課懇談会（8/5）



全日本中学校長会常任理事会（10/19）



全日本中学校長会理事会（10/19）

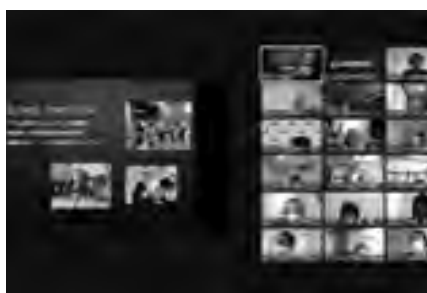


全日本中学校長会研究協議会

北海道（札幌）大会（10/19～21）



全日本中学校長会研究協議会 北海道（札幌）大会（10/19～21）



巻頭言

◎「心こそいくさする身のいのちなれ そろゆかば生き そろわねば死す」	北海道中学校長会会長 野崎 均
---------------------------------------	-----------------

潮流

◎中学校教育の一層の充実を願って	北海道教育委員会教育長 倉本 博史
◎「新しい道研」のスタートに向けて	北海道立教育研究所所長 櫻井 良之

論考

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営	より良い教育活動を目指す学校経営 全ての子供の未来のために学びを保障する学校経営 地域とともに生きる学校をめざして 生徒に自信をつけさせる学校づくり	八雲町・落部中 間瀬 龍生 妹背牛町・妹背牛中 奥山 直人 浦河町・浦河第二中 佐藤 恵美 根室市・広陵中 二本柳 千尋	14 15 16 17
◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導	学びに向かう力を育む生徒指導 職員の和を大切にした協働体制による教育活動 人間的な触れ合いを大切にした愛情と信頼に基づく生徒指導 〳四五の心を使い、九〇の目で見、感じて〳 心豊かで主体的に生きる力を「つながり」ではぐくむ 生きる力をはぐくむ生徒指導 〳子供たちの「見守られる喜び」を育む〳	千歳市・千歳中 金森 直人 中富良野町・中富良野中 平田 隆男 旭川市・東明中 中山 洋 帯広市・川西中 今野 典之 北見市・高栄中 小野寺 哲浩	18 19 20 21 22
◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習	主体的に生きる力を育むふろさと学習 地域との連携をいかした主体性を育む体験活動 持続可能な地域づくりを目指す体験学習 様々な価値観に触れ、自分の生き方について考える体験学習	小樽市・潮見台中 高橋 恒雄 函館市・旭岡中 中田 和子 浜中町・散布小中 大和 洋一 札幌市・羊丘中 佐野 友美	23 24 25 26

特集

テーマ

◎学校教育の今日的な課題から　　～更なる学校力の向上を目指して～

小中併置校の強みを生かして「主体性」と「自己表現力」を育む

～小中コラボ授業から～

「自己肯定感」の醸成で促す健やかな成長

～大人が用意する居場所と子供同士で築く絆～

生徒一人一人が自分らしく生き生きと活動できる学校へ

札幌市・福移中 瀧澤佳実……28

標津町・標津中 飯田雄士……31

新十津川町・新十津川中 柴田猛……34

今年の道中

◎第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会を終えて………研修部長 秀島起也……37

◎第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会提言概要

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現

～人づくり・まちづくりの一体的な取組を通して～

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現

～地域の特色を強みに変える

岩見沢市・栗沢中 伊藤聰……39

「チーム学校」の取組を通して………壮瞥町・壮瞥中 松岡賢晃……43

◎各部門の活動

令和四年度の活動及び次年度への展望

各部の活動（経営部・研修部・対策部・情報部）

各地区の活動

………事務局長 笹川恒春……47

北海道風土記

古平町探訪

子育て平和都市宣言

美しい日本海と黄金の稲田が広がる「まち」遠別町

江差の五月は江戸にもない～江差町～

北海道の玄関口 苫小牧市～魅力あふれる歴史と風土～

花と緑とアートの村 中札内

潮風かおる 牛乳の里 興部町

これまでも これからも　～札幌市市制一〇〇周年の中で～

古平町・古平中 秋元大……75

稚内市・稚内南中 和田浩……76

遠別町・遠別中 田谷典久……77

江差町・江差北中 皆川一海……78

苫小牧市・啓北中 宮嶋隆行……79

中札内村・中札内中 山下英男……80

興部町・興部中 上野弘一……81

札幌市・陵北中大 大田利幸……82

文
芸

最近思うこと	石狩市・花川北中	野口俊之	83
永遠のトラベラーに敬意を払う	喜茂別町・喜茂別中	牛来睦美	83
「おたる潮まつり」に思う	小樽市・西陵中	吉岡智尋	84
たかが家庭菜園、されど家庭菜園	上川町・上川中	輕部恭子	84
コミュニケーション考	旭川市・愛宕中	佐藤哲雄	85
浪漫はあるのだろうか	札文町・香深中	大谷智昭	85
極小規模校の思い出から	苫前町・古丹別中	西條直志	86
第一感情を大切に	せたな町・瀬棚中	米田昌仁	86
後を継ぐ人たちへ	七飯町・七飯中	加賀重仁	87
日々学び、日々楽し	函館市・鱒川小中	須田秀樹	87
「農業法人」に学ぶ	南幌町・南幌中	小泉秀寧	88
夏の甲子園、二人の監督から学ぶ個別最適な学び	登別市・鷺別中	鈴木恭朗	88
校長として、文章をつづるということ	平取町・振内中	矢野恭涉	89
古き良き時代を少しでも伝える	浦幌町・上浦幌中	宮脇秀士	89
社会に開かれた教育課程の実現に向けて	帯広市・第五中	高橋秀讓	90
生徒の成長する姿を追いかけて	標茶町・虹別中	水澤好克	90
友達感覚	釧路市・青陵中	岩崎等	91
バーチャルと現実	別海町・上風連中	岡部臣也	91
二人の師	網走市・第四中	高橋龍彦	92
漕ぐ	札幌市・北野中	乙坂誉日	92

資
料

◎令和四年度 一般会計予算	札幌市・北都中	小川厚志	93
◎令和四年度北海道中学校長会役員・理事	札幌市・北都中	小川厚志	94
表紙に寄せて「中島公園（菖蒲池）」と全日中研究大会会場	札幌市・北都中	小川厚志	95
編集後記	札幌市・北都中	小川厚志	95
北海道中学校長会の歌	元北海道中学校長会会長	本間均	
題字 「全道中」			

巻頭言



「心こそいくさする身のいのちなれ
そろゆかば生きそろわねば死す」

北海道中学校長会 会長 野崎 均

今年の道中の活動の中で大きなものを挙げるとすると、次の三つになります。

まずはじめは部活動の地域移行への動きについてです。六月六日にスポーツ庁が設置した検討会議において、「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」が取りまとめられ、友添座長から室伏スポーツ庁長官に手交されました。平成三十年に、土日のどちらかを休みとするなどの全国的なルールが設けられ、翌年には中教審から「働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」が出されるとともに、衆議院文部科学委員会では「部活動の学校単位から地域単位への移行を早期に実現を」という付帯決議がなされました。令和二年には「令和五年度以降、休日の部活動の段階的な地域移行を図ること」「望まない教師が休日の部活動に従事しないこと」などに向けロードマップが示され、令和三年には地域移行の具体に関わる検討会議を設置、令和四年三月末に出された第三期スポーツ基本計画には、各自治体に対して地域に適合した具体的な計画をつくること、が盛り込まれました。こうした背景がこの提言にはありました。そして同様の提言が文化庁から文化庁活動に対しても出されました。この流れを受け、七月に全日中臨時理事会で全国各地の副会長の先生方と状況を交流し、多くの課題を出し合うとともに、「総論は賛成。地域格差、経済格差が生じないよう取り組んでほしい」「自治体が中心となり進めてほしい」という思いを確認し合い、十一月にも更に交流を重ねました。全国から寄せられた課題やその解決方法、進んでいる地区の取組を、自治体等との話合いの際に活用してもらえよう、全道各地区の理事の先生方に情報提供をしました。また道中体連と連携をして、複数校合同チームや拠点校チームの参加資格と大会引率者の緩和を関係機関に繰り返しお願いをしました。

次はGIGAスクール構想実現への取組についてです。令和三年一月の中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指す」の中では、GIGAスクール構想が我が国の学校教育として極めて重要な取組と位置付けられました。また、令和四年度の北海道教育行政執行方針には、学校教育を支える基盤的ツールであるICTの更なる活用に向け、授業づくりやオンライン学習の支援など、ウィズコロナ・ポストコロナにおける新たな学びの構築が示されました。こうした近年の教育の流れを受け、今年度はGIGAスクール構想の実現に向けた取組に関する調査に着手しました。本調査では、令和二年度に全日本中学校長会が実施した調査の視点を参考に準備を進めました。主な調査項目としては、「令和三年度の臨時休業等における『学びの保障』に関する取組について」「GIGAスクール構想の実現に向けた取組について」「GIGAスクール構想の下で整備された一人一台端末の活用等について」、そして「学校におけるICT化等の進捗状況について」の四点としました。また、各地区内の特徴的な取組や成果と課題も紹介しました。この結果をできるだけ早く役立ててほしいと考え、九月末までに

そして最後は、第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会についてです。「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」という研究協議会主題のもと開催しました。令和二年に大会準備委員会を発足させ、当初札幌市九七人の校長先生方が中心となり準備を進めてくださいました。新型コロナウイルス感染症が収まりを見せないことから、安全で安心な大会の実現のためオンライン形式で開催しました。大会スローガンを「イランカラプテ 北の大地から 新たな学びを紡ぎ その先へ」とし、「カリキュラム・マネジメント」の推進や「主体的・対話的で深い学び」の実現、道徳教育や健康教育、キャリア教育の充実などの八つの分科会に分かれ、「チームとしての学校」の実現や教職員の資質・能力の向上、指導体制の整備・充実、さらには働き方改革における業務見直し等について協議をし、研究協議主題並びに全日中新教育ビジョンの実現に迫りました。特に第八分科会では、岩見沢市立栗沢中学校の伊藤 聡校長先生と壮瞥町立壮瞥中学校の松岡賢晃校長先生が熱意あふれる実践を提言してくださいました。この研究協議会は、戦後の混乱がまだ収まらない昭和二十五年に第一回岐阜大会で始まり、第二回は北海道で行われました。それからおよそ八年ごとに北海道で大会を開催し、前回大会の平成二十六年苫小牧市での第六五回大会を経て、今大会となりました。北海道としては九回目の大会でした。そうした北海道の先輩方の思いもつなぐことができました。令和元年の群馬大会、二年の和歌山大会、三年の静岡大会の実績を受け止め、七四回大分大会、さらには七五回岩手大会に、成果を引き継ぐことのできる大会となりました。

十月二十九日に日本教育会第四七回全国教育大会鹿児島大会が開かれ、記念講演の中で講師の島津公保氏が「島津日新公いろは歌」を紹介してくださいました。その中の一首が「心こそいくさする身のいのちなれ そろゆかば生き そろわねば死す（心こそ戦をする者の命である。心のありよう次第で、士気が変わる。友軍の気持ちが一つにまとまれば生きることができ（だろう）」というものでした。この一首を、大河ドラマ「篤姫」の収録時、幾島役の松坂慶子さんがいつも持ち歩いていたといひます。ものごとをなすときに心をそろえるということはいかに大切か、よく分かるエピソードです。

– 9 –

潮流



中学校教育の一層の充実を願って

北海道教育委員会 教育長 倉本博史

北海道中学校長会におかれましては、本道の中学校教育の改善・充実のもとより、本道の教育行政の推進に特段の御理解と御協力をいただいていることに心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症への対応が続く中、今、求められる中学校教育の充実に向け、大きく三点にわたり、述べさせていただきます。

一 ウイズコロナ・ポストコロナにおける新たな学び

(一) 新型コロナウイルス感染症対策

学校における感染症対策については、新型コロナウイルス感染症と季節性インフルエンザとの同時流行や、新たな新興感染症への対応も視野に入れながら、教育活動と感染症対策の両立を図っていく必要があります。各学校においては、生徒の充実した学校生活の実現に向け、三密の回避と十分な換気、こまめな手洗いなど、基本的な感染症対策の継続をお願いします。また、生徒が感染症について学び、主体的に感染リスクを避けたり、規則正しい生活や運動等により体の免疫力を高めたりすることができるよう道教委ウェブページに掲載している指導資料等を参考にしながら、健康教育の充実を図るようお願いいたします。

二 生涯を通じて、個性が輝き、豊かさを実感できる教育の推進

(二) 学力向上

令和四年度全国学力・学習状況調査の結果では、国語と理科において全国平均とほぼ同水準となるなど改善の傾向が見られますが、目的や条件に応じて、理由や根拠を示したり、自分の考えを筋道を立てて説明したりすることなどに関して課題が見られます。各学校においては、義務

教育の機会均等と教育水準の維持向上という本調査の趣旨に基づき、検証改善サイクルの質の向上を図るとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた組織的な授業改善などの取組を一層充実させる必要があります。北海道版結果報告書に掲載している具体的な方策等を参考に、校長のリーダーシップの下、学校全体で学力向上に向け取り組んでいただくようお願いいたします。

(二) ICTの活用

学校教育の基盤的なツールとして、ICTが必要不可欠なものであることを踏まえ、各学校においては、生徒の資質・能力の育成に向けて、ICT環境を最大限活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につなげていただくようお願いいたします。また、生徒が平常時から一人一台端末を持ち帰り、学校での活用と同様に自宅等での学習に活用することは、家庭学習の質を充実させる観点や、臨時休業等の非常時における学びの継続を円滑に行う観点からも有効であり、一人一台端末の持ち帰りを含めたICT環境を活用した新しい学びを推進いただくようお願いいたします。

(三) 英語教育

英語教育については、これからのグローバル化が進む社会において、生徒に必要な英語力を確実に身に付けさせることができるよう、英語教育の改善・充実を図ることが求められています。各学校においては、各種調査をはじめ、英検I・IIの分析結果などの客観的なデータを基に生徒の英語力を把握するとともに、今年度から、道内の全ての小学校で実

施していただいている英検 E S G の結果も参考にしながら、授業改善の取組を一層進めていただくようお願いいたします。

(四) 体力向上

令和四年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果では、生徒質問紙調査において、中学校男女ともに「運動やスポーツをすることが好き」、「保健体育の授業は楽しい」と回答した生徒の割合が増加する一方で、体力合計点が男女ともに全国平均に届いていない状況が見られます。各学校においては、校長のリーダーシップの下、ICTを活用したきめ細かな指導などによる保健体育授業の更なる質の向上や、望ましい運動習慣や生活習慣の定着などに向けた組織的な取組の一層の充実を図っていただくようお願いいたします。

(五) 特別支援教育

特別支援教育については、全ての教員の専門性の向上が喫緊の課題となっています。とりわけ、経験の浅い教員に対しては、各管内で特別支援教育推進の中核的な役割を担うリーダー教員によるオンラインでの授業公開及び相談支援を行うなど、研修等の体制整備を行ってまいりました。各学校においては、このような機会を活用し、組織的、計画的な専門性向上への取組の充実に努めていただくようお願いいたします。

(六) 生徒指導

コロナ禍により人と人との距離が広がり、生徒が様々な不安や悩みを抱える中、生徒の S O S を敏感に受け止め、組織的対応を行うことが求められています。各学校においては、いじめ問題への対応については、全教職員で法の定義に基づくいじめの認知と早期からの組織的対応について理解を深めるとともに、高い危機管理意識と強力なリーダーシップをもって学校いじめ対策組織を中核とした、いじめの未然防止、早期発見、早期からの迅速かつ組織的な対応を徹底し、生徒が安全・安心に過ごすことができる学校づくりに努めていただくようお願いいたします。

(七) 学校における働き方改革

働き方改革は単に勤務時間の短縮のみを目指すのではなく、学校運営における組織マネジメントそのものであることを改めて意識し、学校全体で対話し、コアチームを中心とした業務改善を図りながら、北海道アクション・プランに掲げた実効ある取組を推進いただくようお願いいたします。

(八) 服務規律の保持

道民の信頼を大きく損なう事態となりうるわいせつ行為などの重大かつ悪質である不祥事の発生が後を絶たない状況が見られます。職員を指導する立場にある校長の皆様には、自らを厳しく律するとともに、教職員の服務規律の徹底について、これまで以上に危機感をもって取り組んでいただくようお願いいたします。

三 北海道への誇りと愛着を持ち、未来を切り拓く人づくり

(一) 地学協働体制

「地域とともにある学校づくり」を進め、「社会に開かれた教育課程」を実現するためには、学校と地域が対等なパートナーとなつてビジョンや課題等を共有することが重要です。各学校においては、「コミュニティ・スクール」をはじめ、地域の様々な方が学習活動に参画する体制構築及び機会充実を一層進めていただくようお願いいたします。

(二) 北海道の文化財について学ぶ機会の充実

世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」をはじめとする地域の縄文遺跡は、郷土への愛着や誇りを育むための貴重な教育資源であり、遺跡の学習を推進するため、新たな指導プログラムと一人一台端末を活用したデジタル教材の作成を進めていますので、学習機会の一層の充実を図っていただくようお願いいたします。

終わりに、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難な時代を迎える中、生徒一人一人が、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育むことが求められています。そのためには、各学校において、校長のリーダーシップの下、学校と社会が目標を共有し、連携・協働しながら、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すとともに、学校教育の改善・充実の好循環を生み出すカリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るなど、学習指導要領の趣旨等を踏まえた取組を着実に実施していくことが重要です。

道教委といたしましても、令和の時代に求められる学校教育の実現に向けて、貴校長会との絆をより一層深めていく必要があると考えております。今後も引き続き、緊密な連携・協力をお願い申し上げますとともに、北海道中学校長会のますますの御発展を心から祈念申し上げます、会誌の発刊に寄せる言葉とします。



「新しい道研」のスタートに向けて

北海道立教育研究所 所長 櫻井良之

■道研を取り巻く状況の変化

○道研の組織機構の改正

北海道立教育研究所（以下、道研）は、昭和二十四年、旧北海道立図書館（札幌市）の一室に開設され、昭和四十四年には現在地（江別市）に移転し、今日に至っておりますが、施設の老朽化が進み、令和元年度に実施した長寿命化診断の結果、施設整備の見直しが求められたことから、道教委において、庁外の有識者を交えた検討会議を設置するなどして、道研のあり方について、幅広く検討を重ねてまいりました。

そして、検討の結果、道研を本道の「教育研究・人材育成の中核となるネットワーク型シンクタンク」として整備することを基本方針とし、組織機構については、総務部、研修部、研究部、情報処理教育センター、理科教育センターの三部二センターを、総務部、人材育成部、教育課題研究部、学力向上調査部の四部に再編することを検討しており、新年度からこの新しい体制がスタートする予定です。

○新たな研修制度の導入

一方、教員の研修制度を巡っては、関係法令の改正により、免許の更新制が廃止され、教育委員会による教師の研修履歴の記録の作成と当該履歴を活用した資質向上に関する指導助言等の仕組みが、新年度から導入されることになりました。

道教委では、今年度中に「北海道における教員育成指標」を改訂し、教師同士の学び合いや現場での経験の重視、北海道における「目指す学校管理職像」などを追記するとともに、毎年度策定している「北海道教職員研修計画」に、研修履歴を活用した受講奨励の内容・方法等を新たに盛り込む予定です。

道研では、今年度、「より個別最適で、本物に触れ、本質に迫る研修」を目指して、組織行動学者コルブが提唱する「具体的経験」、「省察」、「概念化」、「試行」という経験学習サイクルを踏まえた教員研修を展開しております。「オンデマンド型研修」、「集合型研修」、「遠隔型研修」などの様々な研修様式を適切に組み合わせながら、全ての受講者がより良い方向に変容するよう、講座内容の充実に向けて、新たな研修制度の導入に向けて、更なる改善・充実を図っていく必要があります。

こうした道研を取り巻く状況の変化に対応し、「新しい道研」のスタートに向けて、現在、次に掲げる新年度の三つの「運営の重点」と、それに基づく研究や研修などの各種事業を検討しております。

■「新しい道研」のスタートに向けて「新年度の『運営の重点』」

今回の組織機構改正は、道研の総合力を一層高め、本道の教育研究・人材育成の中核機関としての機能強化を図ることを趣旨としており、これまでの部・センターが培ってきた知見、経験、専門性、ノウハウなどを十分活かしながら、新たな教育課題の解決に向けた研究・研修等を進めてまいります。

○運営の重点一 「新たな組織機構による道研の機能の充実」

特に、STEAM教育や教育DXの推進に当たっては、情報処理教育センターと理科教育センターを母体とした新しい組織である教育課題研究部を中心に全所横断的な推進チームを設置し、本道における牽引役を担うべく、正に「道研一丸となつて」取り組むこととしております。

道研では、今年度中に「北海道における教員育成指標」を改訂し、教師同士の学び合いや現場での経験の重視、北海道における「目指す学校管理職像」などを追記するとともに、毎年度策定している「北海道教職員研修計画」に、研修履歴を活用した受講奨励の内容・方法等を新たに盛り込む予定です。

STEAM教育関連の事業としては、「新たな価値を創造し社会の創り手となる人材育成」という視点からの、サイエンスカーによる移動理科教室の充実や、「現代社会に生きる市民として必要な資質・能力の育成」という視点からの、道研に整備されている生徒実習システムを有効に活用した、新たな研修講座などを検討しております。

また、教育DX関連では、小・中・高と体系的に情報活用能力の育成を図っていくための新たな研修講座のほか、道研が実施する全ての研修講座において、ICTを活用した授業づくり・学校運営の視点を盛り込むべく検討を進めております。

○運営の重点二 「『新たな教師の学びの姿』を実現するための研修の推進」

昨年十二月の中教審答申において、「新たな教師の学びの姿」として、「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぼうという『主体的な姿勢』」、「求められる知識技能が変わっていくことを意識した『継続的な学び』」、「新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」、「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」が示されており、道研ではこうした学びの姿を実現すべく、前述のSTEAM教育や教育DXに関わる研修に加えて、管理職研修や教科研修の拡充を図ることとしております。

「新たな教師の学びの姿」の実現に当たっては、教師一人一人の良き対話者・助言者として、さらには、全校的な学び合い文化を醸し出す上で、管理職の果たす役割は大きいことから、学び続ける教師を支える管理職の役割や協働的な職場環境づくりをテーマとした新たな研修講座を予定しております。

また、教師の「主体的な姿勢」や「継続的な学び」に資するため、児童生徒の学力向上につながる、教科における探究的な学びに焦点を当てた研修講座も検討しております。

さらに、継続も含めた各研修講座において、「個別最適な学び」の

実現に向けた研修受講者への個別のフォローアップ支援、「協働的な学び」の実現に向けた受講者同士の協議とネットワークづくりに努めることとしております。

○運営の重点三 「新しい時代に対応し、北海道らしい教育施策につながる研究の推進」

新年度については、児童生徒の「個別最適な学びと協働的な学びの実現に関する研究」と「『新たな教師の学びの姿』の実現に向けた教員研修の研究」を大きなテーマとして、研修との好循環を意識した研究活動を推進することとしております。

中でも、広域な本道の特性から、「へき地・小規模校」における児童生徒の「個別最適な学びと協働的な学びの実現」は重要な課題であることから、課題解決に向けた方策の一つである他校との「遠隔合同授業」のあり方等についての研究を実施することとしております。

研究は、関係機関・団体や大学等と連携しながら進め、研究成果の道内各学校への発信や道研主催研修講座への反映はもとより、それを教育課題の解決に向けた道教委本庁への施策提案につなげるなど、「新しい道研」の「教育研究・人材育成の中核となるネットワーク型シンクタンク」という機能を十分に発揮できるよう、鋭意取り組んでまいります。

■結びに

道研は今、大きな転換期にあります。そして道研自身に、中教審答申にある「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぼうという『主体的な姿勢』」が一層求められているといえます。

様々な「変化」を絶好のチャンスと捉え、学び続ける教員を支えるため道研も学び続けながら、皆様方とともに新たな地平を切り拓いていきたいと考えておりますので、今後引き続き御支援、御協力をお願いいたしますとともに、貴会の御発展と皆様方の御健勝を心から祈念し、貴会誌に寄せる言葉といたします。

論 考

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営

より良い教育活動を目指す学校経営

八雲町・落部中 間 瀬 龍 生

一 はじめに

本校は、内浦湾を東に望み、落部川の河口平地を中心に開けた地域である。在籍生徒は三六人、開校から七三年が経過し、生徒数が最多の三六〇余人（昭和四十二年）だった時期と比較し現在約十分の一に減少し、今後数年減少傾向となる。地域の産業は、ホタテ養殖を中心とした沿岸漁業や水産加工業が中心で、保護者の過半数が漁業関連であり、地域の学校という意識が強く、学校に協力的である。

地域的に保守的で変化を嫌う雰囲気が高く、コロナ禍と相まって学校行事（運動会や学校祭）が規模を縮小して行われることに不満の声が多い。そのためもあり、本校教育活動も前例踏襲が多く、抜本的な見直しが必要な状況にあった。

二 本年度の重点教育目標

『自ら学び鍛え 自他を向上させる子供の育成』

本校は、平成二十八年度からの二年間、北海道教育委員会から、家庭を挟んで隣接する落部小学校とともに『北海道学力向上推進事業「小中一貫教育支援事業」』の研究指定を受けて実践を進めてきた。その成果は現在も受け継がれており、小中合同学校運営協議会における熟議の結果、重点教育目標が決定された。

三 本年度の重点取組事項

四月に着任して、最初の職員会議で経営方針の前提として伝えたことは、第一に組織的な対応の徹底である。基本的な「報告・連絡・相談・確認」の徹底に始まり、各主任を要とした縦系列と、各分掌・学年間の横系列を効果的に組み合わせ、全職員の温度差を生まないことを強く求めた。第二には、短いスパンでPDCAサイクルを回し、必要なことは年度途中でも躊躇なく見直すことである。同様に、個々の教職員が業務の改善を積極的に進めることも指示した。生徒にも、全校集会で生徒会を中心に学校生活の改善を進めて

いく楽しさを伝えた。この前提で、前例踏襲に頼らず次の取組を進めた。

1 子供個々の学びを支える授業の構築

- (1) 小中合同研修の推進（互見授業、合同研究協議等）
- (2) ICT機器を用いた効果的な授業構築と家庭学習の改善
- (3) 授業のユニバーサルデザイン化による授業改善
- (4) 令和四年度八雲町共通課題「読解力の向上」へ向けた取組

2 心豊かに自他を大切にできる子供の育成

- (1) 組織的生徒指導・開発的生徒指導の推進
- (2) 規範意識と支持的風土の醸成
- (3) 生徒会を中心とした校則見直しといじめ撲滅の取組

3 地域連携と学校の信頼性向上の取組

- (1) 地域・保護者との連携協働（PTA・学校運営協議会等）
 - (2) 子供と向き合う時間を確保するための働き方改革の推進
 - (3) 教育公務員としての自覚の向上と服務規律の遵守・徹底
- これらの取組は概ね順調に進めることができたが、当然改善すべき点も多く見つかった。そのため、さらに次の取組を行った。

4 教育活動の見直しについての取組

- (1) 短いスパンでのPDCAサイクルに基づいた学校改善
- (2) 変化することを恐れない意識の定着を促す
- (3) 学校改善に向けた取組の積極的な広報（保護者・地域）

前年まで年一回だった学校評価（職員・保護者・生徒）を年二回に変え、前期評価の結果を受けて後期から大幅に教育活動を見直した。変更点は、教科指導・部活動・日課・清掃・会議や打ち合わせなど多岐にわたる。しかし、「後期学校改善プラン」は、本校の喫緊の学校課題の対処療法に偏ってしまった。この反省を受けて、令和五年度学校改善プランに向けては、校内にとどまらず、地域とも熟議を重ねて目指す生徒像の洗い出しから取組を始めている。

四 おわりに

学校経営にあたって、私は「有言実行」を強く意識した。同時に職員にも、ブランドデザインを飾りにせず、実行に移すことを求めた。その求めに応じてくれた職員に感謝している。今後、子供たちにより良い教育活動を保障するための学校経営を推進する。

全ての子供の未来のために学びを保障する学校経営

妹背牛町・妹背牛中 奥山直人

一 はじめに

本校は、昭和二十二年に開校し、当時は全校生徒四〇五人、学級数は一〇を数え、北空知管内でも比較的大規模校であった。令和四年度で開校七六年を迎え、長い歴史のある学校である。今年度は全校生徒六一人、学級数六の小規模校となり、数年後には町内の妹背牛小学校との小中一貫教育を視野に、義務教育学校として開校させ、新たなステージへと移行する予定である。生徒たちは真面目で素直、純朴であり、自然豊かな環境で元氣よく登校している。その反面、幼い頃からの固定化された少人数のコミュニティの中で成長してきているので、対人関係の悩みや生活経験不足の生徒もいて、スクールカウンセラーはもとより、町内の関係機関等との連携を深め、様々な角度からの支援が必要な面もみられる。

二 本校の取組

1 学習指導の充実

(1) 自主的、自律的学習者の育成

- ① 自分ごとと相手意識のある学び
- ② 小学校と連携した家庭学習習慣の設定
- ③ 学習指導員による放課後学習の取組

(2) 基礎的、基本的な知識技能の習得と生徒の実態に基づくICT機器の効果的活用

2 生徒指導の充実

(1) 共通理解と協働体制による自己指導能力の育成

- ① 心理的安全性の高い学級集団づくり（自力成長を支える）
- ② H・Q・U、各種アンケートによる実態把握

(2) 日々の生徒理解と課題の早期発見、素早く丁寧な対応

- ① 定期的な生徒指導委員会の開催
- ② 情報共有と行動連携による指導ベクトルの統一

3 道徳教育・特別活動の充実

(1) 自主、自律、自由と責任を重点とした授業実践

(2) 多様な他者と協働する意義理解と行動の仕方を育成

4 総合的な学習の時間の充実

(1) 探求活動を通じた『身に付けさせたい能力と技能』の獲得

(2) 地域との連携による『いのちの授業』の充実

- ① 保健師、助産師や実際の親子ペアを招いた体験学習

- ② 町内福祉施設訪問で、お年寄りの方々や働く方々との交流から福祉の現状についての体験学習

5 特別支援教育の充実

(1) 校内特別支援委員会を中心とした組織的な取組

(2) 通常学級における支援を必要な生徒の把握と合理的配慮に基づく対応

(3) パートナー・ティーチャーや巡回相談、町内関係機関との連携

三 おわりに

学校は「子供が育つところ、育てるところ」で、昨日よりは今日、今日よりは明日とよりよく成長を遂げる場である。そのため学校は子供たちの心理的安全性を確保し、知識・技能を習得させ、思考力・判断力・表現力を育成し、学びに向かう力、人間性を育む場でなければならない。社会総がかりで教育改革が推進されている中、Society5.0に向けた学びのあり方や人物像が示されているが、いつの時代も学校は、子供たちが社会に出る前に必要な準備をするところであり、社会や人とながりをもって生きていくための術を身に付ける場である。

持続可能な社会の創り手となる子供たちが希望をもち、可能性を高め、笑顔で学校生活を送ることができるよう今後も学校経営に邁進したい。

地域とともに生きる学校をめざして

浦河町・浦河第二中 佐藤 恵美

一 はじめに

本校は浦河町東部に位置し、南は太平洋、北は日高山脈が遠く
に展望できる。その源から発する幌別川の清流に沿って豊かに広がる
牧野には、日高が誇る競走馬が、悠然と草を食む光景が見られる
地域である。歴史は古く、昭和二十二年に生徒八五人で開校された
が、分離・統合を経て、現在は全校生徒二六人、四学級（うち特別
支援一学級）のごく小規模校である。保護者・地域の学校に対する
期待度は高く、様々な行事や教育活動に積極的であり、協力的である。

二 今年度の重点目標

「支え合い、磨き合う生徒の育成」

全ての教育活動を通して、これらを目指し取り入れて実践すること
で生徒の資質・能力を高めている。さらに、この目標の評価は生徒
の姿で行い、具体的数値をもとにPDCAサイクルを構築する。

三 取組の重点

1 授業改善

「個別最適な学び」を基軸とした「主体的・対話的で深い学
び」の実現

生徒一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導
方法・教材や学習時間等、柔軟な提供・設定を行うなどの「指
導の個別化」と、生徒自身の学習態度に合わせて、個人の学習が
最適となるように調整する「学習の個性化」など、「個別最適
な学び」を充実させながら、「主体的・対話的で深い学び」を
実現する。

2 キャリア・パスポートを活用した「キャリア教育の充実」

小・中・高と町内統一の様式により、継続して資質・能力を
育成していくことを目標としている。授業や特別活動だけでな
く、地域の活動や学んだこと、自分の成長を記録し、自分を見
つめ、将来の夢や目標を見付けていくことを目指している。

3 伝統にとらわれない創造的な活動（流行と不易）

現在の学校規模、生徒の実態や現状を踏まえた活動へと見
直しが必要な時期にある。少人数の学校、地域だからこそでき
ることを自分たちの活動として発信している。さらに、生徒自
身が学校を離れて多くの人と触れ合う活動も設定し、コミュニ
ケーション能力や情報収集能力を育成している。

4 「歌声活動」を軸とした生徒の所属感と自尊感情の育成

日常的に行っている「歌声活動」では、生徒個々に達成感・
成就感を味わわせ、望ましい集団づくりにつなげている。特に
大切にしていきたいことは、生徒自身の存在価値が見いだせる
「自己有感動の高揚」につながる活動としている。

5 教職員個々の能力に依存しない組織体制づくりと働き方改革

教職員個々の能力を最大限発揮できるのはチームとしての力
である。互いに学び合い、高め合い、協力し合うことのできる
教職員集団「チーム浦二中」を目指している。また、自己管理
を徹底し、目的達成のため、最も有効な手段で効率よく仕事を
進められるよう、業務の見直しとスリム化を推進している。

四 結びに

学校規模が縮小してきている中、学校・家庭・地域、さらには校
区の小学校（二校）と連携・協働を強化することがとても重要と
なっている。そのために、小・中学校の校長がゴールを明確にし、
リーダーシップを発揮するとともに、育成を目指す資質・能力を共
有し、児童生徒が地域と関わりながら教育活動を進めることで、地
域に根ざした、地域とともにある学校を目指し、今後も日々努力し
ていきたい。

生徒に自信をつけさせる学校づくり

根室市・広陵中 二本柳 千尋

一 はじめに

本校は、昭和五十三年四月に開校し、今年で四十四周年を迎えた。校舎の老朽化に伴い、令和六年度まで長寿命化改修事業が実施され、今年の夏休みに仮設校舎へ移転した。周辺は町内の新興住宅地で、生徒数は三〇〇人弱を維持する中規模の中学校である。保護者は概ね教育に関心が高く、行事に協力的で来校数が多い傾向がある。

また、中標津町では町の教育方針として中学校区の一貫教育に取り組んでいる。本校は隣接する中標津東小学校と「旭ヶ丘学園」として中一ギャップの解消、なめらかな接続をキーワードに一貫教育を進めている。

二 今年度の経営の重点

「生徒一人一人に自信をつけさせよう！」

～認め合い、励まし合い、学び合う生徒の育成～

学校は学力を身につける所、社会性を身につける所である。この二つに自信をつけさせて社会に送り出したいと思っている。学校生活の中で生徒たちには自己肯定感を高めることやコミュニケーションを成立させること、よりよい人間関係づくりを目指した積極的な生徒指導が重要と考える。これを授業の中で、そして学級経営、行事など学校生活全てで仕組んでいくことを経営の重点とする。

・自己決定の場を与える～自分で課題を考える。解く。話し合っ

・自己存在感を与える～授業（行事、係活動）で活躍の場を与える。
・共感的人間関係を育てる～相手意識を持った発表や聞き方。学び合いをする。交流する。

三 主な教育活動

1 学級・学年経営について

生徒指導の三機能を生かしながら生徒一人一人の良さと個性

を尊重し、個々の存在が認められる学級にする。また、信頼関係を構築し、お互いに認め合い、励まし合い、話し合い、学び合い、集団の教育力を高める。

2 教科指導について

授業でも生徒指導の三機能を取り入れ、課題解決型学習の研究を通じた授業改善に取り組む。

3 道徳について

「考え、議論する道徳」を研究し、全道道徳研究大会会場校として授業公開に努める。

4 総合的な学習の時間

本校の伝統であるボランティア活動を行いながら、「ふるさと中標津」の特色を生かした教材を活用した取組、及び地域人材に協力を依頼した活動を行う。

5 小中一貫教育について

旭ヶ丘学園小中一貫教育事業を進め、連携と系統化、見える化、共通化を図り、九年間で生徒を育てる取組を行う。

四 校長として大切にしたいこと

1 教育は愛である

教育の根源はここにある。人は愛されて人になる。悩んでいる生徒がいたら、そのままにはしないなど、どんな生徒も決してあきらめず、優しく厳しい指導をすること。

2 組織的な職場づくり

人には得手不得手がある。お互いが補い合い、組織として仕事を進めていくことが大切である。

3 地域力

保護者、先生方以外の大人が生徒たちに関わることが大切である。

重点や教育目標を達成するためには、生徒への愛情と教職員一人一人の力を結集した組織力、そして地域の力が欠かせない。先生方が生徒に愛情を注ぐことができるよう校長は全職員を大切に

論 考

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導

学びに向かう力を育む生徒指導

千歳市・千歳中 金森直人

一 はじめに

文部科学省の生徒指導提要が十年ぶりの改訂に向け素案が示された。いじめや不登校など個別課題に関する記載、チーム学校による生徒指導体制、性的マイノリティや発達障がいをはじめとする多様な背景をもつ児童生徒への指導が新たに盛り込まれるらしい。生徒指導の基本書ともいえる生徒指導提要の改訂にも、いじめや不登校、自殺者数の増加等、時代背景が色濃く映し出されている。

私たちの世代は、「生徒指導」というと問題行動への対応が頭に浮かびがちで、近年では、前述の今日的課題にも頭を悩ませている。一時期、「積極的生徒指導」とか、「生徒指導の機能を生かした授業」と言われたように、「子供たちが社会的に自律し、自分らしく未来を生きるよう、成長・発達を促したり支えたりする意図的な働き掛け」という基本を大切にしなければと考えている。

二 学びを通して「心豊かで主体的に生きる力」を育む

「心豊かで主体的に生きる力」を育むには、日々の「分かる楽しい授業」、生徒自らが「学びとる」授業への更新が不可欠であると考えている。「教える」ということに固執しがちな教員の発想を、「知識や技能をただ習うのではなく、多様な他者と協働して、自ら考え主体的に学び続ける人を育てる」という「生きる力」の育成をゴールとした授業観へ、意識改革が必要である。高校の入選では、「思考力を問う問題」が出題され、問題文をしっかり読み解き、情報を整理し、解答に至る理由や根拠を明確にして、「自分の考えとして表現・伝え」なければ、正解に至らないような問題も多い。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図る令和の日本型教育では、指導の個別化と学習の個性化を進めながらも協働的な学びから、新たな発想や考えの創出を求めている。学習評価における「学びに向かう力」が、単なる「関心・意欲・態度」ではなく、「主体的に学習に取り組む態度・自己の感情や行動を統制する力・よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等」と言われるように、学びを通して、「自律的学習者」としての成長や変化の激しい社会を「自ら学び続ける人材」の育成といった生徒指導の機能を充実させることが「生きる力」の獲得に不可欠なのである。

三 学習を支える基盤としての生徒指導

前任校では、北広島市が全校区で小中一貫校であり、生活・授業規律を整え、学習を支える基盤となる習慣付けに、あまり苦勞を感じなかった。挨拶や正しい姿勢、コミュニケーションスキル、自律的な生活等々、小中一貫して「表現・えがお・チャレンジ」共に学び共に高め合う」を校区のスタンダードと謳い、その柱に沿って、小中教職員が目指す子供像をイメージし、九年間の成長と学びを保障する学校体制、教職員集団づくりの役割を担うことができたと考えている。

本校は、市内六小学校から入学してくる中学校区。生活・授業規律を整える習慣と「自ら考え、表現力を磨く」授業づくりを並行して進めていく必要がある。小中連携の取組から、授業規律①姿勢②机上③発言、生活規律①挨拶②時間③マナー言動といった「ととのえる習慣」の定着について、小中九年間の育成マトリックスを共有し、六小への出前授業から、小中連携を少しずつ深める試みを進めている。また、令和元年から、PTAと連携し、「Myゴール手帳」という、子供の生活習慣づくりをねらったスケジュール手帳を全校生徒が使っている。生徒が学校行事や自分の予定、目標や家庭学習時間を書き込んだり、夢やテスト勉強の計画づくりに活用したりしている。タブレット端末のログインQRコードも貼っている。授業の受け方から、校則や千歳市家庭生活宣言も掲載し、まさに学生のシステム手帳である。家庭・保護者とのパイプでもあるので、保護者や卒業生からの励ましメッセージが一週間ごとに掲載されている。この取組をきっかけに、PTAによる職業講話も予定されており、「社会的な自律」を目指すキャリア教育としての活用についても更に充実させたいと考えている。

四 おわりに

紙面の都合上、学習に向かうための規律や習慣を整えることが中心となつてしまつたが、よりよい人間関係やコミュニケーション力、豊かな感性といった「心豊かで・」の部分には、全く書ききれない。それは、子供たちの居場所となる学級、学年での、行事や特別活動の取組であったり、教師や仲間との協働の中で体験的に学ぶ、心の動きや情緒的なもの、豊かな感性であつたりするので、私たちは、未来の担い手となる子供たちを育てる「学び続ける教職員集団」の人材育成に努めていきたい。



職員の和を大切にした

協働体制による教育活動

中富良野町・中富良野中 平 田 隆 男

一 はじめに

中富良野町は十勝岳、芦別岳に囲まれた富良野盆地の中心に位置し、豊穡な水田地帯が広がり、東部・西部の丘陵地帯では人参・玉葱・西瓜・メロン等の果菜類や馬鈴薯の栽培が盛んである。ラベンダーの季節には、道内外から多くの方々が訪れ大変な賑わいになるなど、観光にも力を入れ、町の活性化を図っている。また、今年度は校舎改築事業着手及び総合型地域スポーツクラブの取組推進について町教育行政執行方針として示すなど、町内教育環境の維持形成に力を入れている。校区は広く、生徒は町内四校の全ての小学校より入学し、生徒数一二九人、学級数一〇（特支四）の中規模校である。生徒は純朴であり、落ち着いた雰囲気です学校生活を送っている。

二 生徒指導の考え方

生徒指導とは、一人一人の生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことを指し、教師が積極的に生徒一人一人に関わって学校教育活動全体の中で実践すべきものである。教育目標「一人一人の能力を伸ばし、豊かな人間性を育てるために」のもと、年度の重点を「仲間と協働し 主体的に学び 豊かに表現する生徒の育成」とした。生徒と教師、生徒同士の温かな人間関係を確立し、人間的なふれあいを基盤とした共感的な生徒理解に努め、休み時間とともに過ごすなど、生徒との日常的なふれあい活動を重視するとともに、組織的な校内指導体制や関係機関との連携を充実させながら教育活動を推進している。

三 協働する組織で推進する生徒指導の取組

1 組織的指導体制の確立（学年・学級経営方針の共有、生徒指導

部との連携等）

2 生徒指導交流の定例化（生徒指導部会や職員会議での情報交流、

生徒指導上の課題解決に向けた共通理解）

3 教育相談の充実（アセスやほつとの活用、生徒の心に寄り添う日

常的な相談、スクールカウンセラーによる支援及び連携）

4 関係機関との連携（町教育相談員、民生委員、駐在所、保健福祉

課、適応指導教室「学びサポート教室」等と連携した取組、町内

生徒指導連絡協議会、幼小中接続委員会における児童生徒指導

上の情報交流）

5 「特別の教科 道徳」の組織的実践（道徳推進教師を中心とした

学年での取組、実践の累積）

6 主体性を育てる生徒会・学級活動の充実（生徒会主体による「校

則見直し」検討推進、挨拶運動、交通安全啓発活動等、学校生活

改善に向けた取組に対する指導）

7 基本的な生活習慣指導の徹底（自ら進んで実践できる指導の工夫

「挨拶・言葉遣い」「礼儀」「身だしなみ」「学校美化」「伝

統継承」等）

8 「手帳」の活用による自立的・主体的な取組態度の伸長（生徒一

人一人の学習・生活の取組の見える化と計画的行動力の深化充

実）

四 おわりに

「生徒は教師の姿を見て育つ」

生徒と直に接する教職員の人間性や力量は、生徒たちの成長に大きな影響を与える。ゆえに生徒指導において何よりも重要なことは、全教師が互いに信頼し合い、和を大切にした協働体制による学年・学級経営を進めていくことである。生徒が変わるには、まず教師が率先垂範を示すことが必要なのである。

これらのことを校長のビジョンとして明確に打ち出し、使命感と人間性、専門性に富む教師への信頼と尊重を基に、一人一人の役割を明確にした校内の指導体制の確立に努め、さらに保護者、地域との信頼関係を構築し目標を共有しながら、「仲間と協働し 主体的に学び 豊かに表現する生徒」を育む教育活動を展開していきたい。

人間的な触れ合いを大切にしたい

愛情と信頼に基づく生徒指導

「四五の心を使い、九〇の目で見て、感じて」

旭川市・東明中 中山 洋

一 はじめに

本校は、昭和五十九年に開校した学校で、旭川市の中では比較的新しい学校である。「東明」という校名には、旭川市の東方にあつて明るく輝くような中学校に発展すること、清新な気持ちで勉学に励み、新しい時代に強くたくましく成長してほしいことという願いが込められている。学校は、旭川市の郊外にあり、総合型の東光スポーツ公園に近く、整備された住宅街の中にある。

本年度の生徒は四六四人と昨年度よりも四〇人ほど減少している。生徒は、明るく、素直な生徒が多く、学習に、部活動に一生懸命取り組んでいる。その反面、教師に頼っている面が見られ、自ら考え、判断し、実践することには消極的な一面がある。生徒一人一人の自立に向け、人間の高さを感じながら、触れ合いを大切に、愛情と信頼に基づく生徒指導を通して、自立への道を後押ししていきたい。

二 生徒指導の考え方

(さ) 最悪の事態を想定し、(し) 慎重に、(す) 素早く、(せ) 誠意をもって、(そ) 組織的に

- 1 同一步調で生徒に接し指導に当たる。組織体としての指導体制
- 2 「当たり前」の指導をする。
- 3 心に触れる指導をする。
- 4 生徒の正直な行動や態度は、認め、褒める。
- 5 生徒に「本気」で向かい合い、共に行動し、真の姿を知る。
- 6 授業を優先した指導をする。
- 7 教職員の「フオーバー体制」を確立する。
- 8 家庭・地域との連携を密にする。

三 本年度の取組

- 1 共通した姿勢・一貫した態度で具体的な指導を積み上げる。
 - ・報・連・相・確(結果の報告を含む)の徹底。
- 2 隙間のない指導体制の確立(校内巡視)「触れ合いを大切に」
 - ・早めの教室・遅めの職員室。
- 3 「いじめを許さない心づくり」に向けた取組を行い継承する。
 - ・生徒一人一人の居場所や存在感を実感させる、人間関係を深める集団活動の実施。
- 4 生徒情報の共有。

・週一回の指導部会の内容を、学年内に周知徹底させる。

5 組織的な指導体制の確立。

・役割分担を明確にし、職員の意識を一つにした指導体制の確立。明るく校風づくり。

6 元気で明るい挨拶、職員自らも率先垂範の意識で。

7 「インターネットの利用に関する意識調査」の実施。

・生徒会活動の中に「アウトメディア」に関する取組を位置づける。

四 終わりに

社会が大きく変化する中、様々な背景を抱える生徒たちと学校の文化や伝統を築いていく上で、「人間的な触れ合いはいいな」という感覚を覚えてほしい。多くの場面で、それを実現、体験させることが学校経営の柱だと考える。本校の生徒たちは、常に三年生の生徒が見本であり、一年後、二年後のゴールとなっている。例えば、全校集会では、三年生の行動が模範であり、一・二年生の目指す目標になっている。しかしコロナ禍のため、交代で二つの学年が体育館、一つの学年がオンライン対応としている。そのため、二年生が模範となる場面があり、先輩としての自覚や誇りを意識させる絶好の機会となっている。私たちの仕事は、生徒たちに前向きな変化をもたらすことである。そのために、大人の私たちが変化することで、一層人間的な触れ合いを基調とした教育を推進できるものと考えている。



心豊かで主体的に生きる力を

「つながり」ではぐくむ

帯広市・川西中 今 野 典 之

一 はじめに

本校は、各学年一学級ずつに特別支援学級（知的・情緒）を加えた計五学級で、全校生徒八一人の小規模校である。農村地帯の学校であるが、近年、新興住宅地の拡張で農業より非農業の家庭数が多くなり、生徒数も増加傾向にある。ほとんどが川西小学校から入学するため、小中の連携が取りやすい。また、「地域の子供はみんなで育てる」という風土があり、地域一体となって子供の健全育成に取り組んでいる。

二 具体的な取組

1 小学校とのつながり

(1) 学習規律の統一

基本的な内容項目を統一している。各学年の発達段階に応じて文言を変えたり、項目を追加している。

(2) 出前授業・体験入学の実施

出前授業は定期的を実施。体験入学は年一回実施。

(3) 児童会・生徒会の交流

生徒会・児童会の企画で、全児童生徒でふれ合い集会を行い、「川西地区いじめ撲滅共同宣言」を発表している。

2 保護者とのつながり

(1) 各行事の協力

体育祭・文化祭・公開研究会やスケート大会など様々な行事で、運営や駐車場の誘導、受付や接待等の協力を得ている。

(2) 教育環境整備の協力

学校花壇や農園の整備、リンク造成、除雪などの協力

(3) スクールバスの乗車指導

年に二回、スクールバスに乗車し、子供たちの乗車態度

や安全性などを確認してもらい話し合いを行う。

3 地域とのつながり

(1) 川西地区子供を守る安全ネットワーク総会

年度当初に、小学校、中学校、CS委員、川西地区青少年健全育成協議会役員、民生・児童委員、保護司、支所長、駐在所員、郵便局長、見守りボランティアなどが集まり、子供の見守りについての方針や安全マップの見直しなどの交流を行う。

(2) 講演会・公演会の実施

児童生徒・保護者・地域を対象に、教育講演会と演奏や演芸の公演会を実施。川西地区の生涯学習委員とも連携している。

(3) 保・小・中・地域合同防災学習

年一回、保育所・小学校・中学校・町内会役員が指定避難所である中学校を会場に防災学習を実施。帯広市総務部危機対策課・川西消防団の協力で、年代別に学習内容を変えている。

三 校長の役割

校長として、子供たちの現状と課題などを発信すること、その上で、学校経営方針、目指す子供像などを理解してもらい協力を得ていくことが大切である。そのためには小学校との連携は必須で、一五歳に成長した姿を共有し、九年間を通じた教育活動を校長同士が腹を割って話し合うことが重要であると思う。また、子供を真ん中に置き、地域の方々をしつかりつないでいくことも校長の大切な役割である。

四 おわりに

今回紹介した中には、コロナ禍の現在実施できていない取組も多くある。川西地区には「集う・交流する・協力する」という良き伝統が脈々と受け継がれていると感じる。校長として、新型コロナウイルス感染症で取りやめてきた活動を意義を問い直し、つないでいく責任を感じている。

生きる力をはぐくむ生徒指導

「子供たちの「見守られる喜び」を育む」

北見市・高栄中 小野寺 哲 浩

一 はじめに

本校は、昭和五十二年、生徒数の急増に伴い、北見のベッドタウンである高栄団地の人たちの願いで、市内一番目の中学校として誕生した。市内初の四階建て校舎は、高栄西町の丘陵中腹に自然環境そのままを生かした「白亜の殿堂」のごとく産声を上げた。生徒数は、一時一、一〇〇人を越え、オホーツク管内最多となったが、現在は三三四人が学んでいる。

校訓「師弟同汗」の精神である「努力を惜しまない人となれ」の高栄精神は現在も引き継がれ脈打っている。

二 生徒指導の理念

今年度の重点教育目標は、『Only One (オンリーワン)』～一人一人かけがえない存在として大切にすることである。生徒は、明るく快活で、目標に向かって自己を磨き、「高栄中しぐさ」時を守り、場を清め、礼を正す」の定着にも意識が高い。その中で、ここ数年不登校生徒が増加し、登校のみを目指すのではなく社会的自立に向けた適切な支援をスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、子ども支援課などの関係機関と連携し、組織的、継続的に行っている。

年度の重点教育目標

オンリーワン

目標に向かって 自己を磨く!

- 授業に集中し、互いに刺激を高め合える学習をつくる。
- 学習や部活動など、最後まで粘り強く取り組む姿勢を育てる。

七しぐさが光る 高栄中を創る!

- 基本動作からしっかりと身に付ける。
- 人を驚かす「言葉や行動」を習慣化し、積極的に周囲に発信し、学校・学年をつくる。
- 互いに高め合い、高栄中・高栄地区に誇りを持つ。

「ワンステップアプローチ会議」「SOSアンケート」は、本校独自の取組で「不登校の課題を担任が一人で抱え込まない」ことを目的に、生徒の状況や支援の手だてを様々な視点で交流しながら行っている。

授業公開においては、保護者・地域の来校によって生徒の実態を把握していただくだけでなく、教師の授業づくりに対する情熱を感じ取ってもらい、教師自らが学び成長しようとする中で生徒の「見

守られる喜び、安心感」を醸成することを目的としている。

三 本校の取組

1 「ワンステップアプローチ会議」を年五回実施し、生徒の個表作成や情報共有を行っている。

2 SOSアンケート(毎月)を実施し、いじめ調査・アセス調査、QUと合わせて「いじめ・トラブル・集団生活への不適応」について積極的な把握に努めている。

3 制服の男女別廃止、ブレザータイプへの変更に着手し、LGBTQ+、性的マイノリティーの生徒へ配慮した継続的な支援を具体化している。

4 週単位の授業公開を年二回実施し、密を避け、地域保護者の皆様が来校しやすい環境を整えている。

5 不登校生徒に対してタブレットの活用を推進し、オンライン学習や学校・家庭間のコミュニケーションツールとして積極的に活用している。

6 北見北西地域「安心、安全な地域」づくりの会による、ながらパトロール、お散歩会員、防犯のぼり設置などの取組との連携を密にしている。

7 生徒会役員が教育局・市教委主催の「いじめ会議」に出席するとともに、いじめ防止の啓発活動を展開している。

四 終わりに

未来創造の礎となる歴史的変動の時代にあつて、学校経営において「教師は子供たちの多様な思考を引き出し、それらを紡いで納得解や最適解を醸成する」という指導観の転換は、学習・生活の両面に適応する。今後は、「正解は教師の中にある」という従来概念から離れ、生徒指導においても教師は伴走者としての役割を果たし、変化に対応する未来の担い手を育てるために、変化に対応する教職員集団として研さんを積み重ねる必要がある。本校は、全ての生徒一人一人にとって個別最適かつ協働的な深い学びを育み、誰一人として取り残さない包摂性を基本理念に生き方の多様性を目指し、個々の資質・能力を存分に開花させる新たな教育活動にも果敢に挑戦する覚悟である。



ワンステップアプローチ会議

論 考

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習

主体的に生きる力を育むふるさと学習

小樽市・潮見台中 高橋 恒雄

一 はじめに

本校は、日本国憲法が施行された昭和二十二年に開校し、戦後の日本とともに歴史を刻んできた開校七五年目の学校である。掲げる学校目標も「平和を愛し、理想の実現に向かって自己を高める」と開校当時の社会の願いがこめられたものとなっている。校区には、近代小樽の最初の町がひらかれた地域（勝納町）や運河論争の基にもなった「有幌石造倉庫」があった場所でもある。これらの教育資源を活用し、生きた小樽の歴史を体感させることで、小樽の未来を担う人材育成に取り組んでいる。

二 「ふるさと学習」で『課題を自分事として捉える力』を育成

本校では、三つの特色ある教育の筆頭に「ふるさと学習」を掲げている。豊富な地域教材を活用し、歴史の息吹を体感させることで、五〇年程前に自分事として街づくりに関わった小樽市民のたくましさや子供たちの中に育みたいと考えている。小中一貫教育推進の観点から連携している潮見台小学校での六年間の学びを基盤に、中学校の学び三年を積み上げる視点で「ふるさと学習（総合的な学習）」を設定してきた。近年新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、旅行的行事の行き先を道内とした為、学びの質を高める方向で教育課程の見直しを行った。

1 「小樽の魅力発見」フィールドワーク（二年生）

グループ毎に課題を設定し、ふるさと小樽を自分の足を使って学ぶ。

2 「小樽発」をテーマとした探究学習（二年生）

グループで課題を設定し、小樽を学びの起点に、宿泊研修先で学ぶことと比較・関連付け、学びを深める。探究した成果を発表する。

3 「小樽着」をテーマとした探究学習（三年生）

グループで課題を設定し、既習事項を基に、見学旅行先で学ぶことと比較・関連付け、学びを深める。小樽のためにできることを考え発表する。

【具体的な実践】探究学習の質を高める事前学習（二年生）

① 教科横断的な学習計画

国語科「モアイは語る―地球の未来―」で、人の営みが自然環境を壊してしまいう内容の教材と社会科「北海道・北東北の縄文遺跡群（世界遺産）」の学習を関連付けた。このことにより、北海道の自然と長く共生してきたアイヌの暮らしとその考え方を多角的に考察できるようになった。

② 市立図書館・アイヌ民族文化財団との連携

限られた時数の中で、深い学びを導くことができるように、市立図書館からテーマに沿った関連図書を一〇〇冊長期借入し、学校図書館に特別コーナーを設置した。また、アイヌ民族文化財団より講師を招聘し、「アイヌモシリとアイヌ文化」と題し事前学習を開いた。そのことで、アイヌの楽器や服等実物に触れ、子供たちの理解と興味が深まった。

③ 地域の教育資源の活用

小樽に住んでいたアイヌが、和人の都合で高島に移住させられ、最後には石狩（浜益地区）へと追いやられた経過や小樽に住むアイヌの墓が暴かれた事実等、小樽市で起きたことを地元の歴史家から学ぶ機会を設けた。このことで子供とアイヌの歴史との距離感が縮まった。

三 おわりに

本校において、コロナ前の「ふるさと学習」は、小樽（一年）道内（二年）道外（三年）をフィールドにした課題探究学習が組まれていた。しかし、その指導は旅行的行事の一部として各学年に任される傾向があり、学習を通して子供の学びに関わる資質・能力及び態度の育成の面で十分であった。今回、二年生において事前学習を計画実施することで、ウポポイでの探究学習が充実した。情報の整理・分析時に俯瞰する視点が生まれ、設定する課題を自分事として捉える等、学習に取り組む姿勢に変化が見られた。また、多くの生徒が施設から割り当てられた四五分の時間を高密度で学び、帰着後の学習にも意欲的且つ能動的に取り組んでいた。旅の終わり、ウポポイの慰霊施設を訪れた際に、小樽に住んでいたアイヌを思い、手を合わせる表情に中学生らしい成長を感じた。



アイヌ文化に触れる

地域との連携をいかした主体性を育む体験活動

函館市・旭岡中 中 田 和 子

一 はじめに

函館市の東部に位置する本校は、全校生徒八八人の小規模校である。市街地よりやや高い土地に建ち、校区は緑豊かな住宅地となっている。昭和五十六年開校で四〇年以上の歴史をもつが、全市的な傾向と同様、生徒数は減少傾向にある。このような現状を踏まえ、校区内の異校種校や地域の各種団体・組織との積極的な連携・協働による心の豊かさや主体性を育む教育活動に力を入れて取り組んでいる。

二 地域連携清掃ボランティア活動『クリーンデー』

1 取組の概要

本校では毎年『クリーンデー』と呼ばれる地域清掃ボランティア活動を実施している。これは、旭岡地区にある旭岡小学校、函館養護学校、町会と本校が連携し、地域の清掃を行う活動である。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、令和二・三年度は中止を余儀なくされた。今年度は感染防止を徹底し、三年ぶりに実施することができた。

2 ねらい

- ・地域の清掃活動を通して、地域の一員であるという自覚をもつとともに、ボランティア活動への関心を高める。
- ・縦割り班による活動を通して小・中・中・養護学校のつながりを深め、生徒の主体性の向上を図るとともに、思いやりの心を育む。

3 参加者

旭岡中学校一・二年生五四人、旭岡小学校四・六年生八二人、函館養護学校児童生徒約一五人、町会有志の皆さん。
中学二年生をリーダーとする学年縦割り班（中二・中一・小学生・養護学校生が混在する一〇班編制）に教員及び町会の方々が

4 それぞれ同行し、安全確保に努める。 具体的な取組

- (1) 職員会議で担当が提案／五月
全教職員で確認し、活動内容の共有を図る。
- (2) クリーンデー担当者会議／六月
小学校・中学校・養護学校・町会の代表が出席し、実施の概要について確認する。↓
ねらい、当日の日程、参加者、実施場所、実施方法、事前事後指導、感染防止対策等
- (3) リーダー打ち合わせ（旭岡中二年生）／六月
今回のリーダー役である二年生が体育館に集合し、左記のことを話し合い、決める。
班のメンバー、班ごとの活動ルート決定・地図の作成、自己紹介・司会進行・注意事項の確認等
- (4) 当日の動き／七月四日
・校区内の公園グラウンドにて出発式を行う。
・中学生からの説明・諸注意等の後、リーダーの指示で班ごとに分かれ清掃を開始する。
・時間内に作業を終えて、公園グラウンドに集合後、班ごとに反省・感想発表をして解散。収集したゴミは中学校に持ち帰り処分する。中学生は帰校後、一人一台端末を使って本活動のまとめを行い次年度にいかす。

三 終わりに

本校では小規模校であることをいかし、全校集会での交流や体育祭のチーム分け等で積極的に学年縦割り班を取り入れている。本取組は、日々の活動で育んだ生徒の主体性を、校外における実践の場へとステップアップさせる機会であり、一定の成果を収めている。「クリーンデー」については、「地域連携」と「主体性の育成」を柱に、今後はコミュニケーション・スクールとしての連携・協働を視野に入れ、推進していきたい。



持続可能な地域づくりを目指す体験学習

浜中町・散布小中 大和 洋一

一 はじめに

浜中町は、北海道東部の太平洋沿岸、根釧台地に位置し、自然と調和をモットーにまちづくりが進められている。ラムサール湿地・北海道遺産に登録されている霧多布湿原や海岸地域は希少鳥類やラッコ等が生息し、多くの貴重な植物が群生する。この動植物や景観等の自然環境を保全しようとするこれまでの働き掛けが実り、令和三年三月三十日には国内で五八か所目の国定公園として指定され、「厚岸霧多布昆布森国定公園」が誕生した。

本校のある散布地区は、浜中町の沿岸部にあり、古くから漁業を中心とした水産業で発展してきた。その永い歴史とともに本校は開校一四一年を迎える。保護者や地域の願いのもと、教育活動を推し進めてきた「地域とともにある学校」であり、現在までその教育理念を継承し、人材（財）の育成を担ってきた。

二 本校の取組

1 「散布学（海洋編）」教育課程特例校での研究実践

本校は、小中併置校の利点を生かし、令和四年度の学校経営方針として「途切れない小中九年間の学びを通し、主体性と自己有用感の育成」を掲げた。平成三十一年度から三か年、北海道教育委員会「海洋教育パイオニアスクールプログラム」の実践校として、関係財団・専門研究機関等との連携・協力を得ながら研究実践に取り組んだ。また、令和二年度には文部科学省から教育課程特例校に認可され、「散布学（海洋編）」を教育課程に位置付けた。このコンセプトの一つとして「家庭や地域と思いや願いを共有する」を掲げ、地域に根ざしたふるさと教育、地場産業を通じたキャリア教育等との関連性や融合性を大切にして活動してきた。

2 特色ある体験学習を目指した海洋教育での取組 （小学校）

藻散布海岸学習では、始めに全校児童で海岸を散策しながら海岸のゴミ拾いや清掃を行う。海岸に打ちあがるゴミ、その中でもペットボトルを中心としたプラスチック製品や海外からの漂着物の多さに子供たちは驚きを隠さない（問題提起、探究心の芽生え）。その後、霧多布湿原センターの職員と一緒に／海辺の生き物探しを行い、どのような場所に生き物が暮らしているかを知るなど、体験を通して多くのことを学ぶ（自然愛護）。この体験から子供たちは「海の生き物について詳しく知る」「ゴミの多さへの驚き」「ゴミを減らすために自分たちにできることとは…」等の思いや課題意識を抱き、自分たちの地域や海辺の環境等について考え、海の生き物への生態系に影響を及ぼす海洋プラスチック（マイクロプラスチック）等について問題解決を図るための事後学習につながっている。

（中学校）

平成二十二年度に散布漁業協同組合より火散布沼にある「学校専用のあさり島（干潟）」を貸与し、以後あさり島活動（あさりの生態・保全と流通、益金での社会貢献）として、全校生徒と小学校五・六年生で活動している。この体験学習は、より地域の環境、資源の保全意識を高揚させることをねらいとして、校外の活動にとどまらず、中学生が小学校五・六年生教室へ出向き、あさり掘りや外敵駆除のコツを教える等、小中の垣根を越えて活動（小中一貫）に取り組んでいる。外敵駆除や稚貝撒きの活動を通して、「獲る漁業から育てる漁業」への意識が高められる。

三 おわりに

小中併置校における体験学習では、小中一貫した九年間の教育課程のつながりが改めて重要であると感じた。系統的な学習を通して、本校が描くランドデザインのもと、児童生徒の資質・能力を育み、また海洋教育を軸としたふるさと教育、キャリア教育等の充実、教育課程全体への波及効果を図れるよう工夫・改善、追究に努めていきたい。

様々な価値観に触れ、

自分の生き方について考える体験学習

札幌市・羊丘中 佐野友美

一 はじめに

本校は、地下鉄の終着駅が近く、様々な商業施設に近接しているが、幹線道路を一本隔て、落ち着いた住宅地が広がる地域に立地している。本年度は、二〇学級六六〇人が在籍している。開校五四年目を迎え、卒業生の中には、地域に戻って就職し、様々な形で地域に貢献している卒業生も少なくない。そうした地域の支援をいただきながら体験学習を実施し、生徒が自分の可能性や地域のよさに気づき、夢をもって未来を切り拓いていく力を育んでいきたいと考えている。その本校の「総合的な学習の時間」について取組の一端を紹介させていただく。

二 本校の取組

1 私たちが暮らす豊平区を知り伝えよう（二学年）

豊平区について「自分が知りたい」「人に教えたい」と思うテーマを設定し、図書やインターネットを活用して調べたものをレポートにまとめる。身近にある「さっぽろ羊ヶ丘展望台」や「札幌ドーム」のような施設を選んだり、豊平区の歴史や特産物であった「りんご」について選んだりするなどテーマはバラエティに富む。活動を通して、参考資料の引用の仕方、インターネット上の膨大な情報の中から適切に情報を得る方法などを学習する。また、伝える相手を意識した表現を目指し、適切なイラストやグラフの挿入、レタリング・配色といった効果的なまとめ方の工夫なども学習する。

2 職業を知り未来の「働く自分」を考えよう（二学年）

コロナ禍以前は地域の事業所を中心に、班ごとに出向いて貴重な体験をさせていただいた。しかし、昨年度に引き続き、今年度

も受け入れが難しい事業所が多いため、職業講演会に変更して八つの部門に講師としてお招きして実施した。生徒は興味のある部門の職業について調べ、講話や実習を通して、働くことの意義や職業に対する理解を深める。この学習によって望ましい職業観や勤労感を育み、主体的に進路を選択する力につなげることを目指している。また、二年次からは一人一台端末を活用し、学んだことや自分の考えをパワーポイント資料にまとめ、発表会を実施することによって表現力を高める機会としている。

3 様々な進路を知り、未来の自分を考えよう（三学年）

二年次の学習を基に、職業を選択する上で必要な知識や技能、資格を身に付けるための上級学校について調べ、豊平区内の大学や専門学校を実際に訪問し、自分の将来に向けて実感をもって考える機会としている。また、三年間のまとめの取組として、生徒一人一人がSDGsの掲げる一七の目標から一つ選び、その目標の視点から各業種や企業の取組内容やその効果について調査し考察する。そのまとめを発表会で交流し合い、視野を広げ深めていくことを目指している。これらの学習を経て、生徒一人一人が持続可能な社会を実現するための行動について考え、自ら社会に参画しようとする態度の育成を図る。

三 おわりに

本校の学校教育目標の一つに「公共につくす人」という目標があり、着任時、その目標が自分にとって最も心に響いた目標であった。知・徳・体を一体的に育み、その力を公共のために尽くせる人に成長させたいという開校当時の教職員の願いや地域の期待に想いを馳せた。様々な価値観に触れる体験学習が、生徒にとって社会の一員として自分の力を役立てたいと考える契機となるように、今後も内容を精選し、充実させていきたい。

特集

テーマ

学校教育の今日的な課題から

～更なる学校力の向上を目指して～

1

小中併置校の強みを生かして「主体性」と「自己表現力」を育む――

～小中コラボ授業から～

札幌市立福移中学校 瀧澤 佳実

2

「自己肯定感」の醸成で促す健やかな成長――

～大人が用意する居場所と子供同士で築く絆～

標津町立標津中学校 飯田 雄士

3

生徒一人一人が自分らしく生き生きと活動できる学校へ――

新十津川町立新十津川中学校 柴田 猛



小中併置校の強みを生かして 「主体性」と「自己表現力」を育む

小中コラボ授業から

札幌市立福移中学校 瀧澤 佳実

一 はじめに

本校は札幌市の北東、石狩川のほとりに位置し、周囲を牧草地に囲まれた素晴らしい自然環境に恵まれている。しかし、冬季は北西の風と地吹雪が吹き荒れ、自然の厳しさもちあわせた地域でもある。

本校は、札幌市で唯一の小中併置校で、小規模特認校である。福移小学校は明治三十三年開校、福移中学校は昭和二十五年開校と歴史のある学校である。さらに、昭和六十年に小規模特認校として認定された。自然環境に恵まれた小規模の学校で心身の健康増進を図り、体力づくりを目指すとともに、自然に触れる中で、豊かな人間性を培いたいという希望がある場合に、一定の条件のもと、通学が特別に認められている。

各学年二〇人定員で、現在六七人の小学生と四六人の中学生が同じ屋根の下で生活している。特認校のため、徒歩通学の生徒は校区内、指定変更区域を合わせてもわずかであり、大多数は特認入学による児童生徒である。

運動会やステージ発表会（学習発表会と学

校祭を合わせたようなもの）は、全校生徒で行う。また、本校の特色ある教育活動として、「レインボー活動」がある。小学一年〜中学三年を六つの縦割りグループに分け、一緒に農作業を行う。植える作物をみんなで考え、雑草取りや水まきを行う。最後は収穫した野菜を使ってカレーライスとポテトサラダを作って味わう。レインボーグループは、農作業以外の活動でも使われ、異学年交流の基盤となっている。

令和五年四月には、札幌市初の義務教育学校「札幌市立義務教育学校福移学園」として、新たなスタートを切ることになっている。これまで本校が小中併置校としての強みを生かして取り組んできた研究の取組を紹介する。

二 本校の研究について

【研究主題】

主体的に学び、進んで発信する子供の育成
〜福移の小中一貫の教育を通して〜

【育てたい姿】

（Ⅰステージ）小学一〜三年生

○興味・関心をもち、自ら考え、学び合う子

（Ⅱステージ）小学四〜六年生

○学んだことを生かし、根拠を明確にして考え合う子

（Ⅲステージ）中学一〜三年生

○自分の生き方と関連付け、見通しをもって追究する子

研究主題を達成するために、小学校では各学年の発達段階を考慮し、自ら問いをもち、自ら調べ、協働的に解決する学習のプロセスを積み重ねていく。中学校では、「聞く（調査）」「関わる（コミュニケーション）」「問う（批判的思考）」の三つの学びの型を軸として、段階的に「機能する学力」を身に付けるプロセスを進めていく。この小中学校の二つのプロセスを円滑に結びつけることが九年間の連続した学びにつながると考え、次のような研究仮説を立てた。

【研究仮説】

自ら問いを生み出す探究的な学習を行うことで、主体的に学ぶ意識を高めることができる。その学びの発表の場を設定し、互いに認め合うことで、進んで発信する意欲を高めることができる。

さらに、「育てたい六つの力」、ステージごとの「『六つの力』の目指す子供の姿」を確認し、二つの視点を整理した。

【育てたい六つの力】

- ・自分から進んで取り組む力（主体性）
- ・問題を解決する力（問題解決力）
- ・友達と協力する力（協働性）
- ・自分らしく表現する力（自己表現力）
- ・新しい視点を生み出す力（創造性）
- ・自分を伸ばす力（自己成長力）

【視点一】六つの力を高める授業づくり

【視点二】六つの力を支える教師の関わり

研究を進めるにあたり、中学校の教科に合わせて四つのグループを作り、その中で小学校教諭、中学校教諭の二人ペアを作った。基本的にペアの先生で授業を考え、全員が研究授業を行った。今回は、「育てたい六つの力」のうち、「主体性」と「自己表現力」に着目し、ペアで互いの授業に関わり、TTやゲストのような形で授業に参加する方法を考える。研究日を設定して授業準備を行い、研

究授業は全体に周知してなるべく参観し合うようにする。参観後に振り返りカードを書いて、授業者（ペア）と交流を図る。研究プロジェクトは「研究Pだより」を発行して、全教職員との情報共有を図った。

三 「コラボ授業」の様子

学年それぞれの研究授業の場合もあるが、今回は特に小学生と中学生が一緒に授業を行った「コラボ授業」を紹介する。

1 社会科（小学四年生と中学二年生）

小学校「わたしたちの北海道」、中学校「北海道地方く自然環境に注目して」のコラボ授業。学年は違っても同じ「北海道」を学んでいる小学生と中学生がそれぞれ学んだことを発表し合う。

「主体性」は、小学生、中学生ともに発表するテーマを自分たちで選択するようにした。「自己表現力」は、発表を聞いてもらう相手を意識して、資料の提示の仕方や話し方などが分かりやすくなるように工夫した。

コラボ授業を通して、小学生は中学生の発表のよいところを取り入れ、発表がレベ



ルアップした。中学生も対象が小学生ということを意識して、発表資料の作成や発表の仕方に工夫が見られた。同じ単元の発表をお互いに聞き合うということで、調べ学習にも熱が入っていた。

2 図工科・美術科（小学一年生と中学一年生）

小学校「ごちそうパーティーをはじめよう」、中学校「折って、切って、巻いてく紙で美しい装飾をつくる」のコラボ授業。学校の開校をお祝いする大きなケーキを作る活動を小学生、中学生一緒に行う。中学生が紙の加工技術を小学生に教えながら、大きなケーキの飾りを作っていく。

「主体性」は、小学生は作りたいという思いを広げて主体的に取り組む、中学生は紙の加工技術を教えることを通して、自分から進んで取り組むことが期待される。

「自己表現力」は、小学生は自分の作りたいものを楽しみながら作ること、中学生は技法を伝えるための分かりやすい表現や伝え方の工夫が求められる。

コラボ授業を通して小学生には、新たな素材との出会いや中学生とワークショップ形式の制作によつ



て、児童の思いを広げて主体的に活動に取り組む手だてとなっていた。中学生は小学生に「教える」必要に迫られるため、どの生徒も意欲的に取り組む姿勢が見られた。年齢差のある児童と生徒が、同じ目的意識をもって交流しながらの学習は、先輩としてのプライドや下級生の上級生へのあこがれなど、様々な気持ちを刺激して、意欲的に学習に取り組むことができた。

3 生活科・技術・家庭科（家庭分野）

（小学一年生と中学二年生）

小学校「もうすぐ二年生」、中学校「幼児の生活と遊び」のコラボ授業。小学生は二年生になると新一年生との交流があるので、中学生の「ステキポイント」を学び、中学生は読み聞かせを通して絵本の楽しさや絵本が子供の発達に果たす役割を実感する。コロナ禍でなかなか交流する活動はできなかったので、久しぶりの活動となった。

「主体性」は、小学生は目的意識をもって意欲的に観察したり、質問したりすることにつながり、中学生はお気に入りの絵本への思いを小学生に伝え、楽しんでもらえるような読み聞かせを工夫する。「自己表現力」は、小学生は新一年生との交流に向けて自分の役割を自覚し、自信をもってできることを考え、表現すること、中学生は聞き手に寄り添った読み聞かせをする工夫が求められる。

コラボ授業を通して、小学生は中学生の「ステキポイント」を見付けることで、読み聞かせを楽しむだけで終わることなく、中学生の行動を細かく観察しようと集中できた。中学生は、自分自身が選んだ絵本をどのように表現するのよいかを試行錯誤しながら、楽しんでもらえるような工夫を凝らしていた。



四 まとめ

コロナ禍によって学習活動が制限される中、それぞれの教科が児童生徒たちの学習意欲を高める様々な「仕掛け」のある授業を工夫した。単元の中に小中学生の関わり場の設定することで、目的意識や相手意識が明確になった。また、直接の交流はなくても、教師が小中の系統性を意識して授業を行うことで、小学生が見通しをもって学習ができ、中学生が既習事項を意識して学習することができた。教科によって違いはあると思うが、小中のカリキュラムをお互いが知り、計画的に継続的に取り組んでいくことが大切だと思う。

小学生と交流している中学生は、私が今まで関わってきた中学生の姿とは少し違

う。小学生のときからいろいろな場面で中学生と関わってきた、いざ自分が中学生になってあのときのお兄さん、お姉さんのようになりたいと努力をする……本校がこれまで異学年交流を通して大切にしてきたものが、コラボ授業でも見えてくる。本校の強みである小中学生同士の関わりが、何より大きな「仕掛け」になっている。

五 おわりに

札幌市は、教育の重点の一つである「小中一貫した教育」の推進により、パートナー校による校種間連携の様々な取組が進められている。

札幌市初の義務教育学校として開校する本校は、これまでの歴史や強み、良さを生かしながら、義務教育学校開校に向けて準備を進めている。本校は現在も小中一貫した教育をやっているようなものだから、すぐ準備ができるだろうと思われるが、違う文化をもった二つの校種が一つの学校になるのはなかなか大変である。これまでの伝統を大切に継続していく部分、そして新たに創り上げていく部分と課題はまだ多い。

しかし、これまで小中併置校として培ってきた財産を大切に、教職員一丸となって新しい学校をさらにバージョンアップしていきたいと考えている。



「自己肯定感」の醸成で促す健やかな成長

～ 大人が用意する居場所と子供同士で築く絆 ～

標津町立標津中学校 飯田雄士

一 はじめに

「日本で最も美しい村」連合に加盟する人口約五、〇〇〇人の標津町。ポー川史跡自然公園は、国指定史跡「伊茶仁カリカリウス遺跡」と国指定天然記念物「標津湿原」からなる総面積六三〇haの広大な保護区域であり、歴史文化のストーリー『「鮭の聖地」の物語〜根室海峡一万年の道程〜』は令和二年六月に文化庁主催の日本遺産に認定されている。

町内には、認定こども園二園・小学校二校・中学校二校、高等学校一校の教育施設がある。標津中学校は、現在五学級（特別支援二学級を含む）で生徒数は七六人。二十年前（平成十四年度）の一六一人から半減している。

町の教育に対する理解は深く、一八歳以下の医療費を全額補助。「学ぶ道具」としてすでに定着している一人一台端末の効果を更に高めるために、全小・中学校にAI教材を導入するなど、未来を担う子供たちと教育現場への支援が手厚い。教職員は「いい地域には、いい学校がある」ことを実感しながら、「いい学校は、いい地域を創る」となるよ

う、「子供たちの成長」という共通の目的に向かって邁進しており、本校を含む標津町の子供たちの「学力」「体力」は、各種調査において概ね全国平均を上回る水準となっている。



二 「心の土台」となる自己肯定感

自己肯定感は子供たちの成長や、大人になつてからも重要な「心の土台」である。本校では、全国学力状況調査生徒質問紙「自分にはよいところがあると思いますか」を示す等、自己肯定感の低さが大きな課題となっていた。また年間三〇日以上長期欠席者も令和元年度には一一・五％に達していた。

今年度は「よいところがある」が九五％まで上昇し、長期欠席者は一％台の見込みである。さらに生徒質問紙「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」の肯定的回



答が七五%と全国平均以上となったことが、学力・体力の向上へつながったと考えている。

三 全ての子供に大人が用意する居場所

自己肯定感は一朝一夕に醸成されるものではない。学校教育という限られた時間で成し遂げるには、それなりの覚悟と根気、そして多様な子供一人一人に寄り添い続ける深い愛情が必要である。手前味噌ではあるが、本校職員にはそれが揃っている。

五学級で教諭職一人。単純に考えれば半数は「空き時間」となるはずだが、職員室に在る教諭は少ない。支援員・学習指導員も含めて複数体制で教室に入り、全ての子供を対象に必要なサポートを行う。昨年度の長期欠席者は七・三%だったが、病弱学級在籍生徒を除いて完全不登校は〇だった。それは保健室をはじめ、多様な「別室」を用意したからである。給食の時間は教室で生徒とともに黙食。昼休みには職員の数だけ居場所が用意される。もちろん校長室も開放している。放課後には、部活動以外に次のような居場所もある。(〇〇は教員の名前)ギターを演奏したり各種コンクールに応募する作品を創ったりしながら学年問わずワイワイと賑やかな「〇〇プロジェクト」。静かに自習し、分らないところを先輩や友人、先生に質問できる「〇〇塾」。本校生徒が比較的苦手とする数学科の学び直しに特化した「〇〇ゼミ」。

全職員での「居場所づくり」の成果は、生徒質問紙「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の肯定的回答

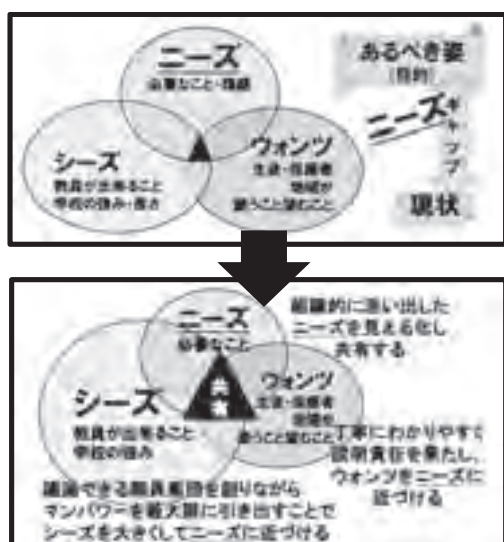
一〇〇%という結果となって表れている。しかしながら、これらの取組は教員の時間外勤務を伴いがちである。現在は、「ウィーク・タイズ(ゆるいつながり)」をキーワードに、地域による居場所づくりを模索しており、部活動の地域移行はもちろん、地域有志による「がり勉強場」の開設や、漢字・数学・英語等の各種検定を大人と子供が共に挑戦できる機会づくりについて検討している。

四 教職員・保護者・地域との課題共有

◎「シーズ(種)」学校文化(強み)や職員集団の持ち味。どう芽生えさせ、花を咲かせるか。

◎「ウオント」生徒・保護者・地域の願い。

◎「ニーズ」目的と現状を照らし合わせて見えてくるギャップ。「あるべき姿」に到達していない現状を改善するために必要なこと。



この三つの重なる部分が小さいと経営力

が低下するため、組織的に洗い出したニーズへ、シーズとウオントを寄せることが重要である。

本校では、教育課程編成に向けて一月に全職員でキックオフミーティングを行っている。学校評価結果(ウオント)をもとに、本校の良さ(シーズ)を確認し、ニーズ(すべきこと)をあぶりだす会議である。



「自己肯定感」もニーズとして挙がり、

▼主体的に壁に立ち向かう力

▼失敗を恐れずに挑戦する力

▼立ち直る力(レジリエンス)

を高めるための改善策がブレインストーミングで数多く出されることとなった。

また月例職員会議において、校長が提示するテーマ(例えば「学ばせる」と「学ばさる」・「チーム標中」と「標中グループ」・インナーブランディングとは?等々)について職員が率直に話し合う「十分間協議」を行っている。校長は協議する声にひたすら耳を傾け、職員の価値観・関心度を把握しながら、半期ごとに策定する

経営マップへの落としどころや、保護者・

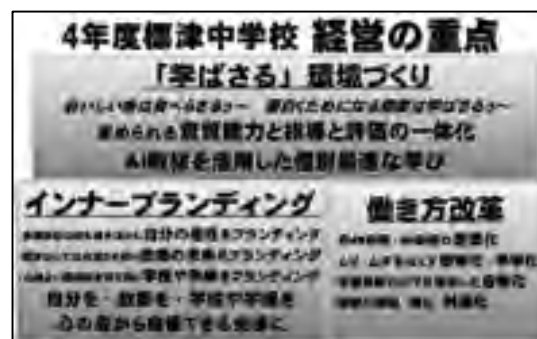
地域とも共有できそうな「重点キーワード」を探る。その結果、今年度に採用したのは、「学ばさる環境づくり」と「インナーブランディング」である。

「インナーブランディング」

は聞き慣れない言葉かもしれないが、多くの企業では自社独自の価値を向上させる「ブランディング」に努めており、消費者や顧客に対する「アウトター」だけでなく、従業員が会社の理念やビジョンに共感し、扱う商品やサービスの良さを心の底から理解できるように「インナー」にも力を注いでいる。学校現場に置き換え、子供を主語にすれば、

五 子供同士で築く絆へ

「まずはやってみよう！」という職員室文化の下、昨年度からこれまでに、生徒や保護者とも相談しながら追加・変更となった教育



活動は次のとおりである。

● 全校集会でのミニレク。生徒会委員による「みなさうん。こうんにちはう」の掛け声に全生徒が「こんにちは！」と応じて始まるレクは、毎回素敵な笑顔を創り出している。

● 文化祭発表を異学年縦割り活動に。三年生のリーダーシップに下級生が「あんな先輩に自分もなりたい！」と憧れを抱いている。

● 日常活動を見取り、「求められる資質・能力」「指導」「評価」を一体化させるために年間評価計画を策定。中間テストを廃止した。一人一台端末を活用してクラウド上に蓄積される学習ログや「思考ツール」を評価。対話的な学び・協働的な学びが促進され、「分らない」ことが否定されることなく互いに考えを交流し、伝え合い、教え合う姿が急速に広まった。

● 発信・交流型の授業参観日を開催。地元高校生との避難所運営ゲームHUG、中学三年生が卒業生へ高校生活について質問する座談会、下級生への修学旅行・宿泊研修・職場体験報告会、写真一枚で町の良さを紹介する一分PRなど、異年齢間のつながりが深まり、保護者や地域の方々からも喜ばれている。

このような取組により、令和四年七月実施学校評価「みんなで何かをするのは楽しい」の肯定的回答（全校生徒）は九七％に達した。

六 標津町からの手厚い御支援をいただいて

「肯定感」を高めるための取組は、標津町全体としても多く行われている。

☆自分が歩んだ「道」を肯定的に捉えて未来を拓けるよう、各学期にA四版両面一枚ずつ顔写真付きで記録する「小中高一貫キャリアパスポート（道標ファイル）」を作成。

☆ふるさとの未来を主体的に創る気概を醸成するために「園小中高一貫ふるさと学習プログラム」をA三版にまとめ、町内全戸に配布。

☆多様な「性」を尊重し、誰一人苦しめないことを目的に、中学校標準服を詰襟・セーラーからブレザー型に変更。（五年度より）

☆個別最適な学びを保障するために、小中学校にAI教材「キュビナ」を導入。地元高校生にも「スタディ・サブリ」を提供している。

☆視野を広げ、「グローバルな町づくり」を推進するために、中学三年生の修学旅行を本州への体験・交流型に変更。地元高校二年生には東日本大震災被災地への視察研修費用を補助することになっている。（五年度より）

自己肯定感の醸成は、あらゆる面で子供たちの健やかな成長を促し、学校経営に好循環を生み出す。いずれは地域の発展にもつながるものと確信する。「自分にはよいところがある」の肯定的回答が一〇〇％となるよう、今後も、教職員・保護者・地域の方々・教育行政・そして子供たちを加えた五者が一体となり、継続的に取り組んで参りたい。



生徒一人一人が自分らしく生き生きと活動できる学校へ

新十津川町立新十津川中学校 柴田 猛

一 はじめに

1 新十津川町の概要

本町は道央のほぼ中央部にあり、東部に石狩川を隔てて滝川市・砂川市・奈井江町と相対し、西部にはピンネシリ山脈をもつて当別町と増毛山脈・暑寒別連峰を望む。

校区は、石狩川・徳富川などの大小三河川の流域に広がる沖積土地で、水利に恵まれた純農村地帯として発展してきた。近年は、農家も大規模化が進みスマート農業の普及にも力を入れ、人口流入も多く、近隣市のベッドタウンとしてサラリーマン世帯も増加している。

二 本校の概要

1 教育目標

- 【開明】知性を磨き創意工夫する生徒
- 【共働】個性を生かし心豊かに活動する生徒
- 【深刺】心身を鍛え逞しく生きる生徒

2 学級数・生徒数

	学級数	生徒数
一年	2	49
二年	2	49
三年	2	46
特別支援学級	3	7
合計	9	151

3 本校の特色

深刺と挨拶を行う生徒が多く保護者世代以前から継続している歌声（合唱）活動が盛んであり、短学活前に「歌声」を日課として設定していた時代もあったが、現在は放課後活動の時間を確保するため行われていない。しかし、生徒の中に伝統は受け継がれ、学校祭や卒業式には一体感のある歌声が響き、休日に行われる地域参観・歌声交流会には、地域の方も来校する。

近年、「ふるさと教育」を軸として「スマート農業（社会）」「職場体験」などに、新十津川町と連携して取り組んでいる。

卒業後は、ほぼ全員が高等学校への進学を希望し、地元農業高校をはじめ、近隣市や札幌・旭川方面の高校へ進学している。

三 自分らしく生きられる学校・社会

全日中学校長会編集の「中学校N〇八二四」（以下「同書」という。）において、宮崎元校長先生に御指摘いただいている、学校教育

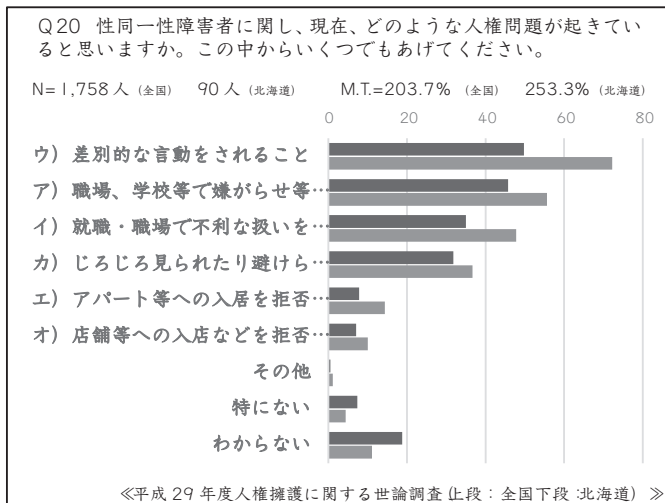
育における性的マイノリティに関する理解の不十分さについて、学校教育に携わる者として危機感を抱いているところである。

インターネットで公表されているデータにはなるが、日本人口におけるLGBTQの割合は、調査によってばらつきが出ているが、一・八％～八・九％、「同書」で宝塚大学日高教授が推定している割合は五％～八％前後が何れかのセクシャルマイノリティに該当するとみている。

また文部科学省の平成二十六年に公表された「学校における性同一性障がいに係る対応に関する状況調査について」（以下、「調査」という）の結果によれば、「学校が把握している事例を任意で回答」した結果、六〇六件の報告があった。そのうち、四三・一％が他の児童生徒や保護者に対して秘匿し、また、性同一性障がいとして診断されている割合は、全体で二七・二％となっている。

さらに、平成二十九年度に内閣府で実施した「人権擁護に関する世論調査」では「性同一性障がい者に関し、現在、どのような人権問題が起きていると思いますか」

という問に対し、「差別的な言動をされる」「職場、学校等で嫌がらせ」を上位に挙げている。



これらは、性同一性障がい、社会の中で偏見が生じやすいことや少数派であることによる不当な扱いなどから秘匿されるケースも約半数あり、定数把握が難しいという特性に依存するものと考えられる。

また、「自殺総合対策大綱」誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して」（平成二十九年七月二十五日閣議決定）においては、性的マイノリティは自殺念慮を抱えやすい傾向があるとし、学校での自殺総合対策として「教職員の理解促

進」と「学校における適切な教育相談の実施」が挙げられている。

学校においてはまず、こういった背景や施策、性同一性障がい等の特性を十分理解する必要がある、自己否定・社会否定からくる「自傷行為」や「不登校」などに遷移し、「いじめ」や「人権問題」に発展することを想定した対応が求められる。特に、本件の秘匿性を十分考慮して、ICTを活用した匿名・非対面での教育相談等、相談機会を充実させていくことが急がれる。

1 性の多様性に対する基本的な対応

北海道教育委員会では、文部科学省が先に実施・公表した「調査」の結果を踏まえ、平成二十七年一月、教職員向けに「性同一性障がいの理解のために」という資料を出している。

項目	学校における支援の事例
服装	自認する性別の制服・衣服や、体操着の着用を認める。
髪型	標準より長い髪型を一定の範囲で認める（戸籍上男性）。
更衣室	保健室・多目的トイレ等の利用を認める。
トイレ	職員トイレ・多目的トイレの利用を認める。
呼称の工夫	校内文書（通知表を含む）を希望する呼称で記す。自認する性別として名簿上扱う。
授業	体育又は保健体育において別メニューを設定する。
水泳	上半身が隠れる水着の着用を認める（戸籍上男性）。補習として別日に実施、又はレポート提出で代替する。
運動部の活動	自認する性別に係る活動への参加を認める。
修学旅行等	1人部屋の使用を認める。入浴時間をずらす。

具体的事例を挙げている。

2 本校での基本的な考え方

本校では、人権教育を基盤に、次の項目について職員と共有している。

(1) 学級づくりや授業づくり、自分の性に違和感を覚えている生徒が学級に所属していることを前提として

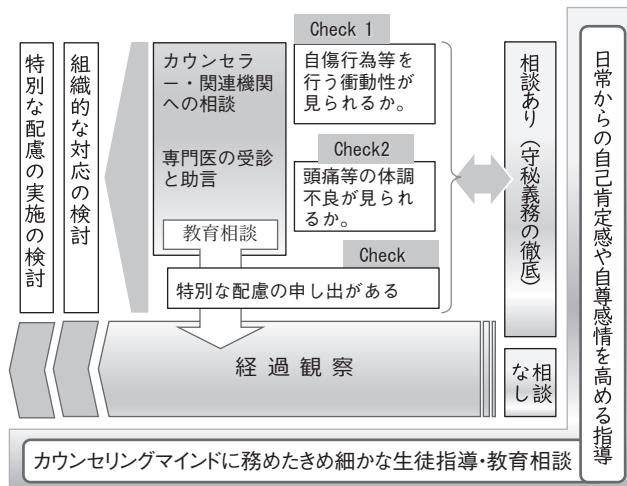
- ① 人権教育を基本とした自尊感情や自己肯定感を高める学級の雰囲気づくり及びジェンダーギャップの解消に務めること
- ・ 差別感のない雰囲気づくりと所属する学級集団への貢献の認識
- ・ 無意識バイアスへの留意

(2) 保健体育等、関係教科での配慮と正しい知識の指導

- ② カウンセリングマインドを大切にしながら日常的な教育相談
- ・ 生徒が一人で抱え込まないように
- ・ 相談できる人の存在と確認
- ・ 相談しやすい態度

(3) 支援してほしいことの有無

- ③ 本件の特性を理解すること
- ① 性同一性障がいは病気ではなく「状態」であること
- ② 秘匿性が高いこと
- ③ 生徒一人が悩みを抱え込み、体調不良が生じたり、登校しにくい状況となったりする可能性があること
- ④ カミングアウトがあった場合、



(4)

学校行事での(配慮事項の)点検
多様性に対応しているか

- 身体測定・健康診断の実施方法
- 宿泊行事での部屋割や入浴
- 服装 など

⑤

「特別な配慮」について、学校の施設や設備で十分対応できない可能性があること。また、保護者から

の「特別な配慮」の申し出があった場合、できうる限りの配慮実施を基本に組織的に対応すること

3 方向性と課題

(1) 高度情報化によりグローバルで多様化した現代社会において、言うまでもなく生徒にとって必ずしも自己肯定的な情報だけ取得されるわけではない。

(2) そうしたときに、当事者は自尊心が揺らぎ、時に体調をくずし、メンタルヘルスに影響を及ぼしたり、さらに、生徒の集団の中でいじめや、人権を否定する事案が発生したりすることが懸念される。

(3) また、「調査」の結果にあるように、我が国で診断できる専門的な医療機関が多くないこともあり、医療機関へ受診している割合は四〇%ほどである。「性同一性障がいなのか、一過性の気持ちなのか気持ちが揺れ動く」との記述があるように、特性上看取り難しく明確にし難い。したがって学校組織でも、内容上、組織的な対応が求められるが、担任や養護教諭等、関係者のみの情報共有が中心となっていることも「調査」結果から見て取れる。

(4) 性の多様性についての基本的な教育は、アップデートされた人権教育の全体計画に沿って包括的に考えていく必要がある。人権教育はそれ自体、自由と責任などの権利や義務、歴史性や現状認識などの知識的側面を理解し、自他の尊厳や多様性に対する認識を深めて人権感覚を育み、

それを評価したうえで、建設的に解決する実践的態度(人権意識)を養うことが求められる。これまでの人権教育と同様に、多様性に対応した人権感覚や人権意識を醸成する学校づくりが必要である。

(5)

さらに、私たち教職員は、自分の性に何らかの違和感を覚えている生徒が学校・学級に所属して「いる」か「いない」かに関わらず、また当事者が、「特別な」配慮を受ける特殊な人間ではなく、あらゆる人が孤立したり、排除されたりしなく、生徒一人一人が自分らしく生き生きと活動できるダイバーシティ的な発想で、学校経営を行う必要がある。中学校三年間の中で生徒一人一人に寄り添い、自己選択や自己決定を通して、個性の伸長を図りながら人格を尊重し、社会的資質や行動力を高めるといふ生徒指導の肝の部分に変わりはないと考える。

(参考・引用)

□「中学校N〇八二四」(全日中校長会)

□「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」(H二六、六、十三文部科学省)

□「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」(H二七、四、三十九文部科学省) ほか。

今年 の道中

第七三回

全日本中学校長会研究協議会

北海道（札幌）大会を終えて

札幌市・中央中 秀島 起也

（研修部長）

一 はじめに

第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会は、大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」、大会スローガンに「イランカラプテ 北の大地から 新たな学びを紡ぎ その先へ」を掲げ、十月十九日から二十一日の三日間、オンラインにて開催された。これまでの研究成果を踏まえ、全国の中学校長の英知と創意を結集して、主題に迫る具体的な方策を究明し、我が国の中学校教育の一層の充実発展を期するべく行われた大会であり、学校が直面する課題に対し方向性を示す大会であった。開会式で、平井邦明大会長は「新たな時代の教育を推進し、それを支える教師を育成するため、『高いところさし』をもち、『共に』を合言葉に全国の会員の皆様と取組を進めていくことができればと考えております」と挨拶された。

野崎均大会実行委員長からは、大会スローガンに込めた熱い思い、参加者への協力依頼と関係各位への謝意、そして大会成功を期する御挨拶があった。

二 文部科学省説明

文部科学省大臣官房審議官安彦広斉様からは、当面する諸課題及び質問事項について、説明をいただいた。

三 全体協議会

全日中提案と地区提案の二つの提案について協議した。

◎第一研究協議題（全日中提案）

学校からの教育改革「近年の調査研究報告書から読み取れる教育課題とその解決に向けて」

（提案者） 全日本中学校長会 教育研究部長 福沢 俊之

◎第二研究協議題（地区提案）

伝統文化教育を活かした人材育成「歌舞伎「勸進帳」上演を通して」

（提案者） 石川県小松市立安宅中学校長 為川 学

石川県小松市立丸内中学校長 廣瀬 真樹

四 分科会

八つの分科会も全てオンライン開催となり、各研究主題のもと提言が行われ、協議の柱に基づき熱心な協議が行われた。

【第一分科会】

「カリキュラム・マネジメント」の推進

◎提言一

「資質能力を育むカリキュラム・マネジメントの構築」

（協議の柱）

学校教育目標達成のための校内組織、研究体制について

（提案者）

京都府京都市立下京中学校長 山田 敦

◎提言二

「システム・枠組みから働き方改革への挑戦」一七時完全下校に向けて」

（協議の柱）

子供たちによりよい教育を提供する基盤としてのシステム、枠組みからの働き方改革

（提案者）

兵庫県神戸市立本山中学校長 古川 雅一

【第二分科会】

「主体的・対話的で深い学び」の実現

◎提言一

「小・中九年間を見通した授業改善」

（協議の柱）

「主体的・対話的で深い学び」につながる授業改善に組織的に取り組むための校長の役割

（提案者）

福岡県苅田町立苅田中学校長 竹原 昭夫

◎提言二

「学校再編を見据えた『さいと学』の再構築を通して」

（協議の柱）

「主体的・対話的で深い学び」を促進するための学習内容や学習方法、評価はどうあればよいか

（提案者）

宮崎県西都市立都於郡中学校長 大澤 由一

【第三分科会】

よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実

◎提言一

「人間性豊かで心身ともにたくましい、実践力のある生徒の育成」スローガン「ともに学び ともに高める」

（協議の柱）

道德教育活性化に向けた、校長の役割

（提案者）

香川県高松市立紫雲中学校長 溝渕 隆弘

◎提言二

「郷土を愛し郷土をより良くしようとする生徒の育成」

（協議の柱）

郷土を愛し郷土をより良くしようとする生徒の育成に向け

た取組の工夫について

（提案者）

愛媛県松野町立松野中学校長 毛利 正寛

【第四分科会】

健全で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実

- ◎提言一 「コロナ禍でも続ける体力づくりと心身の健康の保持増進の取組」

〈協議の柱〉 外部資源の活用や地保学の連携による、コロナ禍でより充実した教育活動を図る学校経営

〈提案者〉 石川県能登町立松波中学校長 中社 進

- ◎提言二 「心身の健康の保持増進に関する指導の充実」

〈協議の柱〉 校長として生徒の課題をどのように把握し、心身の健康の保持増進のために家庭や地域と連携して取り組むか

〈提案者〉 三重県亀山市立関中学校長 岩間 浩哉

【第五分科会】

社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

- ◎提言一 「キャリア教育における『総合生活力』と『人生設計力』の確かな育成に向けて」

〈協議の柱〉 コロナ禍におけるキャリア教育実践の考え方と推進について

〈提案者〉 岩手県花巻市立花巻中学校長 柏木 廣喜

- ◎提言二 「学校課題を踏まえ、学校・地域の特性を生かした指導の在り方」

〈協議の柱〉 学校や地域の特性を生かし実効性のある取り組みを展開するために工夫すべきこと

〈提案者〉 山形県南陽市立宮内中学校長 佐藤 政彦

【第六分科会】

自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導力を育成する生徒指導の充実

- ◎提言一 「家庭・地域・関係機関と連携した生徒指導の充実 ～人間関係づくり・社会資源を生かした学校経営～」

〈協議の柱〉 生徒指導上必要となる関係機関との連携を進めるために、校長してどのようなことを意識しながら、学校経営を行っているか

〈提案者〉 山梨県甲府市立富竹中学校長 菅谷 信

- ◎提言二 「自分を大切に思える健全な自尊心・自己肯定感を育む学校経営と地域連携」

〈協議の柱〉 自己実現に向けて、健全な自尊心や自己肯定感を育む際の阻害要因の未然防止について（いじめ、不登校 など）

〈提案者〉 埼玉県蕨市立東中学校長 岡部 慎一

【第七分科会】

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

- ◎提言一 「各中学校の枠を超えた笠岡市中学校長会の人材育成の取組」

〈協議の柱〉 各中学校の枠を超えた教職員の人材育成について
岡山県笠岡市・矢掛中学校組合立小北中学校長
三井 亘

〈提案者〉

- ◎提言二 「小規模校における若手教員の育成」

〈協議の柱〉 組織的なOJTによる若手教員の人材育成の在り方
広島県江田島市立三高中学校長 沖元 成寿

【第八分科会】

現

- ◎提言一 「人づくり・まちづくりの一体的な取組を通して」

〈協議の柱〉 持続可能な取組にするためには
北海道岩見沢市立栗沢中学校長 伊藤 聰

- ◎提言二 「地域の特色を強みに変える『チーム学校』の取組を通して」

〈協議の柱〉 地域と一体となった「チーム学校」を実現していくための「校長のリーダーシップ」と「学校組織マネジメント」の在り方
北海道壮瞥町立壮瞥中学校長 松岡 賢晃

五 記念講演

- ◎演題 「日本に突き付けられる新たな規範 ～ポリティカル・コレクトネス～」

◎講師 山口 真由 氏（信州大学特任教授、ニューヨーク州弁護士）

時代の流れや、昨今の子供の傾向をも取り入れた示唆に富む内容であった。また、日本の家的な普遍の良さも残しつつ「個」を成長させていく教育の転換、ポリティカル・コレクトネスについて学ぶことができ、とても有意義な講演であった。

六 おわりに

全国各地から約九〇〇人の会員がオンラインにて参加し、今日的な教育課題について交流を深めるとともに、全国情勢も把握することができた大会となった。札幌市中学校長会をはじめ、お力添えいただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。次期開催の道中研小樽大会の成功を祈念し、本年度研究大会の報告とする。

学校と地域の連携・協働による

「チーム学校」の実現

く人づくり・まちづくりの一体的な取組を通してく

岩見沢市・栗沢中 伊藤 聡

I はじめに

新しい時代を見据えた学校教育には、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない学びの実現と、その学びを支える質の高い教育活動を実施可能とする環境整備の必要性があると示された。そのような中で謳われた「令和の日本型学校教育」は、コロナによる社会の急激な変化の中で再認識された学校の役割や課題を踏まえた「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び」の実現を目指すものである。本分科会の研究主題である「学校と地域の連携・協働による『チーム学校』の実現」は、答申内容にあるように、学校教育を学校内に閉じず、地域の人的・物的資源も活用し、社会との連携及び協働によりその実現を図る「社会に開かれた教育課程」を重視する。さらに、学校全体で子供や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的・目標の実現に必要な教育内容等の教科等横断的な視点での組立て、実施状況の評価と改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図る「カリキュラム・マネジメント」の確立に密接に結び付くものであると考えられる。

学校においては、上記の内容と感染収束後の「ポストコロナ」を見据えながら、学校における「働き方改革」「GIGAスクール構想」と一体的に捉えつつ、誰一人取り残さない教育活動を展開することが大切である。

II 地域・学校の状況

岩見沢市は、緑豊かな石狩平野の東に位置し、北海道の中でも豪

雪地帯として知られる地域である。その岩見沢市の南に位置する栗沢町は、かつては一自治体として存在したが、平成の大合併で岩見沢市と合併した地域である。本州からの開拓農民が開墾した農村地帯であり、今でも本州各地の地域名がそのまま地区名となっているところが多く、歴史と文化が受け継がれている町である。

III 研究の概要

1 過去三年間の取組

(一) 小中連携教育から小中一貫教育へ

栗沢中学校区では、平成三十一年より小中連携活動の抜本的な見直しと、学校・家庭・地域の連携強化を一体的に捉えた学校改革に精力的に取り組んできた。

そのような中、岩見沢市は、岩見沢の子供たちの将来を見据え、地域性を生かした望ましい教育環境を提供することを最優先に考え、全市的に小中一貫教育を推奨する「岩見沢市立小・中学校の適正配置に関する基本方針」を示した。

栗沢中学校区では、平成十七年度まで行政区域が分かれていたことや、隣接校との統合ではスクールバスでの通学上の負担が大きくなるなどの理由から、地域に学校を残すことが必要だと判断された。そして、義務教育九か年を見通した柔軟な教育課程の中で、小・学一年から中学三年までの幅広い交流活動や仲間づくり、専門性を生かした教員の相互乗り入れ指導などに取り組むことができる小中一貫教育の導入を進めることが妥当ということになった。さらに、年末の岩見沢市立通学区域審議会の答申において、栗沢中学校区においては義務教育学校を開校することが望ましいと示された。

地域の子供の数の減少が大きな要因ではあるが、校舎の改修を含めた大きな改革であることには間違いのないところであり、ほとんどの教職員が経験したことのないビッグチャレンジに保護者・地域を巻き込んだ一大プロジェクトとして改革を進めることとした。日本全国においても義務教育学校はまだ数が少ない中ではあるが、全国各地の取組を参考にしながら、栗沢ならではの学校づくりを推進

していきたいと考えている。

(二) 先進校から学ぶ

小中一貫教育を推進していくにあたっては、小学校低学年の担当教員が中学校卒業時の姿をどうイメージしながら日々の教育活動を行っているのか、また、中学校の教員は、小学校のどの段階で何を学び何につまずいて今の子供たちがあるのかを知って指導にあたるのが大切であると考ええる。これまでも小中連携活動は行われていたが、活動ありきで目的や目標が一致しておらず、本当の意味でのつながりを見いだすことができていない状態であった。そこで、子供たちの実態を踏まえながら、学習面においても、生徒指導面においても、どの段階での課題解決が必要であるかを互いに分析し、結果として九年間をどのように振り分け教育課程を編成・実施すべきか考えることを第一とした。平成三十年に視察した京都市立東山泉小中学校は五―四制、京都市立凌風学園は四―三―二制であり、それぞれのメリット・デメリットを栗沢の子供たちに照らし合わせ、一stステージ(小一―小四)、二ndステージ(小五―中一)、三rdステージ(中二―中三)として教育課程を編成していくこととした。

令和五年度に小中一貫教育を開始し、その後義務教育学校開校となる予定であるので、今いる教職員全員で産みの苦しみを乗り越え、日本一の義務教育学校を合言葉に取組を進めていくことを確認した。

(三) 小中協働委員会の活動

平成三十一年度より、小・中学校の分掌組織の統一を足掛かりに、目指すべき学校像・子供像と教職員像を共有して小中が一つになり分掌部会などを開催し、組織的・機動的にカリキュラム・マネジメントを展開していくことを目的として、本委員会を



小中協働レクチャー

立ち上げた。

異動してきた教職員に向けて年度初日の校長による経営レクチャーと、小中統一授業スタイルの模擬授業等を実施している。小中協働委員会設立四年目を迎え、職員同士の活発な交流は定着した。共有アプリでの掲示板、研修資料、授業配信など、コロナ禍の中あっても充実した取組を推進している。また、ホームページも共有し、定期的に更新するとともに、各種行事における取組なども地域・保護者にタイムリーに届けている。

(四) 小中カリマネ委員会

令和二年度から小中学校経営方針を統一し、小中協働委員会の上部組織として小中カリマネ委員会を設立した。各校には、校内カリマネ委員会も設置し、ほぼ同一メンバーで学校教育目標の具現化に取り組んでいる。

特徴的な部分としては、事務職員を参画させることで、カリキュラム・マネジメントの一つの要素である人的・物的資源等の活用部分で効果的な活動が実施できている点が挙げられ、予算執行面で大きな成果が表れている。

また、中学校においてはカリマネ委員会が機動的に運営されていることによって業務のスリム化が進み、旧態依然の職員会議の必要性が減り、令和四年度においては、四月当初と十月に次年度経営方針を示す年二回だけの開催となっている。教員同士の報告・連絡・調整が職員室内での日常会話の中で完結し、DCAPサイクルでの学校運営が可能となっている。

(五) 学習ガイドブックの作成

平成三十一年度に義務教育九か年の一貫した学習スタイルを確立するための指針を作成。毎年改訂を加え、児童生徒の実態に合わせた内容になっている。



岩見沢市の「子どもと創る授業」の研究指定校にもなっており、これらを基盤としながら子供の実情を踏まえ「栗沢スタイル」として実施している。

令和二年度より改訂担当が研修係となり、「栗沢スタイル」の改善とピア・サポートの浸透が図られ、九か年の学習規律が整理されるなど、小中一貫教育に向け、より一層の進化が予測されるものとなっている。

(六) 小中合同行事

(小中合同運動会)

令和二年度はコロナの影響により秋開催となったが、全国各地の義務教育学校開校時には賛否を含め様々な意見があった行事をあえて実施した。保護者・地域を巻き込んだ地域の一大イベント的な存在に発展していくことを期待している。六年生保護者からは、小学校の最高学年としての役割が減り、物足りなかったという意見も出たが、これらの声を大切にしながら、改良していきたいと考えている。

(マロンドリーム発表会)

令和三年度から生活科・総合的な学習の時間を一体的に捉え直し、九か年の全体指導計画を策定した。その発表会を十一月に開催し、併せてこども園の園児を招待して園・小・中合同合唱交流会を行った。栗沢在住の一五歳以下の子供たちが一堂に会する行事となり、コロナ禍ではあったが、多くの保護者・地域の方が参観し、盛大な催し物となった。



こども園・小・中合同合唱交流



(七) 特色ある教育活動

(グローバル教育へふるさと教育とSDGs)
特色ある教育活動として令和元年度からSDGsに特化した授業を展開している。特に二ndステージ(小五〜中一)に重点を置き、中一ギャップ解消に効果が見られた。三rdステージ(中二〜中三)はSDGsの一七項目の中からテーマを選択し、栗沢地域で課題解決を図ることができる探究活動に取り組んでいる。発表会は十一月に小中合同のマロンドリーム発表会で行っている。

(英語教育)

地域英語教室の先生を講師として〇歳から一五歳までの英語教育を実施している。こども園は、リトミック教育と英語を活用した遊びを特色ある教育活動としており、その流れを小中にもつなげ、一五年間の特色ある教育活動を展開している。

(八) その他

(学校評価の統一)

令和二年度より小中の学校評価項目を統一し、児童生徒に関してはステージごとに分かりやすい文言に変換しながら、九か年の経年変化を見取ることができるようとした。また、保護者・学校運営協議会(栗沢CS)・地域学校協働本部(マロンドリーム)の方々にも同じく実施し、学校・子供・保護者・地域が一体となった評価活動を実現することができている。

(教科担任制&乗り入れ授業)

コロナの影響により実施回数には少なかったが、小中教員相互による道徳の乗り入れ授業を実施している。また、令和三年度において



小中合同総合的な学習発表会



ては、中学校教員に兼務発令をして、小学校六年生の算数を週五時間、及び小学校五・六年生に外国語週四時間の教科担任制による授業を実施した。中学校教員は、小学校段階の数学的な力を見取ることができ、一貫指導の中での重要性を感じている。令和四年度は、中学校教員による小学校五・六年生（算数週一〇時間、外国語週四時間）と、小学校教員による中学校の家庭科を教科担任制として実施している。

Ⅳ 成果と課題

（一）成果

今後、義務教育段階においては、教育目標を達成させるために九か年を見通した教育課程の編成が強く求められることになる。そのような中、栗沢中学校区においては、市の適正配置計画の方針の下、小中一貫教育から義務教育学校開校へのロードマップが示され、ひと足先に改革が進みつつある。

誰もが経験していない義務教育学校への道のりは険しいものとなることが予想されるが、教職員にとっては多忙感を抱きながらも何かワクワク感をもって取り組んでいるように見える。限られた時間の中、スクラップ＆ビルドの思考で即座に決断し、実行に移すスピード感も広がってきている。仕事の効率化が図られ、以前よりも職員の退勤時刻が早まってきていることも大きな成果の一つである。

この数年間の取組を通して、改めて校長のリーダーシップによる目標の明確化、それらを実現させる教頭及び主任クラスのマネジメントシップがカギを握ると感じている。

また、地域の中の学校として、存在感ある学び舎に必要とされる要素は何であるかを保護者・地域の方々と議論を繰り返しながらWin-Winの関係を保ち『教育が町を創る、教育が人を幸せにする』の理想の実現に取り組むことが大切であると考えている。

（二）課題

コロナ禍の影響を受け、文部科学省では学校教育施設設備の在り方についても審議している。普通教室一つ取っても、これからの学校教育に求められている教育環境として手狭であること、現在のスタイルは一斉授業を基本とした四〇人規模でのスペースであることなど、これからのGIGAスクール構想の観点から考えても課題があると指摘される。また、学校施設は、地域の中の学校としての存在感が求められる時代となることより、地域住民にとつて最も身近な学びの場となる機能も求められるようになると言われている。それらの課題を解決しながら、行政・学校・地域住民が一つとなり誰からも喜ばれる開かれた学校を構築していくことが今後の課題であり責任であると考えている。

V おわりに

岩見沢市は、令和四年度に全中学校区コミュニティ・エリア構想を開始、令和五年度に栗沢・北村地区での小中一貫教育先行実施、令和六年度に全中学校区で小中一貫教育開始、そして令和七年度に栗沢地区義務教育学校を開校予定である。

同一市内であつても地区ごとに子供の数や歴史・文化は様々である。各校区との情報交流を行いながら、豊かな心や健やかな体を育む、教育・文化・芸術・スポーツのまちづくりに向け、心のこもった教育を推進していくことが大切であると考えている。

学校と地域の連携・協働による

「チーム学校」の実現

地域の特徴を強みに変える

「チーム学校」の取組を通して

壮瞥町・壮瞥中 松岡 賢 晃

I はじめに

平成二十七年に中央教育審議会の答申で示された「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」によると、「『チームとしての学校』の体制を整備することによって、教職員一人一人が、自らの専門性を発揮するとともに、専門スタッフ等の参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補い、子供たちの教育活動を充実していくことが期待できる」とされている。

また、令和三年の「令和の日本型学校教育の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）」では、「学校内、あるいは学校外との関係で、『連携と分担』による学校マネジメントを実現することが重要である」と示された。さらに「子供たちの教育は、学校・家庭・地域がそれぞれの役割と責任を果たすとともに、相互に連携・協働してこそ効果が上がるものであり、地域全体で子供たちの成長を支えていく環境を整えていく必要がある」とされている。

本校が所在する壮瞥町は、町内に小学校・中学校各一校のみで、一学年二〇人弱の小規模校であることから、学校外との連携が学校運営上、必要不可欠である。家庭や地域はもとより、専門スタッフや異校種間の連携・協働を図り、地域全体で教育活動を進めることが、本町の子供にとってより良い学びの場を提供することになると考える。それらの実践について以下のとおり報告したい。

II 地域・学校の状況

壮瞥町は、北海道の南西部、支笏洞爺国立公園内に位置する人口二、四〇〇人弱の農業と観光を基幹産業とする町である。有珠山や特別天然記念物に指定されている昭和新山が町のシンボルとなっており、豊富な温泉や果樹園などに年間二〇〇万人の観光客が訪れている。

町には、古くから子供たちの教育を大切にしてきた伝統があり、その基盤を生かし、平成二十七年四月に町内全ての小・中学校でコミュニティ・スクールを導入している（当時は小学校二校、中学校二校）。また、家庭や地域と連携して、地域の教育力を子供の成長に生かし、郷土愛を育む「ふるさと教育」の推進にも力を入れてきた。特に、有珠山という活火山と共生する地域柄、地域の特性を学び、伝える場として、多様な地域住民や専門家の支援を得ながら防災教育にも力を入れて取り組んでいる。

本校は、全校生徒数五三人、三学級の小規模校である。町内には小学校一校、中学校一校のみで、子供たちは九年間ほぼ同じ顔ぶれで学校生活を送っている。また、こうした事情も踏まえ、令和三年度より小中一貫教育の取組がスタートし、「そうべつ型小中一貫教育」という名の下、小学校と中学校が連携・協力して九年間の「学びをつなぎ、指導をそろえ、主体的にかかわる」教育活動を展開している。小規模校の特性を生かし、各校の職員がそれぞれの専門性を発揮し学校の垣根を越えた取組が進められ、単独校ではあるものの、両校の職員が同じ研究主題の下で研究を進め、公開授業・公開研究会を実施するなどしながら、「そうべつ型小中一貫教育」に取り組んでいる。



（洞爺湖と昭和新山）

Ⅲ 実践の概要

本研究は、どのようにして「チームとしての学校」の体制を構築するかという取組について実践したものである。様々な専門スタッフが子供たちに学びの場を提供し、地域全体で教育活動を進めていくことが重要であることは言うまでもない。しかし、本町のような小さな町、小さな学校では、限られた人材で教育活動を展開しなくてはならず、専門スタッフ等の参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補い、子供たちの教育活動を充実していくことは容易ではない。そこで、地域の特色を生かした、「チーム学校」の取組として、「地域との連携・協働を図る学校運営協議会の取組」と「多様な地域住民や専門家の支援を得ながら実施した防災教育の取組」、そして「学びをつなぎ、指導をそろえ、主体的にかかわるそうべつ型小中一貫教育の取組」を進めてきた。答申にある「チームとしての学校」の体制には程遠いかもしれないが、地域の特色を生かし、地域で子供たちを育むという実践である。

Ⅳ 取組の実際

1 壮瞥町学校運営協議会を活用した取組

壮瞥町の学校運営協議会は、平成二十七年三月に導入され、同年四月からコミュニティ・スクールとして活動が始まった。現在、小中の学校運営協議会として、同じ委員構成で合同会議を実施している。

壮瞥町の学校運営協議会では、学校運営の基本方針の承認や学校運営・教育活動に対する意見、教職員の任用に関する意見の他に学校運営に対する評価も行うこととなっている。これは、学校運営の質を効果的に高めるとともに、信頼される開かれた学校づくりを進めるための取組である。学校運営協議会で承認



（そうべつ保育所との連携授業）

した学校運営の基本方針がどのようにに取り組みられ、どんな成果や課題があるのかを評価、検証するものである。

また、壮瞥町コミュニティ・スクールの取組は、学校運営の質を高める学校運営協議会と教育活動の幅を広げ支える地域学校協働本部が両輪となり、学校運営協議会で議論された内容が、地域学校協働本部の支援を受け、地域と学校が連携・協働して教育活動を展開するという流れが構築されている。これは、小学校に配置された地域コーディネーターの役割が大きい。地域コーディネーターが、地域住民と学校、そして学校運営協議会と地域学校協働本部をしっかりと結び付ける働きをしている。このことにより、学校運営協議会で評価された内容が、検証・改善され、地域学校協働本部という地域の人材の活用と地域との「連携と分担」がなされている。例えば、異校種間連携の必要性についての指摘を受け、PTAや地域の団体、サークル、ボランティアの協力をいただきながら、町内にある保育所との交流授業や農業科を有する高等学校との農業体験などの教育活動を進めている。これも学校運営協議会で地域と学校との目標の共有化が熟議されている成果と考える。

2 地域の特色を生かした人材活用の取組

前項でも述べたが、壮瞥町は郷土愛を育む「ふるさと教育」に力を入れている町である。このことは、社会教育においても古くから取り組まれている。「ふるさと教育」では、地域の特色を生かし、地域の専門知識を有する人材の協力を得て教育活動を進めている。地元の企業や農家の方々に専門スタッフとして、子供たちの教育活動に多くの協力を得ている。特に、おおよそ三〇年周期で噴火すると言われている有珠山と共生する町としては、防災を意識した教育は必要不可欠である。町が抱える地域課題を学校教育においても「ふるさと教育」として取り組むことについては、地域とともにある学校づくりを進めていく上でも必要である。本校における有珠山の噴火を想定した防災教育は、学校単独

の取組ではなく、町の防災係や警察、消防等の関係機関はもとより、有珠火山地域の自然や特性について、詳しい知識を有する専門家と連携して実施している。学校職員のみとの取組とせず、専門スタッフの参画を得て実施することで、災害に対する正しい知識を学ぶことができ、災害時に的確に判断し、主体的に行動できる子供の育成につながると考える。こうした地域人材の協力を得て行う「ふるさと教育」は、子供たちの教育活動の充実につながっている。

防災教育は、継続して取り組むことが重要であり、地域のことをよく知っている地域住民、そして、災害に対する正しい知識をもつ専門スタッフの協力が必要である。有珠山の噴火を想定した防災教育は地域の課題であり要請でもあることから、地域や専門スタッフからの「協力」を得て行うのではなく、「連携・協働」を図り、実施していくことが重要と考え、取り組んでいる。



〈有珠山の噴火を想定した避難の様子〉

3 そうべつ型小中一貫教育による取組

壮瞥町では、令和元年より、壮瞥小学校と壮瞥中学校の小中一貫教育に向けての検討を始め、令和三年から小中一貫教育の取組を開始した。小中一貫教育の取組を進めるにあたり、両校の教職員で構成される「壮瞥町教育研究会」において取組の方向性をはじめ、取組の具体、望ましい在り方と実践に向けて研究を進めてきた。その中で、「ふるさと教育」と「国際理解教育」について小中九年間の学びの構築に向けて研究を深めた。そこでは、「学びをつなぐ」「指導をそろえる」「主体的にかかわる」という三つのキーワードにより九年間を見通した連続性や持続性のある学

びを実現するための全体計画の策定と壮瞥の子供たちの一五歳の姿を共有した教育活動の推進を目指した。

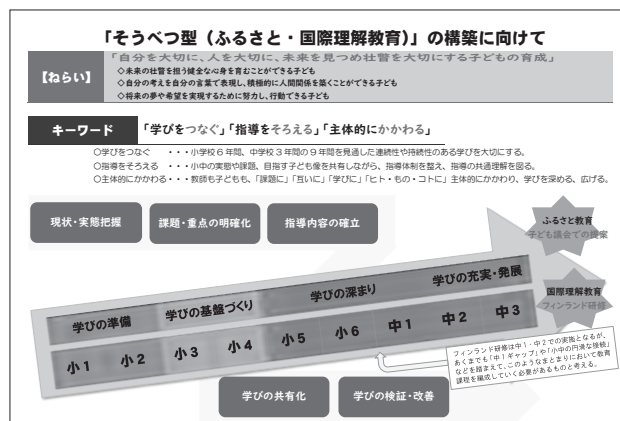
校種の違う両校の教職員が学校の枠を超え、目指すべきゴールを共有することで、ゴールに向けてそれぞれが担当する子供たちに「学びをつなぐ」「指導をそろえる」「主体的にかかわる」という統一した学びが実施された。こうした取組を進めることで「チーム学校」から「チームそうべつ」として取組を進めることができた。

また、国際理解教育においては、令和二年度から全面实施された小学校の新学期指導要領で教科としての外国語及び外国語活動が導入されたことにより、中学校の英語の教員が小学校に乗り入れ指導を行っている。

さらに、保健体育の教員が小学校の冬のスキー授業の指導を行う等、専門性を有する教員が校種を超えて子供たちの指導を行う取組が行われている。目標や目指すゴールが共有されている教員同士が校種を超えて子供たちを指導し合うことは、子供たちにとって、より良い学びの場が提供されることになる。

【壮瞥町における異校種連携の取組】

- ・ 小学校における外国語及び外国語活動
- ・ 小学校における農業体験
- ・ 小学校におけるスキー学習
- ・ 中学校における家庭科の授業



〈小中9年間の学びの構築〉

V 成果と課題

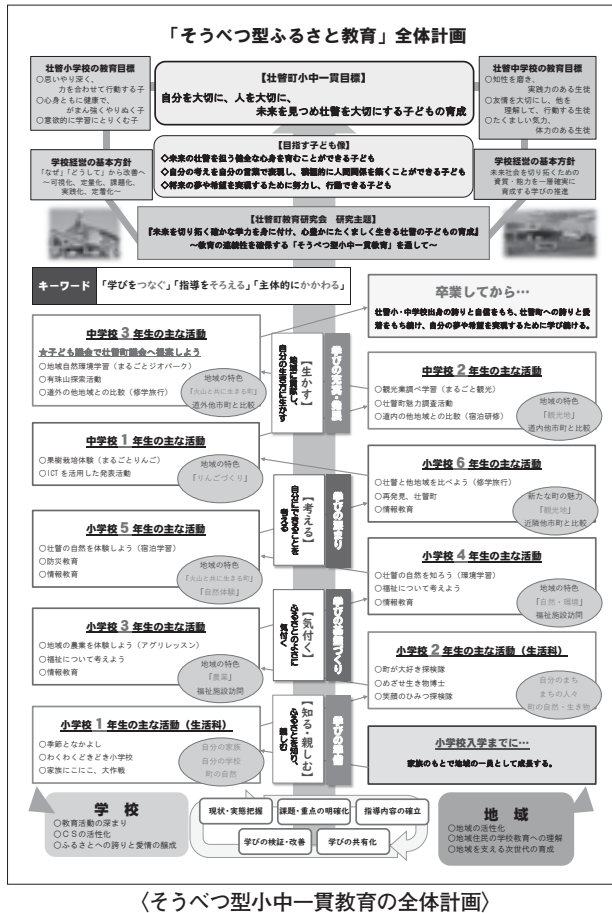
1 これまでの取組の成果

(一) 学校運営協議会を活用した取組

学校経営に係る課題を学校運営協議会の委員と共有し、取組を共にに行い、そして評価を行うことで、課題に対する検証、改善策に当事者意識をもった意見が得られるようになった。また、課題に対応するため、学校運営協議会の働き掛けにより、学校を支援する地域学校協働本部との連携・協働がより図られるようになった。

(二) 地域の特色を生かした人材活用の取組

地域の課題や要請に対応した取組を進める際に専門的な知識を有する地域人材を活用することで、学校も地域も「地域とともにある学校」への意識付けにつながった。また、学校の自前主義からの脱却を進めるきっかけとなった。



(三) そうべつ型小中一貫教育の取組

小中各一校の地域性を生かした取組から、小中連携が深まり、連

続性、持続性のある教育活動を展開できた。また、全ての教職員が壮瞥町の子供たちの一五歳の姿を共有することができ、小学校、中学校の教職員が校種を超えて教育活動を展開することができた。このことから、小規模の小学校における教科担任制の実施に向けた効果的で実質的な方策として検討することができた。

2 これまでの取組の課題

コロナ禍の影響で書面開催会議を余儀なくされたり、打ち合わせの時間が十分に確保できなかったりと、学校外のスタッフと目標・目的の共有や連携が十分に図られなかった。このことから、日頃からの情報発信や意図的な情報共有を進める必要がある。

また、小中一貫教育による「チーム学校」の取組では、校長間の連携は密に図ることができたが、実際に指導に当たる教員同士の連携を更に深める必要がある。

VI おわりに

壮瞥町や本校のような小規模な地域・学校において、限られた人材や予算の中で「チーム学校」を実現し、子供たちにとってより良い学びを提供することは容易なことではない。しかし、子供たちに良質な教育活動を提供するためには、教職員一人一人が自らの専門性を発揮するとともに、専門知識・能力のあるスタッフ等の参画を得る必要がある。本実践においては、既にある仕組みや組織に目を向け、必要なことと今あるものを結び付け、連携させながら取組を進めた。課題解決に求められる専門性や経験を補うために学校内外での連携と分担による学校運営を進めていく上で重要なことは、目標・目的の共有化を図ることである。目標・目的の共有化を図ることができれば、当事者意識が芽生え、子供を中心に多種多様な人材が集まる。初めは、「協力、手伝い」の関わりから始まり、その中で当事者意識が醸成されることで、「連携・協働」の関わりとなる。そのために、校長として、子供と関わる全ての職員、スタッフ等と目標・目的の共有化を図り、地域とともにある学校の推進に努めたい。

令和四年度の活動及び次年度への展望

事務局長 笹川 恒春

一 はじめに

激動する国際社会において、我が国では、二十一世紀にふさわしい、持続可能な社会の仕組みを構築するため、行財政改革、規制緩和、地方分権などの動きが進行している。

教育界でも、様々な教育改革が行われ、学習指導要領の改訂をはじめ、GIGAスクール構想や、新しい時代の学校教育である「令和の日本型学校教育」の構築が求められている。また、今年度は「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会をはじめとする様々な答申やスポーツ庁・文化庁による学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドラインの策定等、今後も様々な対応や取組が求められている。

そのため、私たち中学校長は、学校教育の課題を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、子供たちの「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を形成する力」を育む教育とともに、生徒・保護者・地域の信頼と期待に応えるた

め、Society・0時代の到来を見据えた人材育成や多様性を重視した教育など、新しい時代に求められる学校づくりに向け、リーダシップを発揮して、学校からの教育改革を推進しなくてはならない。併せて、本来、学校が担うべき業務の明確化・適正化をはじめ、学校の組織運営体制の見直し、教職員の意識改革等により、「学校における働き方改革」の推進も図る必要がある。また、東日本大震災の風化防止に努めるとともに、北海道胆振東部地震をはじめ、近年、災害等が多発していることから、今後起こりうる災害に対し、能動的に対応できる生徒を育成するため、防災教育・安全教育の更なる充実を図る必要がある。加えて、新型コロナウイルス感染症の影響が長期化することが見込まれる中、教育活動を継続していくために必要な感染症対策と、生徒の健やかな学びの保障を両立させなくてはならない。

以上の認識に立ち、令和四年度の北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性を

もち、会員相互の連携のもと「全日中新教育ビジョン 学校からの教育改革」を踏まえながら、道民の負託に応え、全道の中学校が抱える教育課題の解決に向けて取り組んできた。

二 活動の経過

1 各種要請及び要望活動

道教委に対し、以下の意見交換や要望活動を行った。

- ・「令和四年度北海道文教施策・予算策定に関する要望書」の手交（五月十二日）
- ・次期教育基本計画策定に向けて
- ・公立高等学校入学者選抜改善について
- ・公立学校教員採用について
- ・学校部活動の地域移行に向けて
- ・全中大会引率規定緩和に向けて
- ・北海道いじめ防止基本方針等の改訂等について

2 道教委との情報交換会・各課懇談会

前述の「要望書」に対する道教委からの回

答をもとに、八月五日、北海道第二水産ビルにおいて意見交換会（昨年度より文教施策懇談会を名称変更）が三年ぶりの会場で開催された。「ICTを活用した学校の教育活動の推進について」というテーマで、道教委からは倉本教育長を始め、教育部長、学校教育監、道立教育研究所長、総務政策局長、ICT教育推進局長、指導担当局長、教育指導監と、運営者として関係課長の計一四人が出席。道小・道中・道公教からはそれぞれの役員計三九人が出席した。続いて各課懇談会が、会場をホテルライフオート札幌へ移し、これも三年ぶりの会場で開催した。道教委からは関係課の課長補佐一五人、道小・道中・道公教からは会長、副会長、地区理事、事務局員等、計六三人が出席し、三つの分科会に分かれて、各地区からの提言や道教委担当課からの具体的な説明を聞くことができた。

これらについては「道小情報・道中だより号外」で全会員に報告した。各教育局に対する要望活動の際に資料として活用していただきたい。

3 第七三回全日本中学校長会研究協議会

北海道（札幌）大会の開催

十月十九（二十一日）、ホテルライフオート札幌をホスト会場として、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を大会研究主題に、「イランカラプテ 北の大地から 新たな学びを紡ぎ その先へ」を大会スローガンに、第七三回全日本中学校長会研究協議会北

海道（札幌）大会を、九〇〇人の参加者を迎え、オンライン形式で開催した。

二十日の開会式では、大会会長である全日本平井邦明会長より「今大会の成果が今後の学校経営に確実に結びつくとともに、我が国の中学校教育の更なる発展と充実に繋がるものと信じている。『高いところぞし』をもち、『共に』を合言葉に全国の会員と取組を進めていきましょう」とのご挨拶をいただき、大会実行委員長の道中野崎 均会長が、今大会を一枚の織物に例え「実行委と運営委が経糸となり、参加者が緯糸となつて、互いに紡ぎあげた織物を『その先』である大分大会へ確実に繋いでいけるよう全力で運営してまいります」と述べた。御来賓からは、文科大臣、北海道知事、札幌市長、道教育長、札幌市教育長より御祝辞を頂戴した。

開会式の後、文部科学省大臣官房審議官の安孫子広斉氏より文科省説明をいただき、全体協議会と分科会が行われた。分科会は八分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿って熱のこもった研究協議が展開された。

各分科会の研究題と、第八分科会での北海道の提案・司会者は次のとおり。

【第1分科会】（近畿地区）
「カリキュラム・マネジメント」の推進

【第2分科会】（九州地区）
「主体的・対話的で深い学び」の実現

【第3分科会】（四国地区）
よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実

【第4分科会】（東海北陸地区）
健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実

【第5分科会】（東北地区）
社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

【第6分科会】（関東甲信越地区）
自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

【第7分科会】（中国地区）
多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

【第8分科会】（北海道地区）
学校と地域との連携・協働による「チーム学校」の実現

《提案①》岩見沢市立栗沢中学校
伊藤 聡 校長

《司会①》岩見沢市立清園中学校
桐淵 則行 校長

《提案②》壮瞥町立壮瞥中学校
松岡 賢晃 校長

《司会①》室蘭市立翔陽中学校
高見 恭介 校長

大会最終目（二十一日）は、アイヌ・アイト・プロジェクトによるアトラクション上映があり、その後の全体会では大会宣言・決議が採択された。また、信州大学特任教授の山口真由氏による「日本に突き付けられた新たな規範」ポリティカル・コレクトネス」と題した記念講演も行われ、参加者に多くの示

唆が与えられた。

最後の閉会式では、三年前、たった二人でスタートした大会準備委員の一人であった大会運営委員長の札幌市中学校校長会 富川浩会長から、今年を含めたこの四年間を振り返る挨拶があり、閉会の言葉では、もう一人の準備委員だった大会運営事務局次長の遠山博雅校長が大会を終えた「今」の思いを述べて大会の幕を閉じた。その瞬間、画面の上には多くの拍手のマークやグッドサインが飛び交い、今までの苦勞が報われたと実感するとともに、参加者への感謝の思いを深く感じた瞬間であった。今大会が、全国の校長の今後の学校経営に大きく資するものとなることを願い、何より、札幌市中学校長会を中心に「オール北海道」で取り組めたことが、私たちの結束を強め、資質向上につながる大きな成果をあげた研究大会であった。まさしく、今年度の道中スローガン「連携・協働」が体現された瞬間であった。

大会後の反省アンケートを見ると、大会運営について高評価が示されていた。寄せられた反省・意見を分析・検討し、次年度の大分大会が更に充実することと、次年度の道中研小樽大会の成功に繋げていきたい。反省の詳細は全日中機関紙「中学校」令和五年一月号の特集として掲載されている。

これまで、札幌市中学校長会の富川会長を中心に、誠心誠意御準備いただいた札幌市中学校長会の皆様に心から感謝申し上げます。

4 地区別教育経営研究会・法制研修会

毎年、校長会会員の職能向上を目的に各地区単位で開催されている地区別教育経営研究会・法制研修会は、今年度は七月二十七日の宗谷地区を皮切りに、十二月七日の札幌市（中）地区まで順次開催された。今年度は、「通常開催」が三地区、オンラインまたはハイブリッドでの開催が六地区、「書面開催」はなかった。

研修会には、道小・道中事務局より役員や幹事を派遣し、各地区からの質問に直接回答するほか、教育局や市町村教育委員会から講師を招いての研修を行った。その他にも、会員の実践発表や校種別・課題別分科会での研究協議を取り入れるなど、年々内容の充実が図られている。また、多くの地区が小・中学校の合同で開催されるため、小中交流や情報交換の場としても大きな役割を果たしている。今後より一層充実した会になるよう各地区校長会の取組をお願いしたい。

5 道中組織と運営

「オール北海道」での組織体制も五年目を迎え、今年度は、登別市立緑陽中学校の野崎均校長が総会にて会長に承認された。五役には、事務局長は札幌、事務局次長は札幌・旭川、会計理事は小樽から選出され、「連携・協働」を合言葉に活動を推進した。また、四部の活動は、石狩、後志、札幌、空知、胆振の各地区が担当した。また、令和五年度に開催する北海道中学校長会研究大会小樽大会に向けて、小樽市中学校長会との連携を密に

準備を進めている。

三 本年の反省と次年度の展望

令和四年度の業務推進にあたっては、「連携・協働し、新たな時代を担う」というスローガンの下、多くの成果を上げることができた。特に道教委とは、様々な交渉はもとより、意見交換会・各課懇談会を新たな形で取り組むことができた。また、全日中研究協議会北海道（札幌）大会においても、文字通り「全国と北海道と札幌が一体」となって連携・協働し、多くの参加者に満足していただけた大会を開催できた。さらに、地区と事務局との間においても、日頃からできるだけ細やかな情報発信と情報共有に努め、地教研でも直に対話を行って絆を深めることができ、道小との関係においても、様々な情報や意見の交換を行うなど、随所で「連携・協働」を意識した活動となった。しかし、まだまだ改善を要することや、様々な教育課題への対応も進めていかなければならず、今後も皆で知恵を出し合い、より強くてしなやかな連携・協働を進め、これらの成果や課題、そしてそこに込められた思いや願いを、次年度のすべでの取組に繋げていきたい。

学校経営に法的根拠を据えた 教育活動の充実に努める

経営部

一 活動の方針

本会の運営方針・活動の重点を受け、学校経営に法的根拠を据え、教育活動の充実に努める。

- 1 教育制度、関係諸法規の情報収集と情報の提供、資料化に努める。
- 2 学校経営上の諸問題や管理運営に関する法制研究を行い、その解決に資する。
- 3 諸会議等を通じ、会員相互・地区との情報交換を図り、組織の連携・充実・発展に努める。

二 業務内容と進捗状況

1 諸会議の開催

(1) 経営部研修会

① 第一回経営部研修会

・四月二十八日(木) 方針、業務推進計画の検討

② 第二回経営部研修会

・二月十日(金) 年度反省、次年度への課題・展望とまとめ

(2) 道小・道中合同学習会

・七月十五日(金) 質問・要望に対する学習会

する学習会 道小と連携

2 法制研修会・地区別教育経営研究会の開催 (今年度道小担当)

コロナウイルスの影響により一部リモート開催の地区はあったが、七月二十七日の宗谷地区を皮切りに、全一九地区で計画通り実施

3 学校経営の資料の編集(今年度道小担当)

4 法制研究集録第五三集の編集発行(今年度道小担当) 二月にHPに掲載

三 今年度の反省と次年度への展望

1 法制研修会・地区別教育経営研究会

・新型コロナウイルス感染症への対策や対応を取りながら、六地区で開催方法が一部リモートもしくはハイブリッド開催に変更となったものの、昨年に続き全ての地区において方法が変わっても中止することなく、開催する方向で準備を頂いた。その甲斐あって、どの地区も限られた時間の中で内容等を工夫し、充実した研修を行い、成果を残した。

・会同開催(十三地区)

・リモート・オンライン開催(六地区)
宗谷、上川、釧路・釧路市、胆振、空知、札幌小)

・「道小・道中の活動、役割や組織について」「教育情勢について」は道小中役員が説明した。

・地区から上げられた質問の中に、道小道中の経営に関わるものや、組織について

の質問があった。幹事ではなく役員派遣者より説明を行うことで、派遣の役割分担が明確になり、地区参加者への十分な回答となった。

・オンライン開催となった地区では、音声や画面共有、ネット環境弱等の想定外なこともあったが、地区担当者や臨機応変に対応しながら、進行できた。

・地区からの「質問事項」には、個人的な内容のものがある。地区の実情も十分理解はできるが、各幹事の回答に要する業務を鑑み、事前に地区の経営部内や役員会など、組織内で精査することをお願いする。

2 学校経営の資料の編集

・道小が主たる編集を担当し、七月初旬全道各地区校長会に配布を終えた。

3 法制研究集録第五三集の編集発行

・道中が主たる編集を担当し、二月下旬にHP上に掲載した。

本年度の経営部の活動では、皆様の御理解と御協力により多くの成果を収めることができた。特に地区別経営研では、コロナ禍において開催方法が変われども一九地区の全てにおいて実施できたことは、大きな成果といえる。各地区の校長会の御尽力に心より感謝申し上げる。

(江別市・江別第三中 畠山 学)

「新たな時代を切り拓き
よりよい社会を創り出していく
日本人を育てる中学校教育」
を目指して

研修部

基本主題『新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』のもと、全日中研北海道（札幌）大会において研究交流を深めるとともに、各地区における研究を基盤とした研究活動の充実に努め、校長としての識見や指導力の向上を図る取組を推進した。

一 活動の方針

- 1 第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るために、開催地区である札幌市中学校長会との連携を密にする。
- 2 令和四年度の研究を総括し、令和五年度「研究の手引き」の作成作業を行う。
- 3 教育課程に関する情報収集に努め、中学校教育における今日的課題を明らかにし、問題点の解明に寄与する。

二 業務の推進

- 1 諸会議の開催
 - (1) 第一回研修部研修会 四月二十八日
・ 研究方針、業務推進計画及び業務

推進について

- ・ 第七三回全日中研北海道（札幌）大会について
- ・ 令和五年度「研究の手引き」の作成について
- ・ 教育課程に関する調査について（令和五年度の調査実施に向けた調査内容・項目の検討に向けて）
- ・ 各地区研究推進状況及び令和四年度の研究計画について
- (2) 道中研合同研修会 七月十四日（WEB開催）
- (3) 道小道中合同研修会 七月十五日
- (4) 第二回研修部研修会 二月十日
- ・ 年度末反省、次年度への課題の検討と展望・まとめについて
- ・ 令和五年度以降の研究推進について
- ・ 令和五年度第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会（九月二十二、二十三日）について
- ・ 令和五年度「研究の手引き」について
- ・ 教育課程に関する調査について（令和五年度調査に向けた調査内容・項目について）
- 2 研究活動の推進
 - (1) 第七三回全日中研北海道（札幌）大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るため、当該実行委員会との連絡・情報交流を積極的に行う。また、全日中研分科会提言に向けて、研修部として担当地区や発表者へのサポートを早めに行っていく。

三 今年度の反省と次年度に向けて

- 1 全日中研北海道（札幌）大会については、オンライン開催になったが、提案提言者と分科会司会者と連携して、提案原稿や発表資料の校正やリハーサルまで十分にサポートすることができた。
- 2 教育課程に関する調査については、調査方法を変更することや、調査内容を各地区の研修担当者にも協力していただき、十分に検討し精選することができた。
- 3 令和五年度の「研究の手引き」については、令和五年度からの北海道教育推進計画を基に、部分的に内容を改訂することや、道中研の「開催要項」と「第一次案内」の作成基準を掲載することができた。また、文章表記についても、全日中の文章表記に合わせて一部修正した。
- 4 学校経営の指針として示された「全日中新教育ビジョン」学校からの教育改革（令和二年五月策定）の各地区での活用をよりよくお願いしたい。

（札幌市・中央中 秀島 起也）

学校経営の向上を目指した 調査研究活動の推進

対策部

令和四年度、対策部では本会の運営方針と活動の重点を受け、業務を推進してきた。

今年度は調査研究報告書の発行が主な業務であり、「学びの保障及びGIGAスクール構想の取組と現状等に関する調査報告書」を作成配布した。各地区理事並びに地区対策担当者の皆様の御協力により、計画した業務を遂行することができた。

一 活動の方針

本会の運営方針及び活動の重点を受け、学校運営上の諸問題について調査研究を推進し、学校経営の向上に役立てる。また、会員の職責に見合う待遇改善に向けて業務を推進する。

- 1 生徒指導等に関する情報収集や調査研究から情報提供に努める。
- 2 会員の身分確立や福利厚生、給与等の待遇改善に関する課題解決に向け、関係機関との連携強化に努める。
- 3 その他、緊急性のある課題や各種調査、情報に関することへの対応に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

(1) 対策部研修会

- ・四月二十八日(木)活動方針、業務計画の検討
- ・二月十日(金)業務反省、次年度の展望とまとめ

(2) 小中合同事務局研修会・学習会

- ・七月十五日(金)道小との連絡・調整、情報交換

2 各種調査の推進

(1) 調査報告書の発行

- ・五月二日(月)地区対策担当者に調査依頼及びデータの送信
- ・五月三十一日(火)各地区における調査の完了
- ・六月十七日(金)各地区における調査結果を対策部に報告
- ・七月二十九日(金)地区対策担当による地区レポート完成、送付
- ・八月二十六日(金)調査報告書原稿を印刷会社へ送付
- ・九月二十日(火)完成
- ・九月三十日(金)発送

(2) 全日中諸調査への協力

- ・調査研究協力校として学校規模に応じて全道一八校に依頼

①生徒指導部調査(十月)

- ・調査一 健全育成の推進・充実のための研究、当面する生徒指導上の課題への対応に関する調査
- ・調査二 特別支援教育推進上の

課題への対応に関する調査

- ・調査三 部活動のあり方の検討に関する調査

- ・調査四 防災教育・安全教育推進と充実のための研究に関する調査

②教育研究部調査(十月)

- ・調査一 教育課程の編成・実施「主体的・対話的で深い学び」及び「学習評価」に関する調査

- ・調査二 新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた学校教育活動に関する調査

③給与対策部調査(十一月十六日)

- ・調査一 人事院勧告の概要
- ・調査二 校長会の給与等に関する令和五年度予算要望の概要

三 活動の反省と次年度に向けて

業務推進にあたり、各地区対策担当者や道中の対策部担当者の皆様には、特段の御理解と御協力をいただいた。深く感謝申し上げます。

GIGAスクール構想は加速度的に進展しており、今後も各地区による情報交換が欠かせないものと考えます。

次年度は報告書の発行は行わないことから、令和六年度の調査に向けた準備を進める。

(岩見沢市・栗沢中 伊藤 聡)

情報交流の充実を目指して

情報部

情報部は、今年度も全国・全道の教育情勢を各地区に提供するとともに、各地区からの情報交流の充実を目指して業務推進にあたった。特に、本会の活動状況や教育関連情報については、会報「道中だより」、会誌「全道中」、そして道中ホームページによって随時お知らせしてきた。

情報部が提供する教育情報が、各地区校長会の取組に一層の充実が図られていること、また、会員諸氏の職能向上に貢献しているものと確信する。さらに、何かと御多用のところ原稿執筆に御協力いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

一 活動方針

本会の運営方針と活動の重点を受けて、広報活動のより効果的な業務推進を図り、会員意識の高揚並びに組織活動の強化に努める。

1 広く、本会活動の状況や関係機関の情報、各種資料等を提供する。

2 各地区の活動や会員の研究成果、論説等の交流を図るとともに、各界から教育に寄せられる意見も掲載し、会員の職能

向上に努める。

3 教育関係機関・団体との情報・資料の交流並びに相互の連携・協調を図り、教育世論の喚起に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

(1) 情報部研修会

第一回 令和四年四月二十八日

本年度の活動方針、業務推進計画の検討・協議

第二回 令和五年二月十日

本年度の業務報告 来年度への展望

(2) 編集会議(随時)

2 機関誌等の編集・発行

(1) 道中総会・研修会要項の編集、発行

令和四年度「第九五回総会・研修会要項」の発行 四月二十八日

令和五年度「第九六回総会・研修会要項」の編集(令和五年四月発行)

(2) 会報「道中だより」の発行

第三七八号 六月九日発行

第三七九号 七月十三日発行

第三八〇号 十二月一日発行

第三八一号 一月十九日発行

(3) 号外「道小情報・道中だより」の発行(今年度は、道中担当)

十月七日 北海道文教政策・予算策定に関する要望に対する回答

十二月二日 道教委との意見交換会

・各課懇談会

(4) 「全道中」第九二号の編集・発行

① 潮流

② 論考

③ 特集

④ 今年の道中 各部門・地区の活動

⑤ 北海道風土記

⑥ 文芸

⑦ 資料等

3 北海道中学校長会公式ホームページの更新及び内容の充実

本会活動の状況や各地区発行機関誌、会誌等の交流、関係機関の情報、各種資料等の提供の場としての運用とタイ

ムリーな更新に務めた。
特に今年度は全日中研究協議会北海道(札幌)大会の様子をスピード感をもって発信した。

4 全日中機関誌「中学校」の編集協力・原稿依頼

今年度は四本の割当があり、北海道各地の実践について寄稿を行った。

三 活動の反省と次年度に向けて

全道各地区の御協力をいただいて業務推進にあたることのできた。関係各位の御理解御協力に深く感謝申し上げます。

次年度もタイムリーな内容となるよう刊行物の発行、及び、ホームページの掲載に力を尽くしたい。

(洞爺湖町・虻田中 瀧澤 義守)

石狩



エスコンフィールド
HOKKAIDO
2023. 3. 30 開業予定
(北広島市)

石狩地区は管内七市町村の小中学校長九八人(小六一、中三五、義務教育学校二)で組織している。管内校長会の重点課題として、①人材育成②「働き方」改革③新型コロナウイルス感染症対策により生じた課題を解決する教育活動の工夫改善、を取り上げ、石狩管内校長会全員が一体となって取組を進めている。これまで培われた伝統を土台に、職能の向上と管内教育の充実に努めている。

一 活動方針

- 1 信頼される学校経営のもと、管内教育の安定と充実・発展に努める。
- 2 職能向上をめざす研修活動の推進と教職員の資質向上に努める。
- 3 管内における教育諸課題を把握しその解決に努める。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善や福利厚生への増進に努める。
- 5 組織の強化と実態に即した会務の推進

に努める。

- 6 会員相互の交流活動の推進に努める。
- 7 ポストコロナ社会での子供の学びを保障した教育活動の創造に努める。

二 各部の活動

- 1 研修部

研究協議題「社会の変化を柔軟に受け止め、子供たちの確かな『生きる力』を育む学校経営の推進」について研究を推進。

 - (1) 管内校長会研究会の企画と運営
 - ① 春季学校経営研究会(四月)

確かな「生きる力」を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方
 - ② 秋季学校経営研究会(十一月)

今日的な教育課題に対応した学校経営の在り方
 - (2) 全連小・全日中・道小・道中研究大会への参加
 - (3) ブロック別研修会の開催(九月)
 - ① Aブロック研修会(恵庭市)
 - ② Bブロック研修会(石狩市)
 - (4) 研究収録第三八集の発行
- 2 経営部
 - (1) 石狩地区教育経営研究会の開催(十月) 学校経営等に関わる諸問題等について研究協議
 - (2) 道小・道中経営部との連携と業務推進
 - (3) 対策部
 - (1) 道小・道中対策部との連携と業務推進

三 諸会議

- 1 定期総会(四月)
- 2 役員研修会(月一回) 当面する課題対応
- 3 幹事研修会(年九回) 市町村幹事、関係機関による協議・交流
- 4 市町村代表者等研修会(七月)

四 地区役員

- | | |
|-------|-----------------|
| 会 長 | 鹿野 秀一(江別・江別第一中) |
| 副 会 長 | 吉田 篤弘(石狩・花川南小) |
| 副 会 長 | 津谷 昌樹(恵庭・恵庭中) |
| 事務局 長 | 佐藤 直己(北広島・東部中) |
| 次 長 | 今村 敏之(恵庭・恵庭小) |
| 会 計 | 佐藤 誠(江別・中央中) |
| 監 査 | 野尻 一裕(千歳・北陽小) |
| 監 査 | 佐藤 辰彦(江別・江別第二小) |
| 監 査 | 加藤 紀子(江別・中央小) |

五 道中役員

- | | |
|-----|----------------|
| 理 事 | 畠山 学(江別・江別第三中) |
| 幹 事 | 小森 亨(北広島・西部中) |
| 幹 事 | 前田 真志(恵庭・柏陽中) |
- (江別市・中央中 佐藤 誠)

後 志



ニセコ連峰
チセヌプリから

後志小中学校校長会は、一九町村より小学校長三九人、中学校長二四人の計六三人で構成されている。(十月末現在)

当会では、学校教育に対する保護者や地域住民の期待に応えるため、会長の藪智樹校長のリーダーシップのもと『展望・信頼・つながる』を今年度のキーワードに据え、各関係機関と連携を図りながら後志の教育の推進と充実のために取り組んでいる。

一 運営方針

- 1 国や自治体における教育関連の動向を注視し、迅速な情報収集・情報共有に努める。
 - 2 地域や会員が抱える課題に向き合い、その解決に寄与する取組に努める。
 - 3 関係教育機関、関係団体との積極的な調整に努める。
- ### 二 活動方針
- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の充実に努める。

- 2 生きる力を育む「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善に努める。

- 3 児童生徒理解を深め、時代の変化に即した生徒指導や個々の教育的ニーズに応える特別支援教育の推進に努める。

- 4 会員の共同研究を推進し、研究成果の交流を図るとともに校長自らの研さんに努める。

- 5 教職員の一層の資質・能力の総合的な向上に努める。

- 6 教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。

- 7 教職員の処遇の改善に努める。

三 活動状況

- 1 経営部

- (1) 後志地区教育経営研究会の開催

- (2) 学校経営上の諸課題や管理運営上に関する法制資料の作成と研修会の実施

- (3) 各町村校長会の教育法令・制度に関する課題の集約と説明

- (4) 道小経営部・道中経営部との連携・協力

- 2 研修部

- (1) 後志小中学校校長会研究大会の開催

- (2) ブロック研究会の開催

- (3) 「研究の手引き」「研究紀要」等の発行

- (4) 全国、全道研究大会への積極的な協力

- (5) 小・中学校それぞれの全国、全道の研究の方向性の共有

- 3 対策部

- (1) 各種調査の実施と集約・還流

- (2) 教頭とミドルリーダーを各対象とした「スキルアップセミナー」等の開催他

- 4 情報部

- (1) 「会報後志」の発行

- (2) 「情報部だより」の発行

- (3) 道小・道中機関誌への寄稿

四 年間活動《諸会議》

- 1 総会 (四月)

- 2 理事研修会 (年六回)

- 3 事務局研修会 (年八回)

- 4 監査委員会 (年二回)

- 5 後志教育局との意見交換会(年二回)

- 6 教育長部会・校長会役員合同研修会

五 役員

会長 藪智樹(余市東中)

副会長 渡邊均(俱知安小)

副会長 前田敦子(寿都小)

副会長 五十嵐邦春(寿都中)

副会長 柴田真琴(岩内第一中)

事務局長 中田恭太郎(京極小)

事務局次長 中村和男(共和中)

事務局次長 丸岡哲也(真狩小)

会計 明村秀之(黒川小)

監査 齋藤直幸(赤井川中)

監査 荒木俊行(神恵内小)

(岩内町・第一中 柴田 真琴)

小樽市



賑わいを取り
戻しつつある
夜の小樽運河

小樽市中学校長会は、市の方針「知・徳・体のバランスのとれた人材の育成」に基づき、小樽の未来を託すことのできる人材育成を目指す教育推進のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実に成果をあげてきている。

これまで同様、横のつながり（繋がり）を大切にしつつ、次代へのつながりを前面に打ち出すために、「継続」を強く意図した「継なり」という表記を用い、「自立と継なり」を今年度の基本姿勢とした。自校や市内の課題解決に向け、横の連携を図りながら、一歩でも前進させ、次代につなげていく取組を行っている。

一 活動方針

- 1 市の教育ビジョンを基盤とした着実な取組
- 2 選択と集中による実践・検証
- 3 三つの部の充実
- ① 研究内容の充実 ② 学び合いの深化
- 3 自主自立の確立
- ① 校長としての使命を自覚した自立した学校経営

二 活動にあたっての教育ビジョン

- 1 学校運営組織の機能化
- ① 指導的立場としての教務主任の機能化
- 2 小中一貫教育
- ① 分掌内への小中一貫教育担当の位置付け
- ② 中学校区内での担当者会議・全教職員による部会の実施
- 3 人材育成
- ① 主幹会のバックアップと主幹間の定期的な交流
- ② 教頭・主幹・主任等の他校体験・見学と、長期的展望に立った小樽市の管理職候補の育成
- 4 業務改善
- ① 校内組織の機能化をベースにした業務の見直しと推進

三 各部の取組

- 1 研究部
- ① 小樽市中学校教育の充実・発展のため、校長としての職能の向上を図る。
- 2 組織・法制部
- ① 学校経営に関する機能の向上を図る。
- ② 法制研修及び経営活動を通して、今日的な課題の解明に努める。

四 活動の状況

学校教育と社会教育を一本化した包括的な計画である「小樽市教育推進計画」で示された基本理念「主体的に学び 小樽の未来を創る 心豊かな人づくり」を踏まえ、毎年、中学校長会としての共通目標を立て、各学校

で具体的な実践を進めている。

今年度は、特に「学校運営組織の機能化」を重点とし、教務主任がより一層、指導的な役割を果たせるような体制の整備や教頭の業務内容の見直し等に取り組んでいる。

また、「小中一貫教育」では、担当者を中心に、小中間の交流等を一気に進めるなどの成果が見られる地区も複数ある。

五 年間活動（行事）

- | | |
|---------------|-----|
| 総会 | 一回 |
| 定例校長研修会 | 一二回 |
| （うちオンライン会議四回） | |
| 四役研修会 | 八回 |
| （うちオンライン会議五回） | |
| 四役部長研修会 | 四回 |
| （うちオンライン会議三回） | |
| 小樽市校長会役員研修会 | 六回 |
| 小樽後志代表校長会議 | 一回 |
| 道中第一ブロック連絡協議会 | 一回 |
| （紙面交流による開催） | |
| 中・高校長連絡会議・協議会 | 一回 |
| 経営・法制研究会等 | 三回 |

六 役員一覧

- | | |
|--------|---------------|
| 会長 | 岡本 清豪（北陵中学校） |
| 副会長 | 村上 俊一（向陽中学校） |
| 副会長 | 伊藤 仁弥（望洋台中学校） |
| 事務局長 | 田中 孝二（銭函中学校） |
| 研究部長 | 高橋 恒雄（潮見台中学校） |
| 組織法制部長 | 杉田 嘉雄（桜町中学校） |

（小樽市・銭函中 田中 孝二）

上川地区は、今年度新たに一六人の新会員と旭川市及び他管内から異動の七人を迎え、二三市町村の総勢八九人で活動している。

ス感染拡大防止の観点から急遽書面による開催に変更し、議事の承認はグーグルフォームを活用して行なった。

南部和紀新会長の下、会員一人一人の「研さん」と「結束」、組織力を高め「新しい社会の形成に向けて挑戦する子供たちを育てる学校経営」の実現に向け邁進している。

上川管内校長会は、「ふるさとを愛し、他者とともに持続可能な社会を創造する人材を育てる学校の在り方」の究明と新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育てる学校経営を推進し、住民の負託と信頼に応える上川教育の一層の充実発展に寄与することを旨とする。そのため、「愛情と信頼」「研鑽と結束」の合い言葉を継承し、学校の教育力を高めるため、次の四点を活動方針としている。

(2) 法制研究会・教育経営研究会の開催

(3) 学校経営に関する法制上の課題把握と関係法規の研究・具体的問題の収集処理に関すること

(2) (1) 研修組織及び運営に関すること
道小・道中研究大会及び全連小・全

日中研究協議会に関すること

(2) (1) 会報の編集と発行に関すること
各種調査の企画・実施に関すること

(3) 統廃合学校に関すること

1 「愛情」と「信頼」に基づき、創意に富む信頼される学校経営の充実に努める。

2 校長自ら「研鑽」に励むとともに、教職員の一層の資質・能力の向上に努める。

3 組織活動の充実と確かな情報共有を図り、会員の「結束」を強化するとともに、教職員の処遇改善に努める。

4 上川教育局・地教委及び道小・道中、教育関係機関・団体と連携し、教育課題の解決及び北海道教育をリードしていくことに努める。

4 (4) 道小・道中対策部・情報部との連携
事務局

(1) 学校経営に関する資料の整備と交流

(2) 地区ブロック研修会に関すること
(3) 後継者育成のための諸施策の立案と実施に関すること

(4) 教育局・地教委連・市町村校長会
など関係諸団体との連携に関するこ
と

(5) 各部との連携に関すること

三 役員一覽

会 長 南部 和紀（東川小）

副会長 大場 八仁（鷹栖中）

副会長 鈴木伸行（上富良野小）

副会長 鈴木 豊（名寄南上）

副会長 蟹谷 正宏（愛別中）

運営委員長 北島 信（鷹栖 北野小）

運 營 委 員 杉 山 禎 裕 (和 寒 中)

事務局長 袈田佳奈恵（剣淵中）

事務局次長 豊田 央（美深小）

会計理事 千葉 良彦（富良野東中）

庶務理事 岡田 亮二（上士別中）

経営部長 小嶋 高德（幌加内中）

研修部長 富永 浩司（上富良野中）

広報部長 富居 充孝（土別南中）

(士別市・上士別中 岡田 亮二)

旭 川 市



旭橋
「旭川八景」

旭川市中学校長会は、本年度、新採用二人を含む五人の新会員を迎えた。会員二十七人が工藤 亘会長を中心に、「知恵を結集し、さらに、前へ」を基本姿勢とし、旭川市教育大綱の基本方針「主体的に学び力強く未来を拓く人づくり」の具現化を図るために、組織の一層の活性化を進めている。

会員相互の研さんと連携のもと、新しい時代に相応しい学校教育の創造に向けて日々邁進するとともに、校長としての主体性とリーダーシップを発揮して、基本理念である「信頼される中学校教育の創造」を目指して会務を推進している。

一 活動の方針（要点）

- 1 教育の動向を適切に見極め、具体策をもって、主体的にその取組を進める。
- 2 旭川市民の願いや期待に応え、信頼される中学校教育を目指し、会務の推進に努める。
- 3 旭川市教育委員会、関係機関・各種団体等と緊密に連携し、教育諸課題への適切な対応に努める。

- 4 中学校長としての使命を自覚し、時代の進展に対応する中学校教育の在り方を見極めるとともに、その充実・発展に努める。

- 5 校長としての資質・能力の向上を図る積極的な研修に努める。
- 6 会員相互の意思疎通を図り、活動の活性化・効率化に努める。

二 活動の重点（要点）

- 1 創意と活力ある学校づくりの推進
- 2 信頼される開かれた学校づくりの推進
- 3 生徒指導上の諸課題の解決
- 4 校長の資質・能力の向上
- 5 関係機関・団体との連携と組織強化

三 各部の主な活動

- 1 研究部
 - (1) 六月研修会の開催・運営
 - (2) 上川管内小中学校長研究大会の運営
 - (3) 全日中研究協議会北海道（札幌）大会への参加
 - (4) 二月研修会の開催・運営
 - (5) 研究紀要の発刊
- 2 厚生部
 - (1) 福利厚生関係業務の推進
 - (2) 叙位・叙勲関係業務の推進
 - (3) 親睦関係業務の推進
- 3 広報部
 - (1) 会報「校長会だより」の編集・発行
 - (2) 会誌「第五三号」の編集・発行
 - (3) 道中の広報活動への協力

4 生徒指導部

- (1) 小学校・高等学校及び関係機関との交流の充実
- (2) 定例校長会議における「生徒指導情報交流」「実践交流」の充実
- (3) 地区ブロックにおける生徒指導体制及び小学校との連携や交流の充実
- (4) 各関係機関との緊密な連携と協力体制の構築

5 学校教育対策部

- (1) 旭川市小・中学校長会法制研修会の開催
- (2) 学校運営及び法制上の諸課題への対応（教育課程の管理、服務規律の向上、管内人事異動要綱、時間外勤務の縮減、学校の危機管理等）
- (3) 道中地区対策担当者業務への対応

四 役員一覧

- | | |
|-------|-------------|
| 会 長 | 工藤 亘（中央中） |
| 副 会 長 | 佐藤 哲雄（愛宕中） |
| 副 会 長 | 中山 洋（東明中） |
| 監査委員 | 江口 貴彦（神楽中） |
| 監査委員 | 貞弘 真悟（緑が丘中） |
| 事務局長 | 福澤 秀（明星中） |
| 事務局次長 | 千葉 雅樹（広陵中） |
| 事務局次長 | 岩瀬 一弘（北星中） |
| 事務局次長 | 森田 聖吾（忠和中） |
| 会計委員 | 濱中 昌志（旭川中） |

（旭川市・明星中 福澤 秀）

宗 谷



「日本最北端の地」碑
(稚内市宗谷岬)

宗谷校長会は、一〇市町村、五二校（うち単置中学校一七校、小中併置校五校）の校長で構成している。結成以来、「宗谷の風土に根ざした豊かな自然に育む子供」をテーマに掲げ、会員相互の研さんと職能向上に努めながら管内教育の充実・発展を図っている。

一 運営方針

- 1 校長としての使命を自覚し、自らの職能向上に努めると同時に指導性を發揮し、教職員の研修活動の活性化を図り、保護者や地域の期待に応える学校経営の充実に努める。
- 2 会員相互の理解を深め、活動の活性化を図り、宗谷教育の充実・発展に努める。
- 3 関係機関・団体との連携を図り、教育諸課題の解決にあたるとともに、教育条件整備に努める。

二 活動の重点

- 1 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に基づく活力ある学校経営を推進する。

三 各部の活動

- 1 研究部
- 2 研修活動を充実し、職能向上と、教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。
- 3 関係機関・団体と連携し教育諸条件と教育諸課題の改善と整備・充実に努める。
- 4 校長会の組織を強化し、活動の活性化を図る。

- (1) 宗谷校長会の活動方針に基づき、事業計画を立て、その遂行にあたり、ともに、地域社会の期待と要請に応え、教育課程についての研究と当面する教育課題に向き合う学校経営を究明する。
- (2) 『自らの可能性を信じ、豊かな人生を切り拓いていく力を育む学校教育の推進』を研究主題とする第一三三次年継続研究の一年目の取組を行う。「学校経営」「教育課程」「資質向上」に関わる信頼される学校づくりの共通課題を明らかにし、実践的研究の充実に努める。
- (3) 関係機関・団体との連携を図り、宗谷における教育研究の一層の発展・充実に努める。
- (4) 道小、道中、全連小、全日中の研究大会などに積極的に参加し研究大会での提言については宗谷校長会として協力共同で取り組み組織的な発表とする。
- (5) 宗谷の重要課題である学力保障を推進するため『学力向上プラン』による実効性ある手だてを講じるとともにその

四 役員一覧

- 2 有効性を常に評価検証し改善を図る。経営・情報部
 - (1) 学校経営上の諸問題の解明に努める。
 - (2) 学校経営の管理運営に関する調査及び研究に努める。
 - (3) 意欲を高め、やりがいのある人間関係づくりのための学びを高める。
 - (4) 会報と会誌を編集・発行するとともに、各種原稿依頼に迅速に対応する。
- 3 対策部
 - (1) 関係機関・団体との連携を一層強め、会員の福利厚生の実と向上を図る。
 - (2) 道小・道中からの諸調査を迅速且つ正確に行うとともに、本会独自の調査活動が必要に応じて行う。

会 長	藤田 淳 (拓心中)
副 会 長	佐藤 佳弘 (兜沼小中)
	今野 亘 (稚内中央小)
	桜井 和則 (浜頓別小)
	畠山 博次 (豊富中)
	林 智宏 (枝幸中)
事務局 長	吉崎 健一 (潮見が丘小)
事務局 次長	細谷 隆志 (浜頓別中)
	三野宮誠一 (豊富小)
	宮崎 哲也 (中頓別小)
	塩原 悟 (幌延小)
	黒木 敏郎 (天北小中)
会 計	藤原 雅宏 (稚内中)

(浜頓別町・浜頓別中 細谷 隆志)

留 萌



北海道遺産
歴史的建造物群
(増毛町)

今年度の留萌管内小中学校校長会は、藤田会長の強いリーダーシップの下、「つながり、高め合う校長会」をキーワードに、会員相互の信頼関係を基盤とする中で連携と協同性を発揮し会の運営をスタートした。

また、ウィズコロナ・アフターコロナを見据えつつ、持続可能な校長会組織とするため、会則の見直しやオンラインでの会議「令和の日本型学校教育」の構築を図る校長の在り方を追究する研究のスタート、GIGAスクール構想の具現化と働き方改革をテーマとした教育経営研究会の開催など、目的を明確にし業務を推進している。

一 運営方針

- 1 校長の使命と責任を自覚し自らの識見を高める研修の充実と情報共有を図る。
- 2 会員相互の連携を密にして信頼関係を深め、組織の強化と活動の充実を図る。
- 3 物事や事象の変化に対し、柔軟な組織を確立し、先を見通した最善の対応を図る。
- 4 教育関係機関・団体及び地域社会との連携を強化し、諸問題の解決を図る。

二 活動の重点

- 1 教育改革を具現化する学校経営に努める。
 - (1) 創意ある教育課程の編成・実施と評価・改善
 - (2) 社会とともに子供を育てる開かれた学校経営の推進
 - (3) いじめや不登校等の生徒指導上の諸問題への迅速な対応
 - (4) 児童生徒の安全確保と危機管理体制の徹底・保持・充実
 - (5) 学校における働き方改革の推進による教育活動の質の維持・向上
- 2 研修活動の充実と環流に努める。
 - (1) 管内校長会教育研究協議会の開催
 - (2) 留萌地区教育経営研究会の開催
 - (3) 道小・全連小・全日中大会への参加
 - (4) 新任校長研修会の開催
 - (5) 研究集録や会報などによる環流
- 3 組織の強化と活動の効率化に努める。
 - (1) 理事研修会の充実と市町村校長会との連携
 - (2) 各部及び各市町村校長会との連携
 - (3) 教育の諸課題に対する的確な対応
 - (4) 全道（国）校長会、管内教育関係機関、団体との連携強化
- 4 教職員の待遇改善に努める。
 - (1) 公平な教職員人事に関わる取組の推進
 - (2) 退職手当及び退職時の処遇の充実
 - (3) 再任用の拡大と再就職の促進

三 各部の活動計画

- 1 研究部
 - (1) 留萌管内小中学校校長会教育研究協議会の開催
 - (2) 道小・道中提言プロジェクト委員会の充実と研究推進
 - (3) 研究集録の発行
 - (4) 留萌管内教育研究団体連絡協議会の業務推進
- 2 組織部
 - (1) 留萌地区教育経営研究会の開催
 - (2) 教育条件整備や福利厚生の実態把握
 - (3) 組織・法則に関する研修会の充実
- 3 広報部
 - (1) 会報の発行・市町村会報の交流
 - (2) 道小・道中情報部との連携

四 役員組織

会 長	藤田 智哉（留萌中）
副 会 長	早坂 康（東光小）
事務局 長	石田 正樹（留萌小）
事務局 次長	村井 亨（小平小）
会計 委員	亀田 寛人（増毛中）
監査 委員 長	堀井 理（羽幌小）
監査 委員	本間 博樹（遠別小）
研究 部長	小柳 豊（天塩小）
組織 部長	田中 幸治（小平中）
広報 部長	関根 智（羽幌中）

（増毛町・増毛中 亀田 寛人）

山 檜



メークイン発祥の地
(厚沢部町)

檜山校長会は、檜山管内七町の小学校一七校、中学校一〇校の校長で構成している。本会は、昭和二十三年の創立以来、管内教育の充実・発展のために研究と実践を積み重ねるとともに、教育条件の整備等に努めるなど、組織の総力を挙げて取組を推進している。

一 今年度の運営方針

教育改革は未来を見据えて急速に展開し、学習指導要領においては、「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められている。また、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実等、自立した人間として、多様な社会の中で他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力の育成が求められている。

檜山校長会は、こうした教育課題解決のために「ふるさと檜山に誇りを持ち、自己実現に向けて未来を切り拓く児童生徒」を育む学校経営の在り方を究明し、保護者や住民の負託と信頼に応えるため学校組織の活性化と活力ある学校づくりに全力で取り組んでいく。

そして、学びの保障を構築し、児童生徒の学力・体力の向上と安定した学校生活を恒久的に維持、発展させていくために次の活動を重点にしている。

二 今年度の活動の重点

- 1 組織マネジメントを活かした活力ある学校経営の推進（重点）
- 2 「生きる力」を育む適切な教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 時代の変化に即した生徒指導や特別支援教育の組織的推進
- 4 教職員の資質・能力の総合的向上
- 5 服務規律の厳正な保持
- 6 組織活動の活性化と充実（重点）
- 7 ミドルリーダー並びに管理職候補者の育成
- 8 防災教育と健康安全教育の充実
- 9 学校における「働き方改革」の推進（重点）

三 主な各部の活動

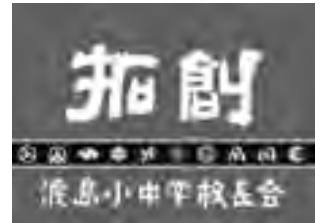
- 1 経営部
 - ① 檜山校長会教育研究大会の開催
 - ② 檜山校長会教育研究大会の事業反省と意見・要望等の調査
- 2 道小・道中の調査協力等の連携
- 2 研修部
 - (1) 檜山校長会研究計画の作成及び推進
 - (2) 檜山校長会教育研究大会分科会運営及び大会集録の編集

四 役員一覧

- 3 対策部
 - (1) 各種調査に対する取組
 - (2) 新採用校長研修会の開催・運営
 - (3) 各種資料の収集と整備
 - (4) 福利厚生の活動及び道小・道中との連携
 - 4 情報部
 - (1) 檜山校長会誌『清風』の編集・発行
 - (2) 道小「教育北海道」の執筆依頼・原稿の提出
 - (3) 道中「道中だより」・「全道中」の執筆依頼・原稿の提出
 - (4) 『清風』の復刻版の閲覧の実施
- | | |
|-------|-------------|
| 会長 | 福井 順一（江差中） |
| 副会長 | 谷口 光伸（江差小） |
| 監査 | 皆川 一海（江差北中） |
| 監査 | 石澤 修介（上ノ国小） |
| 事務局次長 | 笠松 靖史（乙部小） |
| 事務局次長 | 宮腰屋 由（乙部中） |
| 事務局次長 | 佐藤 等（館小） |
| 会計 | 中山 晴生（河北小） |
| 経営部長 | 米谷 優（瀬棚小） |
| 研修部長 | 久慈 学（今金小） |
| 情報部長 | 松村 浩良（厚沢部小） |
| 対策部長 | 安田 善紀（鶉小） |

（江差町・江差中 福井 順二）

渡 島



会旗：「拓創」

渡島小中学校長会は、昭和五十二年に渡島小学校長会と渡島中学校長会の統合により会員数一三二人でスタートし、四六周年を迎えた。現在一〇市町校長会で、小学校三七人、中学校一八人、小中併置校一人、義務教育学校一人の、会員数五七人で組織している。

今年度は、池田克己新会長のリーダーシップのもと、「オール渡島」をキーワードに、先輩諸氏が築きあげてきた実績と伝統を守りながら、更なる課題と渡島教育の充実・発展に寄与していきたいと考える。

一 運営方針

- 1 「ニューノーマル」における学校教育を見据えた教育活動の推進
- 2 働き方改革の推進
- 3 後継者育成への取組継続
- 4 オール渡島として会務推進

二 活動の重点

- 1 新しい時代を担う渡島小中学校の学校経営の充実に努める。
- 2 時代の動向に合わせ、迅速な情報交流

や協働の研修を進め、校長としての識見や指導力の向上を図る。

- 3 教育の動向を踏まえ、教育関係機関・団体及び地域との連携を強化し諸課題の解決に努める。

- 4 渡島の教育全体の動向を各々の学校に生かすために調査と情報発信に努める。

- 5 次世代の渡島の教育を支える人材育成を図り、後継者育成を進める。

- 6 教育環境・諸条件の整備と福利厚生の実に努める。

- 7 渡島小中学校長会会員の連携をより一層図り、組織の強化と充実に努める。

- 8 令和五年度北海道小学校教育研究渡島・北斗大会へ向け、準備を進める。

三 各部・事務局の主な業務計画

1 研修部

- (1) 第一八期二か年計画一年次の研究計画の策定と推進

- (2) ブロック研究との連携

- (3) 第四六回研究大会の開催

2 経営部

- (1) 総会・研修会における研修講話

- (2) 各種調査の実施と協力

- (3) 渡島・函館地区教育経営研究会協力

- (4) 経営部ニュースの発行

3 対策部

- (1) ICT活用に関する情報収集や発信

- (2) 各種懇談会への協力

- (3) 厚生事業（PG大会）の企画・運営

- (4) 住宅要覧の追加・修正等

4 情報部

- (1) 会報「渡島」、会誌「拓創」の発行

- (2) 道小・道中広報誌への協力

5 正・副会長、事務局

- (1) 会務の推進、連絡・調整・渉外

- (2) 予算・決算の作成、会計事務の執行
- (3) 各種会議、研修会・研究会等の開催

- (4) 新採用会員研修会・歓迎会

- (5) 渡島小中学校長会研究大会

- (6) 夏季・冬季研修セミナー

- (7) 退職準備セミナー（隔年開催）

- (8) 退職者感謝の会

- (9) 諸機関・関係団体との研究協議会等

- (10) 渡島・函館地区教育経営研究会

- (11) 三地区校長会役員研修会

- (12) 「教育実践表彰」の企画・実施

- (13) 渡島管内教育関係管理職名簿の発行

- (14) 全道・全国校長会との連携・協力

四 役員一覧

会長 池田 克己（知内・知内小）

副会長 石川 宏司（森・森中）

副会長 大橋 宏朗（七飯・大沼岳陽）

監査 岩井 栄一（松前・松城小）

監査 加賀 亨（北斗・大野中）

事務局 西田 浩人（八雲・八雲小）

事務局 後藤 正弘（鹿部・鹿部中）

事務局 金澤 力（森・森小）

会計 五十嵐義幸（七飯・藤城小）

庶務 齋藤 政洋（北斗・久根別小）

（森町・森中 石川 宏司）

市 館 函



大三坂と
カトリック元町教会

函館市中学校長会は、今年度二〇人の会員（新会員三人、義務教育学校一校）でスタートした。佐藤雅博会長のしなやかで力強いリーダーシップのもと、小規模校長会ならではの機動性を生かしながら、函館市の教育振興計画に基づき、会員の知恵と力を結集し、函館の教育の充実に寄与したいと考えている。

一 基本方針

- 1 校長会の組織を機能させ、一丸となって教育課題、経営課題の解決に努める。
- 2 全教育活動を通して「生きる力」を育む「信頼される学校」の創造に努める。
- 3 関係機関との連携を基に、教育課題の解決、教育条件の整備充実に努める。

二 活動の重点

- 1 関係機関、各種団体とのネットワーク及びCSを活かした学校力の向上。
- 2 中学校教育の在り方についての研修と幼・小・中・高の連携強化。
- 3 危機管理を含むリスクマネジメントの意識を高め、実践的な交流機会の充実。

- 4 業務改善に向けての更なる改善と信頼される学校づくりの経営研修の充実。
- 5 関係機関と連携した管理職後継者の育成。
- 6 函館市の「教育振興基本計画」と自校の学校経営の融合と実践・検証。

三 各部運営計画の概要

経営・研修・対策部の三部構成。

1 経営部

- (1) 道中経営部との連携
- (2) 運営要項の作成
- (3) 小中合同特別研修の運営の支援
- (4) 後継者育成資料作成
- (5) 函館・渡島地区教育経営研修会支援
- (6) 三地区校長会役員研修会の計画と運営（今年度書面開催）

2 研修部

- (1) 道中研修部との連携
- (2) 実践事例交流会、局長講話、教育経営研修会の計画と運営
- (3) 道中研究大会の参加・協力
- (4) 渡島管内中高連絡協議会の運営協力
- (5) 全日中研究協議会九州大会に向けた提言準備

3 対策部

- (1) 道中対策部・調査部との連携
- (2) 道中等各種調査の協力・まとめ
- (3) 函館市への予算要望調査の依頼及び

- まとめ、各部各課、教育長への要望
- (4) 教育実習生の受入れに関すること
- (5) 福利厚生に関すること
- (6) 道中会報・会誌の原稿依頼
- (7) 函館市中学校長会誌「桐影」第四二号の編集と発行

四 主な活動の概要

1 定例研修会

職能向上を図るため経営課題や教育問題の報告と協議を行い、円滑な学校運営の推進を目指し研修の成果を上げている。

2 経営研修会

各種研修会の性格に応じた講演や提言により今日の課題への理解を深めている。

五 役員一覧

会 長	佐藤 雅博（巴 中）
副 会 長	松田 賢治（深堀中）
副 会 長	齊藤 淳一（榎法華中）
副 会 長	古俣みきお（戸倉中）
監 査	奥崎 敏之（北 中）
監 査	岩田 学（銭亀沢中）
監 査	小川 俊哉（臼尻中）
事務局 長	長谷川秀雄（桔梗中）
事務局 次長	田上 直広（湯川中）
事務局 次長	山口 哲也（尾札部中）
経営部 長	吉田 敬三（亀田中）
研修部 長	佐々木理之（五稜郭中）
対策部 長	仲井 靖典（本通中）

（函館市・桔梗中 長谷川秀雄）

空 知



空知校長会
シンボルマーク

空知校長会は、管内二四市町、小学校五五校、中学校三八校、義務教育学校一校の九四人の会員で組織されている。

昨年に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止の対応により、事業が中止や縮小、またはオンライン会議等を活用した内容への変更を余儀なくされている。しかし、こうしたときだからこそ、『チーム空知』として全会員の英知を結集させ、空知の子供たちの健やかな成長を願い、確かな教育理念に基づいた課題解決と空知の教育の充実発展に全力で取組を進めている。

一 活動方針

- 1 空知の校長としての使命を自覚し、研鑽に励み、学校の自主性・自律性を発揮して、学校経営の充実・発展に努める。
- 2 校長相互の連携を図り、組織の在り方を再検討する中で、組織運営の効率や業務削減、諸課題の解決に努める。
- 3 教育関係機関・団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたり、地域・保護者から信頼される学校づくりに努める。

二 活動の重点

- 1 学校経営の充実
- 2 研修活動の充実
- 3 調査活動の充実と諸問題の解決
- 4 広報活動の充実

三 活動の具休策

- 1 適切な教育活動の編成と実施
- 2 校内運営組織の機能化
- 3 信頼に応える学校経営の推進
- 4 会員相互の協力と教頭会との連動による取組の推進

四 各部の主な活動

- 1 経営・対策部
 - (1) 学校経営研究会の開催
 - (2) 教育条件の整備拡充に資するための調査・要請活動
- 2 研修・情報部
 - (1) 空知校長会研究大会の開催
 - (2) 各種校長会研究大会への参加
 - (3) 各種研究団体・研修会への協力研修便りの発行
 - (4) 会報「空知野」の編集・発行
 - (5) 各種名簿・資料の作成・保管
 - (6) 道小・道中広報関係への原稿執筆
 - (7) 北海道教育振興会に関する業務
 - (8)

五 組織と役員

《空知校長会役員》

・ 会 長	菅原 伸介 (岩見沢南小)
・ 副会長	廣瀬 一仁 (滝川開西中)
・ 事務局長	松本 伸彦 (栗山小)
・ 事務局次長	伊藤 聡 (岩見沢栗沢中)
・ 監 査	石成 牧子 (深川中)
・ 監 査	高羅 正次 (長沼小)
《経営・対策部》	
・ 統括部長	西田 篤人 (滝川第三小)
・ 対策部門部長	富樫 孝行 (歌志内学園)
・ 副部長	角銅 隆 (雨竜小)
《研修・情報部》	
・ 統括部長	戸澤 法史 (秩父別中)
・ 情報部門部長	古畑 聡子 (深川北新小)
・ 副部長	小玉 剛 (北竜中)
《地区幹事》	
・ 北地区幹事	千石 正巳 (深川一巳小)
・ 中地区幹事	木内 一樹 (砂川小)
・ 南地区幹事	江幡 佳代 (三笠萱野中)
・ 東地区幹事	浦田 俊哉 (由仁小)
《道小役員》	
・ 幹 事	西田 篤人 (滝川第三小)
・ 地区理事	戸澤 法史 (秩父別中)
《道中役員》	
・ 幹 事	河村 克也 (滝川江陵中)
・ 幹 事	坂本 征人 (妹背牛中)
・ 幹 事	小泉 寧 (南幌中)
・ 地区理事	伊藤 聡 (岩見沢栗沢中)

(北竜町・北竜中 小玉 剛)

胆 振



祝津公園から望む
「白鳥大橋の全景」

胆振管内校長会は、管内一市町、併置校二校を含め、小学校六六校、中学校四一校、義務教育学校一校の一〇八校、一〇八人の校長によって構成されている。一市町中、苫小牧市が小・中ごとの校長会を組織しており、管内校長会としては一二校長会から成り立っている。

一 運営・活動方針

本会は、子供たち一人一人に「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」といった生きる力を育むとともに、保護者や地域住民の負託と信頼に応え、管内教育の充実と発展のために努力を積み重ねてきた。今年度は、授業改善を中核に据え、教職員の職能の向上、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、いじめ・不登校への迅速柔軟な対応、インクルーシブ教育の拡充を推進する。

家庭・地域と連携・協働し、未来社会を切り拓く資質・能力を身に付けた児童生徒の育成を中核に据えた教育活動を展開している。

1 活動方針

(1) 校長としての識見・能力を高めるため、自ら研鑽に励むとともに組織のリーダーとしての指導力を培い、時代の要請や学習指導要領の目標を実現するため、「チームとしての学校」への改善充実に努める。

(2) 会員相互の信頼関係を基盤として、組織の充実・強化に努めるとともに、校長会の総力を結集して、迅速且つ適切に諸問題の解決に努める。

(3) 教育関係機関や諸団体との連携を強化し、働き方改革を中心とする、今日的な課題の解決に努める。

2 活動の重点

(1) 校長としての職能向上を図る研修の充実

(2) 学校経営の適正化を図る研究・実践及び教育条件の整備・充実

(3) 教職員の意識改革と資質・能力の向上による学校改善と働き方改革の着実な推進

(4) 後継者育成に向けた事業の推進

(5) 道小・道中、第四ブロック、各市町校長会との組織的な連携の重視と行政諸機関や関係団体との連携強化

(6) 会員同士の親睦と福利厚生の実施に関する事業の推進

(7) 諸事業の機能的・効率的な運営改善と予算執行の適正化

二 各部の事業推進概要

- 1 研修部へ研修の活性化と職能向上
- 2 経営部へ組織・法制上の諸問題、法令・法規の情報収集、組織力の強化
- 3 対策部へ各種調査、福利厚生事業推進
- 4 情報部へ会報・会誌「響箭」の発行

三 役員名

会 長	瀧澤 義守（虻田中）
副 会 長	手塚 敏（美園小）
	前田 辰夫（凌雲中）
運営委員	吉岡ゆかり（沼ノ端小）
	高橋 秀壽（伊達中）
	大谷 昌史（八丁平小）
事務局 局長	近藤 大作（伊達市東小）
事務局 次長	菅林 秀樹（緑陵中）
研修部長	毛利 毅（苫小牧若草小）
経営部長	森田 芳明（緑小）
対策部長	小原 毅（幌別西小）
情報部長	森 晶子（地球岬小）
会 計	河毛 幸至（厚真中央小）
	南 正彦（大岸小）

（室蘭市・桜蘭中 秦 将人）

日 高



世界ジオパークの町
様似町

日高地区校長会は、管内の小・中学校四一校（中学校二五校）の校長で組織している。重点課題は、「日高管内の教育課題の解明・解消と職能向上を目指し、積極的に提言・発信・行動する校長会を実現する」ことを掲げ活動している。

活動の推進にあたっては、コロナ禍の状況下であっても、今年度は各種研修会を中止等の措置を行わず、会員相互の交流を第一に情報や課題の共有化に努めてきた。また、道小・道中や教育局、教委連、各町教委とのつながりを大切にし、校長会員の声を積極的に伝えるよう努めた。

一 活動方針・重点

- 1 ウイズコロナ時代を踏まえた信頼と秩序に基づく学校経営の推進
- 2 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 教職員の資質・能力の向上と後継者育成
- 4 研修活動による職能向上と組織体制の強化

二 各部の活動

1 研修部

学習指導要領の改訂や今日的な管内状況を踏まえ、新しい時代や社会の要請に対応した「学習指導要領実施に向けた学校経営ビジョンの実現」をテーマとした研究活動を通して、校長の指導性の向上を図るための研修を推進している。研究課題は、平成三十年度からの研究活動を継続・深化させており、個人研究と組織研究を関連づけて進めている。

また、会員相互の研修を深めるために、研究活動の実践状況の交流・協議・検証の場として、「日高管内小・中学校長研修会」、「課題別研修会」を開催した。今年度はどちらの研修会も全員が参加して行うことができ、大変有意義なものになった。

2 法制・広報部

教育経営・法制研修会については三年ぶりに単独開催することができた。当日は、道小・道中の役員の方々より情勢報告をいただいた。またその後、「スクーロイヤー制度とその活用事例」について、地元の弁護士から講話をいただき、校長としての見識を広げる研修会となった。

校長会員の連携を高める会報「採用校長の決意」と広報誌「教育ひだか」の発行は予定通り行った。

3 調査・厚生部

学校経営に必要な調査を道小・道中と連携しながら情報の共有化を図った。福利厚生については、主体的に研修を深め、厳しい共済制度に対しても見通しをもち、支援を進めている。

4 学力向上特別委員会

今年度の全国学力・学習状況調査から「学力向上」が日高管内の最重要課題であることが改めて認識された。このことから、日高地区校長会は、新学習指導要領の理念の実現に向けた対応が確かな学力の向上につながるという方向性を持ち、本委員会を立ち上げた。管内全体として実効性のある取組を校長会員全体で構築し、各校で実践していくことで、管内児童・生徒全体の学力の底上げを進めていく。

三 役員

会長	品田 和輝（浦河堺町小）
副会長	盛永 明寿（浦河一中）
副会長	水上 義則（平取小）
事務局長	小嶋 範彦（静内三小）
事務局次長	鈴木 晋作（高静小）
事務局次長	玉手 広昭（静内小）
会計	川野 靖幸（門別中）

（様似町・様似中 松田 陽一）

十 勝



広大な十勝平野

十勝地区は、管内一八町村の小・中学校長九一人で構成されている。本校長会は「校長の教育実践指標」を掲げ、会員相互の研さんに励むとともに、公教育の役割と使命の高揚に努めてきた。そして、創意と工夫に富んだ学校経営と教育活動の推進で、十勝教育の充実・振興に多くの成果をあげてきた。

また、校長一人一人が一校を預かる責任者であり、「子供の成長に責任を負う」という姿勢の下、十勝教育の推進・発展に寄与するよう努めてきたところである。

コロナ禍において、活動の中止や修正をしながら、今できる最大の連携・協力により、「十勝らしい一人一人の学びの実現」を合言葉に、保護者・地域とともに「子供の確かな育ちの創出」に努めてきた。

一 活動方針・重点

- 1 信頼に基づく創意工夫に満ちた活力あふる学校経営に努める。
- 2 協働体制の確立と信頼関係の深化を図り、組織体として機能の充実に努める。
- 3 研修を深め、主体性を確立し、教育上

の諸問題の解決に努める。

- 4 地域社会・関係機関との連携を強化し、教育諸条件の整備に努める。
- 5 待遇改善・福利厚生等の向上を図るため、情報交換と要望活動の充実に努める。

二 各部の活動(予定していた主な業務内容)

1 研修部

- (1) 第一八次教育研究三か年計画三年次の推進(第五四回十勝小・中校長会教育研究大会の開催)
- (2) 教育研究大会の研究収録の発行
- (3) 道小・道中研修部との連携(地区活性化支援事業への参加等)
- (4) 全国・全道校長研究大会への参加促進
- (5) 情報紙等を通じた教育情報の提供

2 経営部

- (1) 第五六回十勝・帯広地区教育経営・法制研究会の開催
- (2) 「学校経営等調査」の実施と調査報告書の発行
- (3) 北海道教育公務員弘済会との連携(教育研究実践校助成事業等)

3 対策部

- (1) 「十勝教育・学校の顔」の発行
- (2) 「教育懇談会」の運営
- (3) 「退職校長感謝激励の会」の運営
- (4) 令和四年度「十勝・帯広 校長・教頭・主幹教諭名簿」の発行
- (5) 全道・管内学校給食研究協議会への

協力

4 情報部

- (1) 会報「十勝川」の発行(年間三回)
- (2) 各町村校長会情報部との連携、各種情報の提供
- (3) 道小会報、道中会報等への寄稿

三 諸会議

- 1 総会(四月) 活動計画・予算・役員
- 2 町村会長会議(年一回)・事務局長会議(年二回)
- 3 評議員会(年一回)
- 4 常任委員会(月一回)

四 十勝小・中校長会役員

会 長	長 江 教 貴 (大樹中)
副 会 長	橋 本 靖 宏 (幕別中)
副 会 長	栗 原 賢 次 (音更小)
事 務 局 長	中 村 俊 緒 (足寄中)
次 長	野 村 勉 (緑南中)
会 計 長	久 保 睦 則 (札内中)
会 計 次 長	森 浩 嘉 (池田小)

五 役員一覧

代 表 者	長 江 教 貴 (大樹中)
事 務 局 長	橋 本 靖 宏 (幕別中)
会 計 担 当	久 保 睦 則 (札内中)
研 修 担 当	佐 藤 育 子 (音更中)
経 営 担 当	伊 澤 理 紀 (広尾中)
対 策 担 当	佐 々 木 典 郎 (下音更中)
情 報 担 当	中 村 浩 幸 (上美生中)

(足寄町・足寄中 中村 俊緒)

帯 広 市



ばんえい競馬

帯広市中学校長会は、大空学園義務教育学校を含む一四校の校長で構成している。今年度は、新会員一人を迎え、藤崎禎人会長を中心に、一枚岩となり諸課題に取り組んでいる。

はじめに

帯広市中学校長会は、全日中新教育ビジョン「学校からの教育改革」、帯広市教育基本計画の理念「ふるさとの風土に学び 人がきらめき 人がつながる おびひろの教育」、帯広市校長会の方針「新しい時代を生き抜く 帯広っ子の育成」一歩一歩、確かな歩みが続ける校長会」を踏まえ、校長としての主体性と指導性をもち、中学校教育を推進し、帯広市民の負託に応えていく。

一 運営方針

- 1 校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、今後に向けた組織の充実・強化を図り、会の総力を結集して活動の効率化と諸課題の解決にあたる。
- 2 帯広市教育委員会をはじめ、全日中、道中、管内小・中学校長会、中高特連絡

協議会等の教育関係諸機関・諸団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたるとともに、家庭や地域に信頼される学校づくりに努める。

- 3 一校を預かる校長としての使命を自覚し、学校の自主性・自律性を基に学校運営の改善・充実に努める。

- 4 新型コロナウイルス感染症対策と生徒の学びの保障の両立を図る「帯広市学校教育活動についての考え方」に基づき、感染状況を踏まえ、関係機関と連携しながら学校教育活動を進めていく。

二 活動の重点(今年度の重点課題)

- 1 中学校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。

■校種間の学びをつなぐ取組の充実・行動連携(エリアファミリ、小中一貫教育)

■危機管理上の迅速な対応(中学校長会ならではのスピード感を生かした協力体制)

■コミュニケーション・スクールの推進

- 2 教育課題の解決を図り、学校経営の改善に努める。

■社会に開かれた教育課程の実現(主体的・対話的で深い学びの実現)

■教職員の服務規律保持の徹底

■危機管理・コンプライアンス研修強化
不祥事ゼロKTSBA(交通事故・違反、体罰、セクハラ、暴言・安全管理)の誓いの取組

■働き方改革の推進(北海道アクション・プラン、帯広市立学校における働き方改革推進プランの推進、部活動休養日の完全実施、定時退勤日の完全実施、学校閉庁日の設定・校務分掌のスリム化、スクラップアンドビルドの組織的検討)

教育課程の整備・充実と特色ある学校づくり、確かな学力、体力の向上に努める。

- 3 新学習指導要領の趣旨を踏まえた組織的な授業改善の推進

■妥当性や信頼性を高めた学習評価の実施及び円滑化を図る各校連携した取組
■GIGAスクール構想における個別最適化学びの実現

■いじめ・不登校の問題への適切な対応と生徒指導体制の強化

- 4 多様化した高等学校教育並びに入学選抜方法への適切な対応
円滑な教育活動推進のための教育諸条件の整備・充実に努める。

■校長の人事具申権の尊重、人事異動要綱に基づく適正な配置

■人的条件の改善・物理条件・人的情報

三 役員

会長 藤崎 禎人(帯二中)
副会長 春山 俊裕(帯四中)
事務局長 能戸 貴英(帯一中)
事務部長 堂山 貴也(帯七中)
研修部長 嶋 健(八千代中)
会計 村松 正仁(大空中)

(帯広市・八千代中 嶋 健)

釧 路



釧路湿原の神
「タンチョウ」

釧路校長会は、令和四年度、採用九人の新会員を迎え、六町一村、四四人（小学校長二人、中学校長一人、小中併置校長一人、義務教育学校長一人）で構成している。

今年度、佐藤毅会長を中心に、本会が歴史的な背景をふまえて作り上げてきた釧路校長会の理念『調和のある学校運営を目指して』の五項目の方針を全体で確認し活動を開始した。

一 基本方針

本会は、常に「釧路校長会綱領」を基底に、釧路の教育の発展・充実に期する「学校経営にあたっての基本的な姿勢」を堅持し、「釧路の風土で新たな価値を想像し、未来を生き抜く児童生徒の育成を目指す学校教育」という令和四年度の校長会研究主題と「学習の保障」という釧路管内教育推進キーワードのもとに、子供のために最善を尽くす校長会として、関係機関との連携協力を密にして、保護者や地域の信頼に応える学校経営を推進するよう努力する。

【釧路校長会綱領】

私たちは釧路教育の充実、発展に重要な役割を果たし、子供の未来に責任を負う者として、ここにこの綱領を定める。

- 一、校長の使命を自覚し、常に厳しい自己研さんに努める
- 一、情熱と強固な意思をもって、公教育の推進に努める
- 一、たがいに強い連帯感をもって、職務の遂行に努める
- 一、職員相互の信頼関係を基盤とした学校経営に努める
- 一、釧路の風土に生き、未来を拓く子供の育成に努める

二 本年度の運営方針

- 1 校長としての経営ビジョンを明確に示し、その職責の重さを自覚して「釧路の風土に根ざす学校づくり」の経営感覚を磨き、その実践力を高めるために職能の向上に努め、諸課題を解決する。
- 2 教職員として服務規律を徹底し、地域や保護者からの信頼や期待に応え、「子供たちや教職員が明るく、楽しく学べる環境づくり」を志向する学校経営に努める。
- 3 新しい時代に求められる資質・能力など児童生徒の「生きる力」を育成する学習指導要領の確実な実施に向けて、授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立等の取組を進め、自校の教育活動の質の向上を図る。

三 活動の重点

- 1 学校経営の充実
 - ・学校における働き方改革の推進
- 2 創意ある教育活動の推進
 - ・教育の質の向上
 - ・男女平等教育の推進
- 3 組織の充実と強化
 - ・後継者の育成
- 4 教育関係諸団体、特に町村教育委員会と町村校長会との連携協力を密にし、教育の動向や情報を共有して諸問題への対応と解決に向け迅速に行動する。
- 5 釧路校長会綱領を基底とし、会員個々の意識を高め相互に連携・協働を図りながら、各校の調和のある学校運営を目指す。

四 役員

- | | |
|---------|------------------|
| 会 長 | 佐藤 毅（釧路町立遠矢中） |
| 副 会 長 | 水野 秀哲（釧路町立富原中） |
| 副 会 長 | 齋藤 超（白糠町立庶路学園） |
| 事務局 長 | 田中 敏行（鶴居村立鶴居小） |
| 事務局 次 長 | 須藤 光秋（白糠町立白糠学園） |
| 会 計 | 蝦名 武宣（浜中町立浜中中） |
| 釧 研 所 長 | 大西 展史（弟子屈町立弟子屈小） |
| 監 査 | 成瀬 剛慈（弟子屈町立弟子屈中） |
| 監 査 | 渕本 浩之（鶴居村立鶴居中） |
| 研修 部 長 | 中岡 美緒（標茶町立虹別小） |
| 経営 部 長 | 高橋 知毅（標茶町立標茶小） |
| 対 策 部 長 | 富田 和幸（釧路町立別保中） |
| 情 報 部 長 | 藤田 崇充（弟子屈町立川湯中） |

（釧路町・富原中 水野 秀哲）

釧路市



「世界三大夕日」と称される
釧路川からの夕景

令和四年度釧路市中学校長会は三人の新会員を迎え、一五人（併置校・義務教育学校各一校）でスタートした。本川会長のもと、今日的な教育課題や生徒指導上の諸課題について、具体的な事例をもとに研究協議を行い、校長としての資質や職能の向上に努めている。

一 活動方針（概要）

- 1 校長は「命の尊さ」を強く打ち出し、危機管理意識の醸成及び危機管理の対応について、継続的に取り組む。
- 2 校長は、各々、指導性・先見性を発揮し、「社会に開かれた教育課程」の実現に努める。また、教育効果を高める「カリキュラム・マネジメント」の積極的取組を実現する。
- 3 服務の在り方に対する教職員の意識に深く関わりながら、服務管理の適正化に努め、秩序ある学校運営を推進する。
- 4 校長は自校の学校運営の最高責任者という自覚をもち、自らの研さんのもとより、教職員の資質・能力を高める工夫や

教職員の意識改革に努め、これからの時代の学校のあり方に迫っていく強い意志と気概をもつ。

- 5 「教職員の資質・能力の向上」「マネジメント機能の強化」「危機管理体制の強化」「校種間の連携・接続の推進」等の制度的な改革に具体的に対応できる校長として、必要な職能及び専門性向上させる計画的な研修を組織的に推進する。
- 6 学校教育上の諸課題を克服するために校長会組織としての関わりを大切にするとともに、会員相互の情報共有をより一層深め、一枚岩の姿勢で取り組む。
- 7 道小、道中との連携を深めるとともに、釧路市小中学校校長会として独自性を發揮し、各部の円滑な進め方を共通理解する中で、効果的な組織運営に努める。
- 8 教育局、市教委、釧路校長会並びに関係機関との連携を密にし、学校運営上必要な教育環境や管理、勤務条件の整備促進に努める。
- 9 校長会としての地位の確立と主体性を高め、職能組織としての力量の充実と会員相互の結束強化及び親睦を図る。

二 活動の重点（概要）

- 1 学校経営
 - (1) 新型コロナウイルス感染症対策、GIGAスクール構想の推進、働き方改革等の喫緊の課題への対応
 - (2) 生きる力の育成を目指した教育課程

の編成・実施・改善

2 研修

- (1) 教育界の動向と教育課題を勘案した計画的・継続的な研修の充実
- (2) 職能向上のための研修会の企画と生徒指導上の課題の交流と対応

3 組織運営

- (1) 学校運営に関する法制問題の調査研究

- (2) 後継者育成のための職能向上を図る研修の充実

- (3) 会員相互の連携を深める広報活動

4 教育条件

- (1) 行政機関（教育局・市教委）との連携強化

5 厚生

- (1) 道小・道中・互助会との連携を密にした会員の福利厚生に関する業務の推進

三 主な活動

- 1 法制研修の推進等
- 2 学校教育経営研究会等
- 3 学力向上についての調査・研究等
- 4 生徒指導についての調査・研究等
- 5 高等学校、高専、特別支援学校との情報交換・交流

四 役員

- 会長 本川 敬一（幣舞中）
副会長 松岡 伸之（景雲中）
事務局長 水上 俊司（北中）
会計 林 政孝（阿寒湖義務）

（釧路市・北中 水上 俊司）

根 室



見返りキツネ
(遠音別岳)

一 はじめに

子供たちが、持続可能なまちづくりの担い手となり、心豊かにたくましく生き抜く力を育むよう、根室管内小中学校校長会は、新採用校長五人を迎え、「継承と発展」を合い言葉に、管内教育の振興にあたつてきた。全四〇校の校長がそれぞれ「チーム根室」を意識し、管内課題でもある後継者の育成を組織的、計画的に推進するべく、管内教頭会とも連携して活動を進めてきた。

二 運営方針

- 1 教育をめぐる諸情勢を的確に捉えるとともに、校長の抱える問題を組織として共有化を図り、その解決に向けた情報提供や解決策の提案に努める。
- 2 信頼される公教育の確立を図るとともに、関係諸機関との連携を深め、国や北海道の諸改革の動向を踏まえて適切な対応に努める。
- 3 校長の経営力の向上を図り、地域に開かれた学校経営の改善・充実に努める。
- 4 会員相互の連帯意識を強め、信頼関係

を基盤にした、強固な組織体制作りに努める。

三 活動の重点(概要)

- 1 家庭・地域に信頼される学校づくり
 - ・学校評価改善と教職員資質・能力の向上
 - ・家庭・地域社会との連携・協力の強化
 - ・教育委員会等との関係の強化
 - ・法規や服務規定に基づいた経営の推進
 - ・今日的課題に向けた組織体制の充実
- 2 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
 - ・特色ある教育課程の編成・実施
 - ・学力向上に向けた指導・評価の工夫
 - ・道徳教育・健康教育の充実
 - ・北方領土学習・ふるさと学習の充実
 - ・地域社会の人的・物的資源の効果的活用
- 3 研修活動の推進
 - ・学習指導要領の理解やカリキュラム・マネジメント等における研修の充実
 - ・根室管内小中学校校長研究大会及び地区教育経営研究大会開催と内容の充実
 - ・全道・全国の研究大会への積極的な参加
 - ・今日的な課題に対応する研修計画推進
 - ・教育諸条件の整備・充実
- 4 後継者育成の推進
 - ・人事課題に対する意思集約と発信
 - ・女性活躍推進
 - ・教職員の待遇改善への働き掛け
 - ・管理職の抜本的待遇改善
 - ・住宅環境や職場環境の整備と充実
 - ・教職員の健康管理、働き方改革の推進
- 5

- ・事務・栄養職員、退職者等の処遇改善
- ・業務見直しと組織強化
- ・役員業務の見直しと改善
- ・活動の充実及び組織・事業の改善
- ・市町単位校長会と連携した活動の推進
- ・組織的な情報収集と的確な情報提供
- ・各種調査活動の協力と推進
- ・関係機関や諸団体との連携
- ・適正な予算執行に向けた見直しと改善

四 主な活動内容

- 1 根室管内小中学校校長研究大会
 - ・一人一レポートを作成し協議した。
 - 2 根室地区教育経営研究大会
 - ・北海道小学校長会・北海道中学校長会幹部による教育情勢等の解説をもとに、諸課題を協議した。
 - 3 定例理事研修会の開催
 - ・各市町単位校長会の活動を交流し、課題と改善策について協議した。また、北海道教育庁根室教育局から教育の動向や今日的課題について情報提供を頂いた。
 - 4 「チーム根室」の取組
 - ・授業改善に向けた改善サイクルの確立。
- 五 令和四年度役員体制**
- | | |
|-------|-------------------|
| 会 長 | 近藤 康 (別海・上西春別小) |
| 副 会 長 | 根本 涉 (別海・上西春別中) |
| 副 会 長 | 古森 康晴 (中標津・中標津東小) |
| 事務局 長 | 齋藤 征志 (根室・光洋中) |
| 計 南 | 靖志 (別海・中西別中) |
- (根室市・光洋中 齋藤 征志)

オホーツク



知床五湖と知床連山

オホーツク管内校長会は、オホーツクの教育の充実・発展のため、心豊かでたくましい子供の育成に鋭意努力を重ね、組織の総力を傾注して研究と実践に努めてきた。

今年度は、一八人の新たな会員を迎え、小学校七三校、中学校四四校、小中併置校一校、義務教育学校三校の計一二二人の校長で組織されている。

これまでの成果を踏まえ、「オホーツクの子供たちのために、志を高く掲げ、力強く前進する校長会」のスローガンの下、創意と活力に満ちた学校づくりに努めている。

一 活動方針

- 1 ふるさとの地から世界を見つめ、新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育成するため、「チームオホーツク管内校長会」として、関係機関との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、地域・保護者の信託に応える学校経営を推進する。

- 2 自らの使命を自覚し、リーダーシップ

と指導力を発揮して、学校組織の活性化と職員の資質・能力の向上等に努め、活力ある学校づくりに全力で取り組む。

二 活動の重点

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の推進に努める。
- 2 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施と評価・改善に努める。
- 3 子供理解を深め、時代の変化に即した生徒指導の充実に努める。
- 4 校長の資質・能力の向上を図る研修活動の推進に努める。
- 5 教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。
- 6 組織内や関係機関との連携による組織の強化に努める。
- 7 教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。
- 8 教職員の処遇の改善に努める。

三 各部の活動計画

1 研修部

- (1) 第五〇回 オホーツク管内校長教育研究大会（オンラインでの開催）
- (2) 市町村・ブロック研修会
- (3) 道小・道中全道大会、全国研究大会への参加促進と研究交流（オンライン）
- (4) 教育課程に係る調査への協力

2 情報部

- (1) 「会員の顔」の発行

四 役員一覧

- (2) 道小・道中及び全連小・全日中と連携した広報活動
- (3) ホームページの更新

3 経営部

- (1) 地区別教育経営研究会の開催
- (2) 学校経営に関する調査の実施
- (3) 管内における諸課題の把握と分析

4 対策部

- (1) 管内の教育課題を集約した学校経営資料の提供
- (2) 道小・道中関係の諸調査への協力

会長	緒方 隆人（北見北中）
副会長	高橋 龍彦（網走四中）
副会長	信田 雅守（遠軽生田原小）
監査委員	平野真奈美（清里小）
監査委員	塩満 義史（紋別渚滑中）
事務局長	徳増 秀隆（網走第一中）
事務局次長	天野 昌明（北見小泉小）
事務局次長	河村 一恵（網走白鳥台小）
事務局次長	伊井 俊明（北見北光小）
事務局次長	平田 和史（北見小泉中）
会計	宮崎 浩（おんねゆ学園）
研修部長	上野 弘一（興部中）
情報部長	可児 隆洋（網走中央小）
対策部長	小栗敬一郎（遠軽南中）
経営部長	水野 利幸（興部小）

（北見市・小泉中 平田 和史）

札幌市



豊平館

札幌市中学校長会は、新しく開校した公立夜間中学の星友館中学校を含む市立中学校九七校と北海道教育大学附属札幌中学校、北翔養護学校、市立札幌開成中等教育学校を加えた計一〇〇人の校長で構成されている。

今年度も、富川浩会長の下、副会長六人、会計一人、事務局長一人が役員として会務を担うとともに、道中体連会長、各部署長七人、監査委員二人、事務局員七人の計二十六人で理事研修会の運営にあたる。

一 活動方針

市民の負託に応え信頼される中学校教育を推進すべく、「教育の動向を的確に捉える、保護者や地域、関係機関等との連携を図る、会の組織と機能を一層充実させる」を基本に校長としての研さんと職能の向上を目指す。また、「学びの保障と感染症対策の両立」、「学校における働き方の見直し」等を含め、今年度の重点項目は以下の四つである。

- ・校長会の組織・運営の強化と研修の充実
- ・学校経営の改善と充実
- ・学校経営の条件整備と教職員の待遇改善

・教育関係機関や諸団体との連携強化

二 各部会の運営の方針

〈管理部〉

- ・学校経営上の管理、運営についての現状把握と分析を行い、課題の解決を図る。

〈施設部〉

- ・長期的展望に立った学校施設・設備の整備・充実及びICT教育に関わる施設・設備や学習環境に関する諸課題の改善・充実に努める。

〈研究部〉

- ・研究基本主題による共同研究を総括し、校長としての職能向上を目指すことにより、中学校教育の充実・発展に努める。

〈指導部〉

- ・生徒の実態を的確に捉え、問題行動の質的变化にも適切に対応できる生徒指導の在り方について検討する。

〈保健体育部〉

- ・全市的立場で生徒の心身の健康保持、増進と体育・スポーツの充実発展を図る。

〈進路指導部〉

- ・研究主題に沿ったキャリア教育の推進を図り、適正な学校経営を行うための研究と条件整備にあたる。

〈特別支援教育部〉

- ・特別支援教育に関する諸課題について研究協議し、その推進と充実を図る。

三 具体的な運営・活動

1 「例会・研修会」は全会員出席の会議と

メール会議を合計年一〇回予定している。

2 「理事研修会」は、例会・研修会の前週に二六人の理事の出席で開催され、運営に関する協議、議題の整理等を行う。

3 「部会」(七部)は、年間数回設定され、担当する諸課題に取り組んでいる。

4 「各区校長会」(十区)は、行政区ごとに設置され、区内の情報交流や課題に応じた協議、検討、研修等を行っている。

5 「学教連絡会」では、毎月、幼小中高の四種校長会等の代表と市教委が、情報交流等を中心に連携を深めている。

6 「小・中学校生徒指導特別委員会」は、小・中学校長会代表と関係機関で構成され、生徒指導上の諸課題について、連携・協力を深めている。

四 研究活動

これまで、研究基本主題を設定し三年継続の研究が行われ、七つの部がそれぞれ教育課程や学校経営、生徒指導、教育環境等の視点から課題の究明に取り組んでいた。今年度は全日中研究協議会北海道(札幌)大会での準備・運営と全国からの提案・研究発表を中心に、職能向上と見識を深めることとした。

また、札幌市中学校長会は、政令指定都市中学校長会で構成する「大都市中学校長会連絡協議会」に加盟している。今年度の新潟大会には四名が参加し、大都市が抱える教育課題について情報交換と協議を行った。

(札幌市・北都中 小川 厚志)

北海道

風土記



サマニユキワリ アボイ岳にて



サンカヨウ 昆布岳にて



ユウバリコザクラ 夕張岳にて



ニセコ連峰（チセヌブリ、ニトヌブリ、ニセコアンヌブリ、羊蹄山）
～シャクナゲ岳からの眺め～



チングルマ 白雲岳にて



イワギキョウ 芦別岳にて



さっぽろ湖 ～定山溪天狗岳からの眺め～

古平町探訪

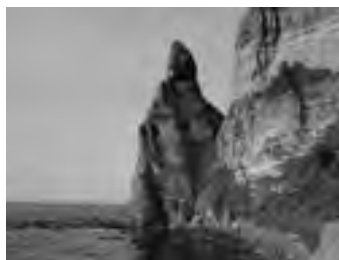
古平町・古平中

秋元 大

古平町は、小樽市から東へ車で約一時間の所にある、人口二、七〇〇人ほどの町です。海産物加工と福祉事業が中心産業となっています。古平町では、今年度役場を新築、今後は道の駅を整備する予定です。そんな古平町の見所を少し御紹介します。

【セタカムイ岩】

セタカムイ岩は、古平町と余市町の境にある、高さ四〇mほどの岩です。セタカムイとは、アイヌ語で「犬の神」という意味をもちます。ラルマキという若い漁師と暮らしていた犬が、嵐の中遭難



して帰らないラルマキを待ち吠え続けて、とうとう岩になった、という言い伝えがあります。他にも二、三の伝承がありますが、いずれも犬が飼い主を待ち、悲しんで吠え続けて岩になった、というものです。現在は道路防

【複合多目的施設 かなえーる】

旧役場庁舎は昭和二年建設と道内で最も古い庁舎でした。防災拠点、行政機能、文化施設の機能を併せもつ複合施設として令和四年五月に稼働しました。道内初の「ゼブレディ」認証を取得し、一般の建物に比べて一次エネルギー消費量を五八%削減した省エネルギー性能の高い建物となっています。



災害時に対応し、耐震性に優れ、非常電源や太陽光発電で七二時間分の電力を確保するなど、災害時の対策本部兼避難施設となります。館内は多目的ホールや和室、視聴覚室、調理実習室、図書館などを備えた、町民が自由に利用できる文化施設でもあります。ふんだんに道産木材を活用し、明るく落ち着いた雰囲気になっています。図書館の壁の柱には、町内の幼稚園・中学生が描いた直径一〇cmの絵を一八六か所に埋め込んで、より親しみをもって利用できるようになっていきます。

【吉田一穂記念碑】

町内数か所に歌碑や記念碑がある吉田一穂は、上磯郡木古内町に一八九八年に生まれました。一九〇五年に古平町に移住し、生活しました。後に早稲田大学高等予科文科に入学し、詩人、作家として創作活動をはじめ

ます。北原白秋らに教えを請い、一九二六年には金子光靖らと日本詩人会を設立するなどしました。幼少期を過ごした古平を「白鳥古丹」と呼び、こよなく愛しました。原点は北海道、そして古平にあり、「極北の詩人」と呼ばれました。一九七三年没。



【琴平神社神輿渡行列】

一八六五年、箱館奉行所に願ひ出、翌年京都から大物主神の御神体を下附され丸山地区に建立されました。七月の本祭りには神輿渡行列が行われますが、神輿の先導として猿田彦が歩きます。神輿渡御を終えて御旅所へ宮入りする際には、篝火の炎の中を三度ずつ火渡りをする清めの神事があります。この神事が残っているのは道内でも非常に珍しいとのこと。



四季折々、豊かな海産物が水揚げされる古平町。ぜひ足を運んでいただき、ゆつくりと町内の魅力を堪能してください。

子育て平和都市宣言

稚内市・稚内南中

和田 浩

【シンボルマーク】

「稚内の全ての子供たちが健やかに成長して欲しい」「命と平和の尊さがわかる大人になつて欲しい」「稚内が、そして世界が平和であつて欲しい」

一九八三年、稚内市長さんを先頭に、大人や子供の代表が連名で手塚さんに手紙を書きました。すると、熱意というのは伝わるもので、代表が東京へ行き、趣旨の説明とお願いをする機会を頂きました。



こうして、平和の象徴のハトをバックに、手塚ワールドの主力選手が勢揃いする稚内の「子育て平和運動」のシンボルマークを、マンガの神様「手塚治虫先生」に描いていただきました。

【子育ての願いをひとつに】

一九七八年ごろ、稚内の子供たちの中にも非行の芽が生まれ広がりました。

このことをみんなが心配しているときに「稚内市民みんなで、非行から子供たちを守ろう」と市民団体の集いが何回も何回も開かれ、市民一人一人がわが子と近所の子供の生活ぶりを真剣に考え合うようになりました。

「稚内の未来を担う子供たちを稚内の大人みんなの力で育てよう」「稚内の子供たちは地域の子供たちだ。地域みんなで育てよう」と、たくさんの方の力が合わせが開始されました。

町内会ごとに、お父さん、お母さんが呼びかけ合つて集まり、子供たちの生活の様子を語り合いました。おじいちゃん、おばあちゃんも孫の様子と親の様子をしっかりと語ってくれました。先生方も学校の様子を包み隠さず話しました。稚内市民の一人一人の子育ての心が動き始めました。

【平和な街づくりの力合わせ】

子育ての力合わせが繰り返される中で、子供たちに教える事柄も語られるようになりました。

その一つは『人間の命と平和の尊さ』を大人の力でちゃんと子供たちに教えることでした。「悪いことをしなければいい」「優しく丈夫に育ってくれればいい」「勉強さえできればいい」という願いだけでは子供たちの心が高まらないことに気づき始めます。

ちょうどそのとき、一九八三年九月一日午前三時二六分、稚内市から約一〇〇kmにあるモネロン島上空でニューヨークから出発した大韓航空機がソ連の戦闘機に撃墜される大事件が起きました。二六九人、誰一人として生き残った人はいませんでした。

この事件が、稚内の子供たちを健やかに育てるための大人たちの努力の中身を教えてくれました。

「戦争のない平和な街づくりの中でこそ、人間の幸せが守られる」「平和を守り育てていくのは大人と子供の責任だ」「未来に生きる子供たちに、このことをもつと教えよう」そして「平和と思ひやりの心を引き出そう」・・・大韓航空機事件を繰り返さない、平和な街づくりの思いを誓い合いました。

【子育て平和都市宣言】

稚内市民の子育てでの力合わせを土台にして、今度は平和な街づくりの力合わせが始まりました。この運動の先頭に市長さん、教育長さん、町内会長さんも、PTAの会長さんたちが次々に立ち上がりました。

一九八六年（昭和六十一年）六月七日、稚内市議会は満場一致で『子育て平和都市宣言』を採択し、世界で初めて国の内外に表明したのです。

あれから三十七年が経つ今も、私たちの願いは息づいています。

美しい日本海と

黄金の稲田が広がる「まち」遠別町

遠別町・遠別中

田 谷 典 久



遠別町は、留萌地方の北部に位置し、北は天塩町、南は初山別村につながり、西に日本海を臨み、東に天塩山地が連なる。人口は、昭和三十四年に八、九〇〇人を超えたが、その後、減り始め、現在は二、四四〇人となっている。

【産業の「ミニ北海道」】

産業では農業、林業、漁業、商工業が盛んであり、農林水産商工が揃う産業の「ミニ北海道」と言える「まち」となっている。

農業では、東側にある天塩山地のピッシリ山を源として日本海にそそぐ遠別川



の流域には肥沃な大地が広がり、日本の北限のもち米「はくちようもち」が生産され、特産品となっている。海岸線沿いは泥炭地であるため、畑作や酪農が盛んである。

漁業では、育てる漁業に力を入れ、ホタテの養殖や、サケの稚魚放流が行われている。さらに、日本海は、タコの名産地でもありタコ箱漁業も盛んである。主力であるホタテ養殖は、ホタテ稚貝を放流用として道内四か所のホタテ生産地へと出荷され、成貝は、需要の高い香港などに輸出されている。

【ヒラメオーナー】

遠別町では、漁業に関するイベントとして、平成二十年から毎年六月に「ヒラメ底建網オーナー・in 遠別」が開催されている。船のオーナーに登録すれば、その日に水揚げされたヒラメを山分けする権利を得られるのである。今年は、六月一日から申し込みが開始されたが、即日

完売するほどの人気となった。六月十八日には水揚げが行われ、ヒラメと一緒に網に入ったカレイやホッケなどが山分けされ、全国各地のオーナー八〇人に発送され、喜ばれていた。



【ICTの「まち」】

遠別町のICT化の取組は、地上デジタル放送の開始とともに始まった。当

町は、もともとテレビ放送が受信できない世帯も存在していたことから、平成二十二年に総務省地域通信事業を活用して町全域に光ファイバーを整備し、テレビ放送難視聴の解消を図った。平成二十五年からは、テレビ電話による双方向システムが導入され、町内全世帯が全国瞬時警報システムと自動連動した緊急地震速報や津波・大津波警報を受信できるようになっている。

さらに、教育の分野においても、全国に先駆けて、町内の児童生徒一人一台のタブレット端末が貸与されている。その結果、町内の小中学校ではデジタル教科書等を活用した授業だけでなく、タブレット端末を活用した発表活動なども行われ、児童生徒が文房具の一つとしてスムーズに使える学習環境が整いつつある。

海と大地がもたらす恵みと、最新のICTを生かしながら、新しいまちづくりを進めている遠別町。お近くにお越しの際は、ぜひ足をお運びください。



江差の五月は江戸にもない

「江差町」

江差町・江差北中

皆川 一海

江差町は、北海道の南西部に位置し、北海道文化発祥の地と言われています。

江差町は、江戸時代にはにしん漁と北前船による海上交易で栄え、食料品や衣料品、

調度品や嗜好品、さらに文化や人、技術など、あらゆるものが海を渡ってやって来ました。明治初期以降、北前船がもたらした繁栄の時代は幕を下ろしましたが、当時の風情を今に伝える貴重な建造物や江差追分、姥神大神宮渡御祭など、有形無形問わず多くの文化が息づいています。

平成二十九年四月二十八日、江差町が申請していた「江差の五月は江戸にもない ニシンの繁栄が息づく町」というタイトルのストーリーが「日本遺産」に認定されました。

平成二十九年度は全国から七九のストーリー申請があり、このうち江差町を含む一七のストーリーが認定されました。北海道では



第一号の認定です。では、ここからは江差の歴史と文化を探っていきます。

いにしえ街道にしんで栄えた町並み再現

「江差の五月は江戸にもない」と言われた

ほど、かつて江差はにしん漁や檜材貿易でたいそう栄えた町でした。海岸線沿いの下町には、当時の趣を感じさせる商家や社寺、問屋蔵が今も多く残されています。明治期から歴史をもつ壱番蔵（旧函館米穀土蔵）を拠点として、まちを東西に走る「いにしえ街道」では昔ながらの町並みを再現しています。



旧檜山爾志郡役所「洋風建築も存在

旧檜山爾志郡役所は「いにしえ街道」に沿った高台に建てられた西洋建築です。明治二十年（一八八七）、北海道庁の出先機関である郡役所と警察署の業務を行う建物として建てられました。現在



は江差町郷土資料館として利用されており、北海道の有形文化財の指定を受けています。建物近くには、座礁した開陽丸を見て嘆いた土方歳三がこぶしを叩きつけたといわれる「土方歳三嘆きの松」があります。

江差追分「江差のソウル

追分節は、江戸時代から信州中仙道で唄われた馬子唄がルーツです。一種のはやり唄として全国各地に広まり、越後に伝わったものは船歌として船頭たちに唄われるようになって、今から二〇〇有余年ほど前に北前船によって江差に運ばれてきたといわれています。さらに江差では、座頭佐之市がケンリョウ節と追分を融合させて独特の音調をもつ江差追分を誕生させたといわれ、それが多くの唄い手によって磨かれ、唄いつがれてきたのです。「江差追分」は北国の厳しい自然と生活の中から生まれた人間讃歌なのです。是非江差の空気に触れてみてください。



北海道の玄関口 苫小牧市 魅力あふれる歴史と風土

苫小牧市・啓北中

宮 嶋 隆 行

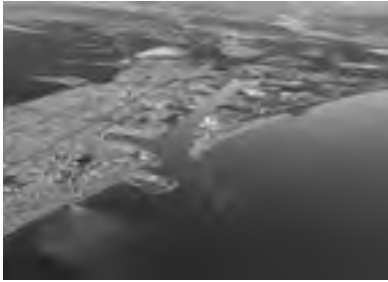
【はじめに】

苫小牧市は北海道南西部に位置し、札幌市からは車で一時間弱という立地である。また、特定重要港湾である苫小牧港からは全国各地へのフェリーが出航し、新千歳空港からも程近いなど、まさに北海道の玄関口として栄え、今では人口約一七万人と、札幌市、旭川市、函館市に次ぐ、北海道第四位の都市に発展した。

【苫小牧の歴史】

アイヌ語の「マコマイ」（奥に入っていく川）が語源とされており、さらに「沼」の意味をもつ「ト」をつけて「ト・マコマイ」と呼ばれるようになったと言われている。

古くから製紙業・自動車関連工業などの工業都市として発展してきた。町の発展に伴い、一九五〇年代には約三万人だった人口は右肩上がりに増加していった。



また、物流の拠点として港湾が発達し、昭和三十八年に世界初の内陸掘込式港湾として整備された。さらに、苫小牧東部地区は、日本最大の産業地域として開発が進み、現在、豊かな自然と快適な都市機能の共存を目指す産・学・住・遊の複合開発地域となっている。

【スポーツ都市 苫小牧】

太平洋に面した

苫小牧市は、夏は涼しく冬は比較的温暖で比較的降雪が少ない。そのため、冬場のスポーツと言えば、昔からスキーではなくスケートが主流であった。各小中学校では、毎年教師や保護者による手作りのスケートリンクで子供たちが歓声を上げていたが、少子化、温暖化などの理由から、今では学校のリンクはほぼ姿を消している。しかし、アイスホッケーはまだまだ盛んであり、市内三か所のスケートリンクでは、小学校低学年の児童からレッドイーグルス北海道の選手まで幅広い層がアイスホッケーに汗を流している。



スポーツ都市を宣言している苫小牧市のもう一つの大きな自慢は、二〇〇四年の駒大苫小牧高校甲子園初優勝だ。決勝戦は家でテレビを見た人が多く、視聴率は五〇%ほどだったそう。その時間、私は外勤で車を運転していたが、交通量は確かに少なかったことを今でも覚えている。初めて深紅の優勝旗が北海道に渡ったことで、「苫小牧」の知名度は

全国区となった。

【自然豊かな町 苫小牧】

苫小牧市は活火山である樽前山の裾野に広がる平坦な土地である。樽前山は高山植物の宝庫と言われ、全国の登山者からも人気の山だ。また、国内四番目のラムサール条約登録湿地に認定されたウトナイ湖周辺では四季に応じた野鳥を観察することができ、今までに二六〇種類以上の野鳥が観察されている。さらに、ウトナイ湖周辺に広がる勇払原野は日本唯一のハスカップ群生地であり、苫小牧市の名産品にもなっている。また、苫小牧の近海では豊富な魚種が水揚げされ、特にホッキ貝の漁獲量は日本一となっている。

これらの苫小牧の自然や名産品にちなんだゆるキャラが「とまチョップ」だ。市内の小中学校が総合的な学習の時間に行った「子ども議会」からの提言で誕生したこのキャラクターは市民に広く親しまれている。



【おわりに】

この度、「風土記」の原稿依頼を承ったことで、教師としての自分を育ててくれた町「苫小牧」の魅力を改めて深く知ることができました。最後までお読みいただき、ありがとうございました。ぜひ苫小牧にお越しください。

花と緑とアートの村 中札内

中札内村・中札内中

山下 英男

中札内村は、十勝平野の南西部に位置し、村の中央を流れる清流札内川と日高山脈の大自然に囲まれた美しく豊かな地域である。日高山脈のすそに広がる農村地帯で、平野部は耕地防風林で囲まれ十勝の自然を象徴している。夏季は二〇度前後、冬季はマイナス一〇度前後と寒暖の差が激しいのが特色であり、北海道の中でもドライゾーンであるため、特に冬には降雨、降雪量が少なく、「十勝晴れ」といわれるカラリと晴れた日が続く。



【中札内村の特産品は、

「コクワワイン」と「そのままえだ豆」】

コクワワインは、サルナシと呼ばれる植物の実で、ヒグマが好んで食べることでも知られるコクワを使ったワインである。コクワは「幻の果物」と言われるほど希少であり、中

札内ならではのワインで、豊かな香りとすっきりとした酸味が特徴で飲みやすい味わいに仕上がっている。そのままえだ豆は、中札内村特産の「大袖の舞大豆」を使用した枝豆で、採れたてを瞬間冷凍し、味わいを閉じ込める製法によってその名のとおり「そのまま」の美味しさである。この枝豆は高い評価を獲得しており、第三九回日本農業賞特別賞、第四五回日本農業賞大賞、北のブランド金賞など、数々の賞を受賞した。

【ピョウタンの滝】



に人気のスポットである。

【六花の森】

中札内村から車で一〇分ほどの位置に平成十九年にオープンした「六花の森」は、雄大な日高山脈を背景に、樹齢一〇〇年のニレの木が育ち、清らかな小川が流れる豊かな自然環境の中にあり、



札内川の清流を集めて一〇mの落差で豪快に流れ落ちる「ピョウタンの滝」は、札内川園地の入口、札内川にかかる虹大橋の前に広がり、滝の水しぶきや豊富な自然林から発生されるマイナスイオンがあふれており、雄大な自然を求める観光客

森の中では、六花亭製菓の花柄包装紙でお馴染みの草花が育てられている。

六花の森には、草花のスケッチや北海道の山々を描いた作品を展示する「坂本直行記念館」、「花柄包装紙館」などもある。

【スノーアートヴィレッジなかさつない】



中札内村の美しい冬を思いっきり楽しむイベントの一つである。メインとなるのは、中札内村在住スノーアーティストが大雪原に描く壮大なスノーアートを熱気球や特設やぐらから見る鑑賞であり、上空から眺める中札内

村の美しい大雪原は圧巻である。

他にも、雪上でダンスイベント、スノーモービル、スノーアート体験など、中札内村の美しい冬とふわふわの雪をとことん楽しむプログラムがある。

中札内村には、ピョウタンの滝を中心とした札内川園地、柏林の中の中札内美術村、花に囲まれた六花の森、レストランや直売所・開拓記念館などがある道の駅「なかさつない」など、楽しいところ。ろが沢山あり、疲れた心と身体を癒やして、のんびり過ごすなら「花と緑とアートの村」中札内村がお勧めである。



潮風かおる 牛乳^{ちち}の里 興部町



興部町・興部中

上野弘一

興部町の開基は、明治二十二年、荻藤野家が、沙留漁場支配人金沢岩松と、総船頭垣下若松を沙留浜に定住越冬させたことに始まり、このお二人を開拓の祖としている。冬は流水に覆われ、厳寒の未開地で、不屈不撓の精神でわが町の礎が築かれ、平成三十年には、開基一二〇年を迎えた。

この平成三十年には、町内に二校となっていた興部中学校と沙留中学校を統合し、新たに興部中学校を開校した。

興部町はオホーツク管内北部に位置し、北に雄武町を挟んで宗谷管内へ、西は西興部村を挟んで上川管内へとつながる交通の要所である。かつては国鉄名寄本線（平成元年廃線）と、支線となる興浜南線（昭和六十年廃線）の駅を擁し、鉄路による人流と物流、海と牧野の恵みとともに発展してきた。



【基幹産業は漁業と酪農業】

興部町の第一歩を踏み出した沙留港を拠点

とする沙留漁業協同組合は、春の海明けとともに始まる毛ガニ漁、ホタテ漁、夏場のウニ、コンブ漁、マス網漁、そして、秋の鮭定置網漁と、オホーツク海の身が引き締まった美味な魚介が「サルレイ」ブランドとして人気を博す。

また、酪農業においては、オホーツク海をバックに広がる広大な牧草地で、土づくり、餌づくり、そして、搾乳と商品化までの研究・開発が進められ、有機牛乳、アイスクリーム、チーズ、ハム・ベーコン・ウインナーと、「おこっぺ」ブランドで人気を集めている。



【ふるさとを味わう学校給食】

町内の小・中学校で提供される学校給食では、季節に応じた故郷の食材や製品が提供される。ホタテやサケ・マス料理、牛乳、アイスクリーム。町内の給食では毎日、「おこっぺ有機牛乳」である。また、年三回の「興部アイス」は、生徒も教職員も楽しみにし、味わっている。

【新たな町づくりへの情熱】

興部町では、大阪大学との連携・協働で、酪農業で発生するし尿による燃料化、バイオマス事業の研究・開発に取り組んでいる。その経緯やバイオマス事業の構想・内容は、町内の小・中学校の総合的な学習の時間において、施設見学や町担当者の出前授業などがプログラムされて学んでいる。今年度からは、町としてゼロカーボンへの学習、啓発に取り組んでいる。

また、北海道大学農学部と連携・協働した、子供たち（大人も含め）への体験活動を通じた食育や産業学習が行われている。

「おこっぺ街中マルシェ」は町民はもとより、近隣町村からも人が集まる、人気のイベントである。



【校歌に謳われるふるさと興部町】

本校の校歌は、本町出身の同級生お二人によって作詞・作曲された。一番は「潮風かおる 春涛（しゅんとう）のオホーツク」から、二番は「牧草（まきくさ）かおる 北の丘ロールベール」から始まる。

本校で学ぶ生徒たちが、毎日目にするごく当たり前のふるさとの風景である。この校歌を歌い継ぎながら、ふるさとへの思いを確かにし、ふるさとの次代の創り手として、心豊かに、たくましく成長していくことを願う。

これまでも これからも…
札幌市

市制一〇〇周年の中で

札幌市・陵北中

大田 利幸

【札幌市制一〇〇周年】

令和四年（二〇二二年）八月一日に札幌市は市制が施行されてから一〇〇周年の節目を迎える。

一〇〇年前の大正十一年（一九二二年）八月一日、札幌はそれまでの札幌区から札幌市になり、市としてスタートをきった。当時は人口が約一二万七、〇〇〇人、戸数は約二万三、〇〇〇戸、面積は約二四平方kmであつた。

その後一〇〇年をかけて街は大きく発展し、現在の札幌市は政令指定都市の中では四番目に多い人口約一九七万人、世帯数約九八万世帯、面積約一、一二平方km、一〇区からなる大都市に発展し、「全国住みたい街ランキング二〇二二」では見事二位となる魅力ある街となった。

札幌市の見どころ、名所は挙げれば枚挙にいとまがないのだが、今回は私が勤務する学校近辺から紹介したい。

本校校区は中央区、西区にまたがっている。立地場所の二十四軒地区は明治四年に移住が行われた際、その移住戸数が二十四軒だったことからそのまま地名となっている。

昭和三十年代後半から四十年代にかけて札幌の都市化が進んだ中でも畑地がそのままで、都市近郊の農業地としての役割を担っていたと言われる。しかし、その後は徐々に住宅地へと変化して、中央区側と同様に多くのマンション等が立地する都市型住宅街になってきている。近郊には札幌市中央卸売市場と札幌競馬場があり、ひととき目立つ存在である。

【札幌市中央卸売市場】

一九五九年に全国で一七番目の中央卸売市場として開設された。敷地面積は約一三万平方mで札幌ドームの建築面積の約二・五倍。道内の拠点市場として札幌圏約二三〇万人の食を支えるとともに、北海道という大きな生産地の市場として生鮮食品を供給する重要な役割を担っている。



この中央卸売市場が開設された理由としては、昭和二十年代終わりの札幌市の物価高が挙げられる。全国でも札幌の物価がかなり高く、その解決策として需要と供給を円滑にし、公正な取引を実現して物価高問題を解決する目論見があつた。総工費約五億円をかけ、全道の生鮮食品の価格を決める標準市場としての役割を期待されて開設されたのである。

残念ながら一般の方が市場内に入場して買い物することはできないが、見学は可能である（要事前予約）。取引の様子や市場の活気を体感できるせり時間の見学や、展示室・資

料室を見ることが出来る。

もし買い物をしたり新鮮な料理を食べたりしたい場合には、すぐ隣にある札幌市中央卸売市場外市場を利用することができる。約六〇店舗が連なり、手ごろな価格で旬の味覚が揃っているのも、機会があればぜひ一度御利用いただきたい。

【札幌競馬場】

延床面積約四万二、〇〇〇平方mの中央競馬の競馬場である。

一九〇七年（明治四十年）十月にこの場所で開催された。起源は明治初期に公道で行われた仮設の直線コースに由来していると言われている。二〇一四年七月に観戦スタンドなどを大幅に刷新し現在に至っている。

スタンド二階部分の一二〇mに及ぶテラス席からはコース全体が見渡せる上、札幌の街並みや藻岩山も眺めることができる。その他にも競走馬を間近で見ることができたり、屋外には馬場内に遊具が設置されていたりするので、競馬観戦のみならず、家族で楽しめるレジャー施設でもある。天気の良い休日は大変混雑しているようである（コロナ禍前）。

札幌市の広域避難場所にも指定されており、大規模火災の発生時には避難場所としても利用されているし、学校関係の見学場所としても活用されている。ぜひ一度訪れてほしい場所である。



文芸

最近思うこと

石狩市・花川北中

野口俊之

石狩市校長会の特色ある活動の一つにスポーツ研修がある。スポーツ研修とは野球やサッカー、バスケットボールなどのプロスポーツの試合観戦から自らの視野を広げ、学びを深める機会である。これまでコロナ禍で計画立案が見送られていたこの研修が、今年三年ぶりに復活した。

研修テーマを北海道日本ハムファイターズの監督「ビッグボスからリーダーの在り方を学ぶ」とし、七月二十三日の千葉ロッテ戦をスポーツ研修の日として準備を進めた。ビッグボスの立ち居振る舞いが常時見える札幌ドームの一塁側内野指定席を確保した頃、首位打者獲得に向けて独走していた松本選手とエース上沢投手が骨折で長期離脱、さらにビッグボス以下、主力選手・首脳陣・スタッフが次々とコロナに感染するなどピンチのチーム状況に私の試合への関心はすっかりと薄れた。しかし当日、私の先入観は見事に裏切られ、野球の面白さが堪能できるスリリングな試合展開に充実感を覚えながら家路に向かった。途中、奇妙なことに「固定観念は悪、先入観は罪」とぼやいている野村克也氏の姿が目についた。

科学技術の進歩とコロナ禍が重なり、生活様式の急激な変化を身近に感じる機会と頻繁に出会う。環境の変化や時間の流れは人の価値観を変容させ、新たな文化を構築する。最近「力の強い者でも頭のいい者でもなく、変化に最も適応できる者が生き残る」という言葉にリアリティーを強く感じる。生活様式の急激な変化は固定観念や先入観のない柔軟な思考が必要不可欠になる時代の到来を確実に暗示している。

私の学生時代の常識が非常識として扱われることに戸惑いや驚くことがしばしばある。しかし、時間の流れの速さを嘆いているだけでは私の老化は加速するばかりだ。時代の流れと上手に付き合えるように日々のアップデートとメンテナンスを怠らないこと、そしてしなやかな強さを身につけ、変化を楽しみながら過ごしていきたいと思うこの頃である。

永遠のトラベラーに敬意を払う

喜茂別町・喜茂別中

午来睦美

松浦武四郎を大先輩と仰ぎ、旅を住处としている私は、しばらくの間自宅ですと過ごしていたが、最近少しずつ旅を再開した。

「チョコちゃん」が言っていた「旅は人間のサガ」らしい。人間は、旅をすることによって、好奇心と智慧と情報ネットワークをはたかせ、大きな挑戦をしたり困難に立ち向かったりしながら発展してきたそう。

さて、我が師である松浦先輩は、三重県松阪市の出身である。現在も松阪市小野江町に生家が保存されている（徒歩数分のところに松浦武四郎記念館もある）。この松浦先輩の生家は、まさしく旧伊勢街道沿いに立地している。江戸時代からおかげ参りで諸国から人が集まったこの伊勢街道は情報のつぼであった。ここで交わされる情報や、当時の観光ガイドブック「名所図会」が松浦先輩の飽くなく冒険心を養ったと言われている。この名所図会に掲載されているところに行きたいと、松浦先輩は二度家出を試みている。一度目は江戸で発見され、連れ戻されることとなった。その時生家の二〇〇m手前の雲出川の向こう側の船着き場で「家の者たちの様子はどうか」と家人に尋ねたという。今は橋が架けられて道路で渡ることができるのであるが、橋のたもとに立つと、当時の様子が想像できる。

このあと松浦先輩は、二度目の家出を経て、御存知のとおり北海道へ渡ることとなる。道内を徒歩で測量し、全ての山と川の名前を網羅した地図「東西蝦夷山川地理取調図」を完成させたことにも驚愕するが、先輩が生涯を通して踏破した都道府県は四六。当時、沖縄は日本ではなかったから全都道府県である。亡くなる前年には富士登山。

もう旅ができないと悟ったときにこぼした言葉は、「（大好物の）炒り豆腐いっぱい食えなくなるな」

私もビールがたらふく飲めなくなるまで旅に身を投じる所存である。

「おたる潮まつり」に思う

小樽市・西陵中

吉岡 智 尋

小樽市民は、昔から祭り好きなのかもしれません。市内には、約一六の神社があり、毎年五月中旬から各神社で例大祭が行われます。なかでも水天宮神社、龍宮神社、住吉神社の例大祭は小樽三大祭りと呼ばれています。住吉神社例大祭は毎年七月十四日から三日間行われ、通称「小樽祭り」と呼ばれ、ひととき多くの市民で賑わいます。

一方で、地域の活性化を目的に作られた「おたる潮まつり」は、毎年七月最終週の金・土・日曜日に行われます。「おたる潮まつり」は、それまで実施されてきた「港まつり」「競争花火大会」「北海道工業品共進会」「見本市」などを統合して一九五九年より開催された「みなと小樽商工観光まつり」が前身となっています。そして、一九六七年に第三埠頭を会場として、記念すべき第一回が開催されることとなったのです。最終日に行われる花火大会も盛り上がりますが、やはりメインイベントは「潮ねりこみ」です。

「潮ねりこみ」は、小樽市内外の企業や団体などで梯団（チーム）を結成し、市街地を「おたる潮音頭」「潮おどり唄」を踊りながら練り歩きます。故三波春夫氏が歌う「ドンドコザブーンだ ドンザブーン」でお馴染みの「おたる潮音頭」は私も幼い頃から聞いて育ったため、学生の頃は曲が流れる度に「わくわく」感が増したものです。数年前から市内の学校では、希望者を募って各校で梯団を作り、参加しています。

今年度、三年ぶりに「潮まつり」が規模を縮小して開催されました。本校も稲穂小学校とともに梯団を作り、お揃いのＴシャツを着て、踊り、楽しむことができました。これからも、子供たちには、感染予防に十分配慮しながらいろいろな経験をさせてあげたいと思います。

最後になりますが、例年、潮ねりこみは、申し込みなしでも参加できる企画がごさいます。皆様のお越しと参加をお待ちしております。

たかが家庭菜園、されど家庭菜園

上川町・上川中

輕部 恭子

現任校に赴任し、管理職になってから初の庭・畑付き一戸建て住まいとなった。公宅には、玄関横に三坪弱、裏のベランダ前に五坪強の庭・畑がある。ここしばらくの歴代校長は単身赴任だったためか、玄関横の庭は除草剤により雑草も育たない状況、裏の畑はスギナ畑と化していた。コロナ禍で行動制限もあったことから、一念発起して裏の畑で家庭菜園を始めた。一年目は、スギナや雑草、害虫、カラスと闘いながら、大きな収穫を得た。家庭菜園の楽しさを知り、二年目も取り組んだ。玄関横の庭の土も雑草が生えるまで復活したので、近隣の家に負けないように草花を植え、町のおもてなし花壇の趣旨に沿うべく努力中である。

家庭菜園に取り組みながら、初任時の管理職が、実家が農家の先輩教員に、「ものを育てる家庭に育った人が教育に携わることはよいことだ」と話していたことを思い出した。当時はその意味がよく分からなかったが、家庭菜園を始めてから、作物を育てることと教育の類似性を強く感じている。日本ハムファイターズの新庄ビッグボスのお父様が、「子育ては植木を育てるのと同じ。一本の木を育てるには、土壌、肥料、日光、水などに気を遣ってやらないといけない。愛情もいるし、あと剪定も必要。土壌が両親としたら、肥料は食事、水は愛情で、日光は環境。そして、剪定はしつけ。剪定はやらないといけないが、やり過ぎるのも問題。枝の剪定にも、切つてよい時期といけない時期がある。褒めることと叱ることの使い分けが子育てには大切だと思います。水（愛情）をやり過ぎて根腐れしますしね」と話している記事があった。

教育・学校経営もまったく同じだと感じている。土づくりの大切さ、次につないでいくことの重要性……。自分だけがよいのではなく、その後も引き継がれるようなよい学校風土・文化に貢献したいと思いが、今日も畑の草取り、害虫・カラスとの闘いを続けている。

コミュニケーション考

旭川市・愛宕中

佐藤 哲雄

秋冷の朝の定番、「今日は寒いね」のあとに皆さんはどんな言葉をつないでいますか。趣味の合う仲良しであれば「こんな日のラウンドはきついね」とか、「今シーズンもいよいよ終わりだね」など、言葉はいくらでも続きます。しかし、特に深い関係でもない相手に対する言葉を選ぶのは結構大変なことです。

毎朝、学校に到着し、「おはようございます」「今日は寒いね」と先生方に言葉を掛けますが、その挨拶がきっかけとなって会話がはずむことは稀です。どうやら、挨拶が「雑談」まで発展するためには、もう一つの話題が必要になるようです。

思いを巡らしてみると、雑談の中での話題は、ほぼ天気と食事のような気がします。今日は晴れなのか、雨なのか、寒いのか、暑いのかに依じてそれに見合った季節の食べ物が話題になることがほとんどです。

そのように考えると、特別な関係ではない人とのコミュニケーションにおける「天気」と「食事」の力は絶大だと改めて実感できます。

さて、話を戻して、挨拶に続くもう一つの話題をどうしたら……：試しに、「寒いから〇〇を食べたいね」と続けたらどうだろう。

「ああ、〇〇スキです」って言うてくれれば大成功。「〇〇おいしいよね」と会話はいくらでも発展します。でも、そんな風にうまくいくことばかりではありません。「そうですね」と低い声で返されたら会話は終了。コミュニケーションとしては成立しませんが、何も情報がない場合は〇〇に何を選ぶのかはまさに賭けみたいなものです。

コミュニケーションが成立するかどうかの必要条件はなんといっても相手に関する情報です。少しでも情報があれば、プラスワンの話題も比較的容易です。話しやすい人と話にくい人がいるのはその情報量の差が影響しているのだと思います。

多くの先生方と雑談を重ねることでプラスワンの情報を集めたい。ただ、多忙な先生方にどのようなタイミングで話しかけられるかが重要なポイントになりそうです。

浪漫はあるのだろうか

礼文町・香深中

大谷 智昭

「浪漫ドクター キムサプ」という韓国のドラマがとても良い。天才ドクターが理想の医療をめざし、様々な圧力に立ち向かいながら若手を育成するドラマである。最終回で、キムサプが「浪漫とは誰もあると知りながら、ないと信じ、ないと信じながら、守ってほしいと願う価値」と話す。さらに「我々が、なぜ存在するのかをあきらめずに考える。考えることをやめたとき、大事にしている浪漫もなくなる」と話し、ドラマが終わる。ドラマを振り返り、ふと考える。自分が関わっている教育の世界に浪漫はあるのだろうか？

今、校長の力量として問われることは、ほとんどがマネジメントの力。学校運営のために重要なファクターであるのは理解できるが、その言葉に迫られ、自分が抱いていた教育への理想を忘れそうになることがある。

思い返せば、教育者としての自分の理想は「みんなが楽しく暮らす平和な社会の実現」だ。キムサプの言葉を借りると、まさに浪漫という言葉にぴったり当てはまると感じる。ただし、世界の状況をみると、ロシアによるウクライナ侵攻や様々な地域での紛争、国家間や個人間での貧富の差など、様々な課題があり平和な社会とはほど遠い状況だ。そのときにキムサプの続きの言葉を思い出す。浪漫を実現していくためにあきらめずに考え、努力を続けなければならない。そして、たどり着いた答えは、まずは自分が関わっている先生方や生徒たちが、それぞれの理想を求めて、くじけることなく努力ができる状況をつくることだと。つまり、校長として自分がやるべきことは、一人一人がもつ理想を守っていかうとする気構えとそのために必要なマネジメントを実施していくことだ。この積み重ねが、いつしか自分がもつ浪漫を実現させてくれるという希望につながり、毎日の努力を続ける原動力になっている。

考えると、今、浪漫が最も必要なのは教育の世界なのかもしれない。

極小規模校の思い出から

苫前町・古丹別中

西 條 直 志

今年度で七六年の歴史に幕を下ろす本校が、校長採用により赴任した最初の学校となった。

苫前町での勤務は二度目であり、一度目は平成十六年に閉校した力屋小学校に一般教諭として六年間勤務した。この学校でも閉校に立ち会っており、不思議な縁を感じているところである。当時自分は三〇代であり、大規模校からいわゆる極小規模校を希望しての異動であった。諸先輩方が時折する複式授業での「わたり」や「ずらし」といった話がよく理解できず、自分も早く経験しておくべきだと考えたからだ。

今にして思えば、あらゆる指導が未熟であり、当時の教え子たちには申し訳ない気持ち強いが、豊かな自然と協力的な保護者・地域の方のおかげで、充実した日々を過ごすことができた。学社融合事業が盛んで、地引き網体験や鮭とば作り、裏山での森林教室、和風作りや和太鼓など、数多くの体験をさせていただいた。学校裏に田んぼを作って稲作をしたこと、春の遠足で漁港でチ力釣りをしたこと、防波堤に大きな二枚の絵を描いたこと、運動会で一輪車を子供と一緒に特訓し披露したことなど、現在の教育課程では、難しいと思われる教育活動を展開していた。当然保護者・児童との関わりも深く、保護者とは学芸会の劇の小道具を明け方までかけて作ったり、お祭りの出店で焼き鳥を焼いたり、飲み明かししたりした。五年間連続で、同じ児童の担任を務めるということも経験した。教務・研究を初めて担当するなど、自分のキャリアにとっても、重要な期間であった。校舎はかなり劣化しているが現存しており、その前の道路を通るときには、懐かしさと一抹の寂しさを感じる。

今回は校長の立場での閉校であり、また前回とは異なる心境である。しかし、どのような立場にあっても、その地で教育に携わる機会をいただいた感謝の気持ちと、学校に対する地域の方の思いは忘れずにいたい。

第一感情を大切に

せたな町・瀬棚中

米 田 昌

『怒らない技術』（フオレスト出版 嶋津良智 著）という本に出会いました。その本に書かれていた一節が、標記の「第一感情を大切に」です。そこには、次のような著者の体験談がつけられていました。

奥さん（以後「彼女」と表現します）と付き合っていた頃の出来事だそうです。デートの約束をしたのですが、彼女が二時間もの大遅刻をしました。彼女の家に電話をしてもつながらず、携帯電話も一般的でなかったため連絡の取りようもなく、待つしかありませんでした。その待っている間には、「頭に來たから帰っちゃおう」とか「來たら怒鳴り散らしてやろう」という気持ちも浮かんできました。でも、「ちよつと待てよ。今怒っている気持ちは本物ではない。会いたいのに出会えないから怒っているんだ。本物の気持ちは、会いたいんだ。まして、遅れて悪いと思っているのは彼女だろう」と思ったそうです。そして、彼女と会ったときに、怒りをおさえて、次のように言ったそうです。

「今日はもう会えないと思ったよ。無事会えて本当に良かった。…」
彼女はとても感激してくれたそうです。

なんとお洒落な対応でしょう。この本物の気持ちを「第一感情」と言うそうです。そして、本物の気持ちを追い越して、イライラしたり怒鳴ったりしてしまう気持ちを「第二感情」と言うそうです。なるほど！困った場面では、第一感情を伝えるといいですね。簡単簡単！

先日、マインドコントロールの研修があり、毎回係活動に遅刻し自分が迷惑している友達への声がけを考える場面がありました。そのとき浮かんできた第一感情は、「毎回遅れてくるから困っているんだけど！」うん、これじゃ相手に届かないな。…。「一緒に仕事したいんだけど間に合うように来れる？」これならまあまあ？？？。

私が、お洒落に第一感情を伝えるには、まだ訓練が必要なようです。

後を継ぐ人たちへ

七飯町・七飯中

加賀 重仁

学校が変わっていく様を見られることは実に楽しいものです。もちろん、その実感を味わうためには周到な準備と産みの苦しみも同時に味わわなければならないのですが。

一学期間をかけて教職員総出で「資質・能力」について学習し、校区小学校の協力も得て、学校が育成すべき資質・能力を産み出しました。教職員が学校で教育課程を学ぶ機会、私たちの大方の仕事の根拠となる学習指導要領を学ぶ機会が多くない中（自分だけの経験でしょうか）、学校における業務そのものが教職員の学びにつながるような学校経営・学校運営が必要であると考えています。

過日開催された本校の学校祭では教職員が見事に資質・能力の育成に向けて創意工夫を凝らし大きな成果が得られました。資質・能力が明確になると生徒の自己目標が変わり、取組のプロセスを通じてその自己目標が変化しつづけ（マネジメントされ）、最後は反省文に「〇〇ができた！」「〇〇が分かった!!」と表記されるようになりました。生徒も教職員も自分たちの成長を実感できた有意義な取組になったと自負しています。

何より若い人たちに、学校に目を向けてもらうためには「学校は最高だぜ！、教育は最高だぜ！」ということを感じてもらう必要があります。かつて私が若い頃は先輩から「教育はロマン」と教えられました。

校長が代わっても楽しい学校は変わらない、教育の質がより高まる、つまり「土台」に立って持続可能な学校が創られる。そのためにも校長会が時流を捉え結束し、学ぶ組織として生まれ変わることも必要です。微力ながら残された時間を精一杯努力する所存です。

文芸などという高尚な文章は苦手ですので、身近なところの紹介から本文を書かせていただきました。

日々学び、日々楽し

函館市・鱒川小中

須田 秀樹

教員生活初の中学校勤務が校長採用。初めてづくしのスタートに戸惑う日々。しかも小中学校である。校長会も小中それぞれの所属となり、一回目の研修会は、同じ日の午前と午後。先輩の校長先生方に温かくお声かけいただきながらも、新入会員挨拶というドキドキもそれぞれ味わった。モーニングのカフスに悪戦苦闘の入学式。小学一年生と中学一年生それぞれにお祝いの言葉を伝える。小学生にはランドセル、中学生には制服の話。何もかもダブルである。

少しだけ慣れた頃、全校集会「校長先生のお話」。六歳から一五歳の目がこちらを向く。どこに焦点を合わせたらいいのだろう。伝えたいことは一つだが、全校児童生徒の心に響かせるには工夫が必要。この悩みは未だに続いている。だから、しょっちゅうパワーポイントに頼っている。

もう少し慣れた頃、重点教育目標を変えた。全校児童生徒にとって、学校生活全ての「合言葉」になるものにすべきと考えたからだ。三つのがんばりめあて「自立」「貢献」「語先後礼」。小学生には難しいかとも思ったが、いつものパワポで乗り切った。まだ漢字も習っていない小学一年生が、私の顔を見て「自立、貢献、語先後礼」と言ってくる。

中体連、文化祭、高校の校長先生方との出会いと入選業務。初体験は続いたが、コロナ禍の中での教育活動の推進に向け、校長としての判断も求められた。日々試され、鍛えられている思いであった。心の支えは校長会のつながり。御助言いただいた先輩方には感謝でいっぱいである。

着任して三年目を迎えたが、専門性の高い中学校の授業に加え、小中学校のメリットを活かした小学校への乗り入れ授業の参観は、本当に楽しいし、勉強になる。次の勤務先は小中どちらか分らないが、目からうろこで走ってきた本校での経験を活かし、学校間連携や教科担任制、副担任制などを有効に活用しながら、率先垂範していく所存である。

「農業法人」に学ぶ

南幌町・南幌中

小 泉 寧

コロナ禍によつて外部の方々と関わる行事ができなくなっていました。二年ぶりに、一年生の総合的な学習の時間で、「農業体験」ができるようになりました。南幌町は都市近郊にある町、町の基幹産業が農業でありながらも、子供たちの家庭は、会社員・公務員が多い状況です。日頃農業と関わることの少ない子供たちにとっては、今回の農業体験は大変貴重な機会となりました。活動内容としては、収穫作業や出荷作業、雑草刈り等をさせていただきました。広大な敷地の一面のネギ畑やキャベツ畑、普段スーパードで見かけることのない収穫直後の長いネギに驚いたり、季節外れに道外へ出荷される巨大なスイカの箱詰め作業や農作物を丁寧に扱い選別する姿など、農家さんの商品への心配りを感じたり、普段見ることのない場面への驚き・発見があったりしたことと思います。また、雑草刈りでは、隣の人と効率よく隙間なく工夫して鋏を使うなど、インターネットには書いていない作業のコツや苦勞など、いろいろな知識も含めて、実際に体験する中で、大きな学びの機会となりました。生きたキャリア教育である、と思つていきます。

今回は「農業法人」の方々に御協力をいただきました。「農業法人」とは数件の農家さんが集まって会社のような組織での経営。個人では安定しないことも集団で協力して法人を作ることから、農地を広げ、協力的体制を組むことで、機械の融通や休暇の融通もできる・・・、など様々な法人の良さが聞けました。過剰な労働を軽減し効率化を目指した対応、成果も出ており、大変良いシステムに思えました。学校における働き方改革にも通じる考えではないか、と思い、逆に不都合なことはないのかと尋ねてみたところ、「安定するまでには数年かかったし、それに一人でやつてたほうが気楽さ。調整って気を遣うよね」、との返答。

なるほど。「協力関係」は、確かに大きな力だけれども、基本は人と人との人間関係の構築が重要なのだ、と改めて考えさせられました。と同時に、学習指導要領の「目指す生徒の資質・能力」や「納得解」という言葉が思い出されました。私自身も学びにつながる、大事な農業体験となりました。

夏の甲子園、二人の監督から学ぶ個別最適な学び

登別市・鷺別中

鈴 木 恭 朗

豊富なデータを活用し、選手個々にピッタリとはまる指導をトレーニングコーチと共同で考え、時速一四〇kmのピッチャーを二桁人数育成するまでチーム力を高めた仙台育英高校硬式野球部の須江監督。深紅の大優勝旗が、見事、白河の関を超える歴史的快挙を成し遂げた。一方、九人に満たない部員を増やすため、電話作戦や家庭訪問を行い、強くなるためには妥協しない練習が必要だと部員に説き、目標達成のために必要な練習をとことんやり抜き、全国の強豪校の仲間入りを果たした下関国際高校の坂原監督。高校野球界の絶対的王者、大阪桐蔭高校を撃破し、一気に注目を浴びた。

私は、この二人の選手育成方法は、「個別最適な学び」の考え方に一致するのではないかと考える。一人一人に合った教材・学習時間・方法の柔軟な提供と最適な学びを自力で計画・実行できる子供の育成の方針はまさに、先述した二人の監督の選手育成方法と合致しているのではないだろうか。一律指導で成果を期待する教育方法から、個性や能力に応じて、一人一人のベストを追求する令和の日本型教育のコンセプトを、この二人の監督はすでに取り入れて選手育成に当たっていたのだ。

教師の役割もティーチからコーチとかファシリテイトへと変化が求められている。一人一台の端末に無限の可能性を求めることには限度があると思うが、「このように端末を使えば、あなたの学びをもっと深めることができるよ」「これから、あなたに適した学び方をプランニングしてみようか？」など、子供に学びの楽しさを伝えることができるように、私たち教員が率先垂範の姿勢を見ることが大切だと考える。

残り数年間の教員生活ではあるが、人間は年齢に関係なく成長し続けると信じて、学びの姿勢を貫く教職員集団をつくり上げたいものである。

校長として、文章をつづるということ

平取町・振内中

矢野 渉

校長となり、明らかに増えたと感じているのが、原稿を書くことである。毎月の学校だよりやPTA広報誌などでの巻頭言、儀式的行事や集会等での校長講話の原稿、町や地区校長会への寄稿等、多岐にわたる。

校長としての原稿となると、学校を代表する立場となって書くため、題材や内容の吟味が必要となる。文章を読んで、「なるほど」と感じさせたり、「そうなんだ」と考えさせたり……。そのためには、多くの本を読み、今必要となる正しい情報を身に付けるほか、歴史的人物の名言などの教養も自分のものとして、身に付けておかななくてはならない。

また、本などから得られることばかりではなく、これまでの自身の経験や様々な人と出会い、会話したことの中から、話の素となるものを見付け出す力も必要である。そして、そうした材料の中から、その時と場に合わせたテーマを選択し、なおかつ、聞き手や読み手の興味を引くような構成、言葉のチョイスで文章をつづる力も不可欠である。

振り返ると、一般教員だった頃、校長講話や巻頭言は、学びの場であつた。社会的な事象に加え、自身の経験談や教え子の話、ときには、流行りのドラマや映画の話題、スポーツ選手の裏話などについて触れることもあり、その守備範囲の広さに驚かされた。様々なことを感じさせられ、多くのことを考えさせられる機会だったことを覚えている。

そう考えると、巻頭言や校長講話は、各校長の学びや教育者としての経験の集大成であり、なおかつそれぞれの生き方や考え方が映し出されるものだとこのことに気づかされた。

今、校長として、書く文章、語る話は、あの頃の私を感じたように先生方、また、生徒や保護者の学ぶ場になっているであろうか。そうした場を提供できるよう、文章をつづる力を高めることに加え、教員として、そして、人として、これからも学び、成長していく必要があると感じた。

古き良き時代を少しだけ伝える

浦幌町・上浦幌中

宮脇 秀士

「額に汗してつくったものは」昭和六十二年、心が折れて就職した一年目、ある企業での新人社員研修で教えられた歌の一節である。

この歌はこう続く。「額に汗して売らねばならぬ」

当時はバブル景気の絶頂、好きなことを思い通りにできた時代だ。教員採用試験に失敗し、教員の道を諦めて企業に入社した私は、社員として過ごしていく中、違和感をもったことを時々思い出す。

歌は更に「涙を流してつくったものは 涙を流して売るものさ」と続く。インストラクターとしての勤務であつたが、会員がいてのスクール、利益があつての会社。というのは理解していたが、会員集めの営業はノルマもあり、よく見る営業実績の棒グラフが張り出され、月末に評価があり、毎日窮屈で嫌な思いでいっぱいだった。

張り詰めていたものが弾けたのは、登校中の子供に会員勧誘の広告配りをしたことだった。結局、上司の机に辞表を置いて辞めた。後先も考えず、若かったからできた行動である。

立場を変えて三〇年、時折、当時のことを思い出すことがある。あんなに違和感をもち窮屈で嫌な思いをしたことで、しばらくは考えたくもなかった経験ではあるが、当時毎日のように歌っていた歌詞の意味は形を変え、その時々都合の良い解釈となり、精神面で自分の支えとなっていることがある。たった一年の経験だが、どこか人としての見方や考え方、行動の礎となっているのだと感じる。

現在、私たちの世界は大きな世代交代が進んでいる。急速に変容する時代、子供たちはもちろん、後進の指導についても多様な考え方を見せながら、それを活用し、環境に合わせていく力を伝えていきたい。

歌はこう結ぶ

「くよくよするなよ セールス嬢

眼下を見おろし この街並で男の舞いを 舞ってみよ」と

社会に開かれた教育課程の実現に向けて

帯広市・第五中

高橋 譲

帯広市中学校長会では、今年度の活動方針を「新しい時代を生き抜く帯広っ子の育成」新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく生徒の育成」と定めた。

本会の研究委員会では、本方針の具現化を目指し、学校経営の骨格となる教育課程に関する研究テーマとして、「社会に開かれた教育課程の実現」を掲げて情報共有を図り、各校の教育課程の充実に努めている。

本稿では、帯広市、帯広市教育委員会、帯広市校長会が市P連や地域の方々と連携・協働して進めている取組の概要を紹介する。

1 帯広市全体の取組

(1) コミュニティ・スクール「令和元年度以降、今年度までに段階的に全小・中・義務教育学校に導入。

(2) 「おびひろ市民学」「学校と地域をつなぎ、ふるさと教育を推進するために、市教委が小中一貫した九年間の教育課程を編成。キャリア・パスポートの活用も包括。

2 各学校の取組から（○成果、◆課題を踏まえた取組）

○組織体制や研修内容が改善し、教職員の意識改革が進んだ。

○小中高連携による教育課程が改善し、生徒の学びが充実した。

○地域との協働や学校からの情報発信が充実し、地域とともにある学校づくりが進んだ。

◆コロナ禍を新しい学びや協働の形を模索する好機に転換した。

◆学校規模による取組の違いを自校の改善のヒントと捉えた。

◆新たな取組と働き方改革のバランスをコアチームで検討した。

コロナ禍が過ぎ去っても、先行きの予測は困難で変化の激しい時代は続く。本会では、今後も社会に開かれた教育課程の充実に図り、地域と総ぐるみで自身と帯広の未来を切り拓く子供の育成に努めていく。

生徒の成長する姿を追いかけて

標茶町・虹別中

水澤 好克

最近、四〇代半ばとなる、最初の卒業生の教え子から電話があった。久しぶりだったので、様々な話をしていたとき、「先生、そういえばこの前、昔のアルバムを整理していたら、懐かしい写真を見付けたよ。先生は行事毎に、私たちに写真をプレゼントしてくれてたよね?」と言われ、約三〇年前のことを思い出した。その頃はまだ、今のようデジタルカメラは普及していなくて、私は三六枚撮りフィルムをカメラに装着し、撮影していた。撮影が終わると、近くの写真屋さんにフィルムを渡して全写真を現像してもらい、そのネガを見ながら、自分のクラス三三人の生徒に渡す写真をチェックし、焼き増しを頼んでいた。

最初は大変な作業だったが、作業を続けるうちに楽しくなってきた。一枚一枚の写真を見ていると、その行事や取組に向き合う様々な表情があった。「喜んで笑っている・怒っている・悔しくて悲しんでいる・本当に真剣である・感動して泣いている…」喜怒哀楽の表情がたくさん詰まっている写真を見ることが、とてもうれしかった。

様々な表情をしていたことを忘れず、写真を見て自分たちの頑張りを振り返ってほしい。そんな願いから、クラスの生徒全員に写真を渡していた。その写真を見たときの、生徒の笑顔や恥ずかしさ・びっくりした表情等が私は大好きだった。「次はどんな表情を見せてくれるかな?」ということ、毎回楽しみにしていたことを思い出した。

このように写真を撮り続けながら、生徒が日々成長している姿を実感できるようになった。今もその頃の習慣は抜けず、頼まれてもいないのに、何か行事等があると無意識にカメラを持っていく。先生方からは、「校長先生、写真は私たちが撮影しますので、特によろしいかと思いますが…」と恐縮されてしまう。「私のことは気にしないでください」と言いながらも、今でも生徒たちの成長する姿を、日々追いかけている。

友達感覚

釧路市・青陵中

岩崎 等

以前、テレビ番組で「自分の子供にどのように呼ばせているか」という調査がありました。昔は、「お父さん」「お母さん」や「パパ」「ママ」が主流でしたが、自分の名前で呼ばせている親が増えているという調査結果でした。その理由は、「友達感覚でいたいから」が最も多いようです。どう呼ばせてもかまいませんが、実質的な親子関係が「友達感覚」だしたら問題があるのではないかと思います。

子供に対して親として大切なことは「教える」「褒める」「叱る」行為を適切な場面でタイミングよく行うことです。子供の躰はゼロ歳から始まると言われています。親から言われている言葉としては理解できませんが、そのときの口調や表情からその内容は察することができます。繰り返す行いにより分かっていくことができます。もし、親子関係が「友達感覚」だしたら。極論かもしれませんが、ただ単に友達同士の「一緒に楽しむ」関係であるとしたら、もし意見が食い違えば、それぞれの考えを主張し、まるで子供同士のけんか状態になることが予想されます。友達（友達感覚の親を含めて）の言うことをそのまま聞くということは、子供がまだ小さいときはいいいのですが、子供の成長とともに少なくなってくるかと思います。

親子の関係を学校に置き換えてみるとどうでしょうか。単純に置き換えることはできませんが、もし教師と児童生徒の関係が「友達感覚」の関係だしたら。教師として子供の言動を捉えて、タイミングよく「教える」「褒める」「叱る」ことがやはり大切なことだと思います。また、このことは、管理職と先生方との関係にも言えることかもしれません。

バーチャルと現実

別海町・上風連中

岡部 臣也

少年団で指導者をしていた時、練習のために子供たちと一緒に自転車に乗り始めた。少年団の指導から離れた今でも趣味として自転車に乗っている。年に数回サイクリングイベントにも参加していたが、コロナ禍となり最近では、Z W I F T（ズイフト）というバーチャルサイクリングソフトを使つて室内で乗ることがほとんどとなった。

自転車とパソコンをつなぎ、現実世界のペダルを回すとパソコンの中のアバターが自転車を漕ぎ前進する。坂道になればペダルも重くなり、下り坂になれば軽くなる。バーチャルな世界と現実世界をリンクさせ、世界のようなコースを走ることができるのである。昨日は、ロンドンの街中を通り抜け、テムズ川を渡った。その前は、セントラルパークを八の字に走った。室内でたった一人で乗ついても画面上では世界各国の多くのライダーと一緒に走ることができるのである。天候に影響されることもなく、接触など事故のリスクも回避できる。

現実には存在しない仮想空間をつくり出し、体験する「バーチャルリプレイ」は教育においても、その活用の可能性が期待されている。写真や映像で見せるよりも、自分がその空間にいるような没入感があり、且つ自分の視点が制限されないため、子供たちはより興味をもって、自主的に活動に参加するようである。子供たちが能動的に授業に参加する姿勢は、子供たちの学習成果にも影響をもたらすといわれている。バーチャルリプレイで体験できる臨場感は教育の現場でも大いに生かすことができそうである。

先日、久しぶりに屋外で自転車に乗った。紅葉が進む山々を見ながら風を切つて走る爽快感は、バーチャルでは味わうことのできない感覚であった。バーチャルの世界がより身近に、よりリアルになつてくる程、現実で体験することの重要性が高まると実感することになった。

二人の師

網走市・第四中

高橋龍彦

いざ決断というとき、私には頼りになる二人の師がいる。自分が勝手に師と仰ぎ、模範とさせていただけなのだが。お一人は北海道出身で小学校教諭として、ソフトテニス部のコーチとして全国的な活躍をされた安藤英明先生、もうお一人は静岡で学校教育に御尽力された鈴木恵子先生のお二方だ。安藤先生との出会いは、私が教師としての何たるかも分からずにいた頃のこと。ただその素晴らしい実践の結果に魅せられ（自分も何とか同じ結果を残したい）と、強く憧れていた。鈴木先生との出会いは、自分が教頭となり、学校を運営する難しさの片りんを感じ始めていたときで、網走小学校さんを会場としての学校力向上事業の講師として来道された折のことだ。お二人との出会いは、いずれも講演会がきっかけなのだが、講演で頂いた御指導は教員の私に強烈な印象として残り、教員として歩んでいくとき、常に道標として目の前にあった。（特に安藤先生）

今、校長として学校を任された立場で安藤先生の実践、鈴木先生の指導を見つめ直してみると、若いときには気付かなかった言葉の意味がようやく伝わってくる。管理職としての立場の役割がやつと見えてくる。

「子供の立場に立つて考えられる」（安藤先生）

「教育とは、与えたり、教え込んだりすることではなく、引き出す営みである」（鈴木先生）

（あのとときに気付いていれば）

そう思う自分が、今、管理職として、（昔の自分）みたいな教員を目の前にして見守っている。もしかしたらこの状況は、私が敬愛するお二人の師からのメッセージではないのだろうか。「今の学校の状況を先生方の立場に立つて考えてあげなさい」「与えたり、教え込んだりするのではなく、引き出してあげなさい」（若い先生につないでいきたい）

漕ぐ

札幌市・北野中

乙坂誉日

「そうだ 京都、行こう」は、かつてJRがキャンペーンで使ったキャッチコピーだった。そして四年前の私は、なぜか「そうだ 自転車、買おう」と思い立ったのだ。

二〇代の頃からお世話になっている先輩のなじみの店で、ちょっといいロードバイク一式をそろえた。先輩はトライアスロンの競技経験もち、今までにも「マラソン出よう」「自転車買おう」と何度もお誘いを受けては断ってきた相手である。あれだけ断ってきた私が、急に自転車を購入すると相談したので、さぞかし不思議に思ったことだろう。

私にとつても、五〇歳を過ぎてからまさかのロードバイクである。しかし、これが新たな趣味になっている。週末に三〜四時間、郊外の車の少ない道を選んで走ることが多い。日差しが強かるうが、向かい風であろが、ひたすら漕ぐ。信号待ちや水分補給、汗の処理以外はとにかく漕ぐ。自分で漕いで帰ってくるしかないのが当然であるが、これが案外快適である。車で走るときには気づかない景色に感動するとか、新たな人脈ができて刺激を受けるとか、期待しないわけではなかったが、結局一人で漕いでいることが心地よい。

そういえば、かつて三〇歳を間近にしてウインドサーフィンに熱中した時期に味わった感覚にも似ている。あの頃も、海に出てしまえば波や風に揉まれながら、ボードやセイルを操るのは自分一人だった。自分のペースで事に当たるのが性に合うのかもしれない。

休日にはよく運動し、気分もリフレッシュできるせいか、日々の業務にも意欲的に取り組んでいるようだ。ただ、学校経営が「自転車操業」となつては困るし、何より週明けの校長室で、一人「船を漕ぐ」ことだけはないように気を引き締める日々である。

令和４年度 一般会計予算

収入の部

(単位：円)

科 目	令和3年度（補正予算）		令和4年度 予算額	予算額比較		備 考
	予 算 額	決 算 額		増	減	
１．会 費 収 入	29,430,000	29,430,000	35,024,400	5,594,400		単置校5,400円×516校×12か月＝33,436,800 併置校2,700円× 49校×12か月＝ 1,587,600
２．繰 越 金	4,054,331	4,054,331	6,093,708	2,039,377		
３．雑収入・特別会計	50	10,102	50		0	銀行利息
計	33,484,381	33,494,433	41,118,158	7,633,777		

支出の部

科 目	令和3年度（補正予算）		令和4年度 予算額	予算額比較		備 考
	予 算 額	決 算 額		増	減	
研究大会費	4,407,000	4,175,000	8,787,000	4,380,000		
１．大会運営費	100,000	0	3,000,000	2,900,000		研究大会実行委員会による大会運営費（担当地区決算）
２．研究活動費	4,157,000	4,157,000	4,587,000	430,000		各地区の研究活動補助費（3,000円×469校）＋札幌3,180,000
３．旅 費	150,000	18,000	1,200,000	1,050,000		役員・司会・提言等旅費
研究調査費	1,700,000	1,180,932	1,850,000	150,000		
１．旅 費	1,250,000	769,100	1,400,000	150,000		ブロック研修費、地区教育経営研究会、地区交流等旅費
２．印刷製本費	297,000	264,616	297,000			学校経営の資料
３．通信運搬費	53,000	47,216	53,000			上記送料
４．賃 金	100,000	100,000	100,000			調査アンケート作成等筆耕料
研究物刊行費	2,100,000	1,860,812	2,060,000		40,000	
１．印刷製本費	1,800,000	1,618,526	1,800,000			道中だより、全道中、法制研集録、実態/調査報告書
２．通信運搬費	300,000	242,286	260,000		40,000	上記送料
事務局費	25,277,381	20,183,981	28,421,158	3,143,777		
１．借 損 料	3,640,000	3,064,018	3,445,000		195,000	事務所賃貸料、会議会場費、機器リース料、車借上げ料等
２．給料・手当	5,270,000	5,268,880	5,270,000			専任職員給与、手当
３．退職・社保	1,136,000	1,121,739	1,136,000			社会保険料、雇用保険料、退職積立金
４．備 品 費	0	47,140	60,000	60,000		事務所備品
５．印刷製本費	810,000	803,415	880,000	70,000		総会要項、運営要綱、感謝状、要望書、提言書、役員名刺等
６．通信運搬費	920,000	824,186	860,000		60,000	電話代、郵券、託送料、振込料金
７．消耗品費	440,000	400,358	440,000			用紙代、封筒、購読料、プリントナーインク、その他事務用品
８．慶 弔 費	110,000	151,675	90,000		20,000	退職・退会役員記念品、祝電、香典、供花
９．賃 金	200,000	200,000	200,000			筆耕料、印刷賃金
１０．渉 外 費	650,000	158,610	800,000	150,000		関係機関総会・研究大会参加費、外郭団体会議、広告料、食糧費
１１．負 担 金	4,220,000	4,153,880	4,220,000			全日中会費、交通安全協会、旧北方圏、社明運動、道P連他
１２．旅 費	4,160,000	1,291,330	7,300,000	3,140,000		総会、理事研修会、事務局研修会、全日中総会・研究協議会
１３．送 金 費	80,000	80,000	80,000			会費等地区からの送金手数料補助費（各地区 4,000円）
１４．雑 費	41,381	18,750	40,158		1,223	会議用お茶代、両替料他
１５．予 備 費	3,600,000	2,600,000	3,600,000			
計	33,484,381	27,400,725	41,118,158	7,633,777		

令和4年度 北海道中学校長会役員・理事

会 長	野崎 均 緑陽中 (登別市) 0143-85-5409	副 会 長	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
			藪 智樹 東中 (余市町)	藤田 智哉 留萌中 (留萌市)	玉置 英樹 厚沢部中 (厚沢部町)	野崎 均 緑陽中 (登別市)	本川 敬一 幣舞中 (釧路市)	◎越田 公美 東月寒中 (札幌市)
事 務 局 長	笹川 恒春 北栄中 (札幌市) 011-731-0264 直 011-742-5597	事 務 局 次 長	三浦 英悟 琴似中 (札幌市) 011-611-1351	事 務 局 次 長	森田 聖吾 忠和中 (旭川市) 0166-61-5300	会 計 理 事	村上 俊一 向陽中 (小樽市) 0134-23-8158	
運 営 委 員 長	新津 智哉 西陵中 (札幌市) 011-662-9323	運 営 委 員	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
			岡本 清豪 北陵中 (小樽市)	田中 幸治 小平中 (小平町)	長谷川秀雄 桔梗中 (函館市)	盛永 明寿 浦河第一中 (浦河町)	水野 秀哲 富原中 (釧路町)	新津 智哉 西陵中 (札幌市)
部	副会長 (事務局)	部 長	部 員			副部長	幹 事	
経 営	玉置 英樹 厚沢部中 (厚沢部町)	畠山 学 江別第三中 (江別市)	袈田佳奈恵 剣淵中 (剣淵町)	佐藤 雅博 巴中 (函館市)	橋本 靖宏 幕別中 (幕別町)	小森 享 西部中 (北広島市)	前田 真志 柏陽中 (恵庭市)	中村 和男 共和中 (共和町)
	森田 聖吾 忠和中 (旭川市)		緒方 隆人 北中 (北見市)					
研 修	藪 智樹 東中 (余市町)	秀島 起也 中央中 (札幌市)	伊藤 仁弥 望洋台中 (小樽市)	工藤 亘 中央中 (旭川市)	石川 宏司 森中 (森町)	吉本 将樹 稲穂中 (札幌市)	田丸 明史 手稲西中 (札幌市)	高橋 正幸 平岡中 (札幌市)
	三浦 英悟 琴似中 (札幌市)		小嶋 範彦 静内第三中 (新ひだか町)	佐藤 毅 遠矢中 (釧路町)				
対 策	藤田 智哉 留萌中 (留萌市)	伊藤 聡 栗沢中 (岩見沢市)	柴田 真琴 岩内第一中 (岩内町)	亀田 寛人 増毛中 (増毛町)	福井 順一 江差中 (江差町)	河村 克也 東光中 (岩見沢市)	坂本 征人 一巳中 (深川市)	小泉 寧 南幌中 (南幌町)
	村上 俊一 向陽中 (小樽市)		藤崎 禎人 帯広第二中 (帯広市)	松岡 伸之 景雲中 (釧路市)				
情 報	本川 敬一 幣舞中 (釧路市)	瀧澤 義守 虻田中 (洞爺湖町)	細谷 隆志 浜頓別中 (浜頓別町)	齋藤 征志 光洋中 (根室市)		山田 誠一 早来中 (安平町)	鏡 武志 青翔中 (苫小牧市)	高橋 泰明 東明中 (室蘭市)
	笹川 恒春 北栄中 (札幌市)							
事 務 所	北海道中学校長会事務所 〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目 敷島プラザビル T E L : 011-251-1344 F A X : 011-251-1302 E-mail : dotyu-kotyokai@bz04.plala.or.jp						事務主事	尾崎 基
							会計主事	高橋 寿輔

表紙に寄せて

「中島公園（菖蒲池）」と全日中研究大会会場」

札幌市・北都中

小川 厚 志

大会主題を「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」として、第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会が、オンライン形式で行われました。全国の皆様とお会いすることはできませんでしたが、全体協議会や分科会を通して協議・交流し、アトラクションではアイヌ文化を御紹介し、講演会では今求められる社会の見方に御示唆を頂いて実りの多い大会となりました。

さて、表紙は札幌中島公園の原点となる菖蒲池です。市の中心部にありながら春は桜や藤、秋は紅葉と四季折々の景色が楽しめる自然豊かな公園です。園内には日本庭園が施され江戸の茶人小堀遠州設計の茶室もあつて風情を感じます。また、明治政府が建てた洋式ホテルである豊平館、重厚なパイプオルガンを擁する音楽専用ホール「K i t a r a」が建てられ、文化や芸術の拠点として市民に親しまれています。

背後に見えるホテルライフオートが、この度の全日中研北海道（札幌）大会のメイン会場でした。ここから全国へオンライン配信し、成果を感じながら全日程を終えることができました。これは、道中関係の皆様をはじめ、参加いただいた皆様の御支援の賜物と受け止めております。札幌市中学校長会一同、心より感謝申し上げます。

編集後記

令和四年度版会誌「全道中」第92号が、皆様の多大なる御協力によりできあがりました。ここにお届けいたします。

北海道教育委員会教育長 倉本博史様、北海道立教育研究所長 櫻井良之様の「潮流」への御寄稿をはじめ、「特集」では、三人の会員の皆様から先進的な実践について御寄稿いただき、テーマに迫ることができました。

また、北海道中学校長会役員・理事、各地区役員をはじめ、多くの会員の皆様に御協力をいただき、各地区の活動や風土紹介、論考、文芸など多彩な内容を掲載することができました。会員の皆様の職能向上や広

い北海道の教育情報源の一助となれば幸いです。
最後になりますが、新型コロナウイルス感染症対策、そして、学びの保障に向けた取組を推進する中、快く御協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

全道中 第92号

発行 令和五年三月一日

発行者 北海道中学校長会

会長 野崎 均

札幌市中央区北一条西三丁目

札幌プラザビル内

電話（〇一一）二五一一―一三四四

FAX（〇一一）二五一一―一三〇二

編集 北海道中学校長会情報部

印刷所 佐藤印刷株式会社

札幌市北区北七条西八丁目一

電話（〇一一）七二六―一三三四五

北海道中学校長会の歌

清水 弘 作詞
上元 芳男 作曲

北海道中学校長会の歌

Moderate mp

どーう こくーの いくさ をこえーて あた
ら いへーの きぼう ゆたけーく わ

mf

たーらしーき じだい をひらく おさ
のーもしーき わかき せだいの の

mf

お い な る ねが い に も え て われ
ち お お き みよの あけぼ の われ

mf

ら たち た り われら たち た り
は た さ ん われら は た さ

mp

い く せーいそーう ひ と は か わ れ ど

mf

きょーう い く の し め い ひ と す じ

mf mp

さ く ほ く に り そ う か か げ て わ れ ら つ ど え り み D.S.

f molto rit div

ん 道 中 道 中 は え あ れ 道 ～ 中

慟哭の いくさを越えて

新しき 時代を拓く

大いなる 理念に燃えて

吾ら 起ちたり(くり返し)

幾星霜 人は変れど

教育の 使命一筋

朔北に 理想かかげて

吾ら 集えり

未来への 希望豊けく

頼母しき 若き世代の

幸多き み代のあけぼの

吾ら 果たさん(くり返し)

道中 道中

栄あれ 道中